博 士 論 文

女子教育における化粧の役割
―〈少女〉に求められた化粧の歴史―
(The Role of Cosmetics within the Modern Education of Young Women: A Short History of “Girls and Cosmetics”)

2016 年 3 月

立命館大学大学院先端総合学術研究科

先端総合学術専攻一貫制博士課程

小出 治都子

立命館大学審査博士論文

女子教育における化粧の役割
―〈少女〉に求められた化粧の歴史―
（The Role of Cosmetics within the Modern Education of Young Women: A Short History of “Girls and Cosmetics”）

2016 年 3 月

March 2016

立命館大学大学院先端総合学術研究科

先端総合学術専攻一貫制博士課程

Doctoral Program in Core Ethics and Frontier Sciences

Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences

Ritsumeikan University

小出 治都子

KOIDE Chitoko

甲号：研究指導教員：竹中　悠美准教授

Supervisor：Associate Professor TAKENAKA Yumi

目次

序章　本論の目的と構成　・・・・・p.1

第1章　前近代の理想像と化粧　・・・・・p.6
第１節　女子用往来からみる女性の理想像と化粧　・・・・・p.7
1-1　女子用往来について　・・・・・p.7
1-2　『和俗童子訓　巻之五　教女子法』　・・・・・p.8
1-3　『女重宝記』　・・・・・p.11
第２節　『都風俗化粧伝』からみる化粧　・・・・・p.13
2-1　『都風俗化粧伝　巻之上』　・・・・・p.14
2-2　『都風俗化粧伝　巻之中』　・・・・・p.17
2-3　『都風俗化粧伝　巻之下』　・・・・・p.22
2-4　『都風俗化粧伝』の挿絵　・・・・・p.25
第３節　近世後期の女子用往来からみる化粧と女性の理想像の変化　・・・・・p.31
3-1　弘化版『女重宝記』　・・・・・p.31
3-2　その他の女子用往来　・・・・・p.32

第２章　「良妻賢母」の二分化と化粧の役割　・・・・・p.36
第１節　衛生概念について　・・・・・p.36
第２節　健康美によって回避される身体の二分化　・・・・・p.37
第３節　美容家の存在―遠藤波津子を例に―　・・・・・p.38
3-1　遠藤波津子とは　・・・・・p.39
3-2　『化粧と着付』と『正しい化粧と着付』　・・・・・p.40
3-3　『都風俗化粧伝』との比較　・・・・・p.46

第３章　女子教育における理想像　・・・・・p.48
第１節　高等女学校における修身　・・・・・p.48
1-1　修身教科書の三系統　・・・・・p.49
1-2　井上哲次郎による修身教科書　・・・・・p.50
第２節　女子教育論における美育について　・・・・・p.59
第３節　女子教育論における化粧　・・・・・p.63
3-1　三輪田眞佐子と下田歌子の女子教育論にみる化粧に対する考え方・・・・・p.63
3-2　少女雑誌の化粧記事　・・・・・p.66

第 4 章　化粧品会社による商品開発と宣伝方法　・・・・・p.69
第 1 節　化粧品会社の概要と販売した化粧品　・・・・・p.70
1-1　資生堂　・・・・・p.70
1-2　平尾賛平商店　・・・・・p.71
1-3　中山太陽堂　・・・・・p.72
第 2 節　化粧品会社の宣伝方法と販売経路　・・・・・p.73
2-1　資生堂　・・・・・p.74
2-2　平尾賛平商店　・・・・・p.75
2-3　中山太陽堂　・・・・・p.78
第 3 節　各化粧品会社と「少女」たち　・・・・・p.80

第 5 章　少女雑誌の化粧品広告における理想の少女像　・・・・・p.88
第 1 節　「少女」の創出と少女雑誌というメディア　・・・・・p.88
第 2 節　平尾賛平商店と中山太陽堂の化粧品広告　・・・・・p.90
2-1　平尾賛平商店のレート化粧品広告　・・・・・p.90
2-2　中山太陽堂のクラブ化粧品広告　・・・・・p.94
第 3 節　平尾賛平商店と中山太陽堂が提示した「少女」の理想像　・・・・・p.98
3-1　平尾賛平商店のレート化粧品広告における「少女共同体」　・・・・・p.99
3-2　レート化粧品広告の挿絵画家について　・・・・p.102
3-3　中山太陽堂のクラブ化粧品の広告における「少女」像　・・・・p.103
3-4　化粧品広告の受け手としての「少女たち」　・・・・p.105

終章　本論の総括　・・・・p.107

参考文献　・・・・p.112

※史料の引用にあたって、仮名は原文のまま、漢字の旧字体は新字体に改めた。

序章　本論の目的と構成

1980 年代半ばの教育改革で進められた「ゆとり教育」に対して、2011 年の学習指導要領改訂から見直しが始まったが、「ゆとり教育」が基本理念として掲げた「個性重視」の傾向は、小・中・高いずれの教育においても継続されている。ひとりひとりの個性を活かすことを掲げながらも、その一方で中高生が化粧をしたり髪を染めることを多くの大人たちは好ましく思わない。文部科学省の中学校学習指導要領でも高等学校学習指導要領でも化粧や髪染めについては触れられていないにもかかわらず、とりわけ私立の女子中学校や女子高等学校の多くは校則で厳しく禁じている。

ところが、近代教育が始まった明治期、そしてそれに続く大正期から昭和の初期において、女学校では化粧が容認されていたばかりか、女学生は化粧をすべきものだという考えさえあったという。当時の女学生の化粧とはどのようなものだったのだろうか。そして、女子教育において、化粧はどのように考えられ、どのように教えられていたのだろうか。またそれはどのような理念にもとづくものであったのだろうか。このような問いを出発点とする本論は明治期と大正期を中心に女子教育における化粧の役割について、その歴史的変遷をたどりながら考察するものである。

古代から人間と共に存在する化粧という行為や文化を取り上げた文献は枚挙にいとまがないが、本論の執筆にあたり、筆者が注目した先行研究の動きは、日本において 1970 年代に「化粧文化」という言葉を掲げて始まった文化的社会的な行為としての化粧研究である[1]。その発案者は、化粧品会社のポーラ（現 POLA）が設置した文化研究所の主席研究員、村澤博人である。それまで、化粧品会社よる化粧文化の研究は化粧品の宣伝を目的としていたという。そのため昭和 54（1979）年に研究誌『化粧文化』を発刊したときに、それまでの化粧品販売促進を目的とする PR 誌とは違うことを意識した、と村澤は語っている[2]。さらに、1980 年代になると、学際的な研究分野として「化粧学」が唱えられるようになる。村澤は「化粧とは人間にとって何なのか」という問いかけを、自らが編集した『化粧文化』の巻頭で述べている。この「人間」と「化粧」の関わりについての研究を、西洋ファッション史研究者の石山彰は「化粧学そのものの出発点であると同時に帰結点でもあるはず」とし、「こうした本質論への問いかけは、多様化時代とか多極化時代と呼ばれた“七〇年代”の特徴」とも述べている[3]。

化粧学が唱えられて以降、さまざまな研究分野で化粧が研究されるようになった。社会心理学者の南博は、化粧学の研究分野について自然科学的研究（化粧医学、化粧技術学、

---

[1] 村澤博人「「化粧」という文化」東洋大学井上円了学術センター編『Satya：サティア：あるがまま』44 号、2001 年、pp.20-23。
[2] 同上書、p.20。
[3] 石山彰「「化粧学」のすすめ（2）―装身文化としての化粧―」ポーラ文化研究所『化粧文化』No.7、1982 年、p.8。

化粧品学）[4]、社会科学的研究（化粧経済学、化粧政治学）[5]、人間科学的研究（化粧心理学、化粧社会学、化粧人類学、化粧史学）[6]と大きく 3 つに分けている[7]。

その中でも、化粧史学の分野では、古代から近世までの化粧文化を考古遺物や歴史資料から論じたことを皮切りに、化粧史や化粧文化論の研究が盛んとなる[8]。また、村澤たちによって近世までの化粧に関する記述が登場する文学や資料をまとめられ始めた[9]。近世の化粧については、ポーラ文化研究所や風俗史研究者の陶智子が、浮世絵などの絵画資料に描かれた化粧の様子を研究している[10]。また、風俗史研究者の高橋雅夫は昭和 57（1982）年に近世に刊行された化粧書『都風俗化粧伝』を復刻し、解説を加えて刊行した[11]。さらに、平成 12（2000）年には『都風俗化粧伝』と並び、近世日本の三大化粧書とされた『容顔美

---

[4] 自然科学的研究の先行研究として、日本美容医学研究会編『日本美容外科学会誌』no.1ー、1979 年ー刊行継続中、池田鉄作『化粧品学』、南山堂、1957 年、光井武夫『新化粧品学』、南山堂、1993 年などが挙げられる。

[5] 社会科学的研究の先行研究として、ラコフ、ロビン・T、シェール、ラクェル・L、『フェイス・ヴァリュー：美の政治学』（南博訳）、ポーラ文化研究所、1988 年、文宣景「化粧品と化粧行動の学際的研究」、平成 26 年度大阪大学大学院博士論文、2015 年などが挙げられる。

[6] 人間科学的研究の先行研究として、大坊郁夫編『化粧行動の社会心理学：化粧する人間のこころと行動　シリーズ 21 世紀の社会心理学 9』、北大路書房、2001 年、谷本奈穂『美容整形と化粧の社会学：プラスティックな身体』、新曜社、2008 年、米澤泉『コスメの時代：「私遊び」の現代文化論』勁草書房、2008 年、山本芳美『イレズミの世界』、河出書房新社、2005 年などが挙げられる。また、近年は、谷本奈穂「化粧品広告における身体のイメージ：美の問題を中心に」、平成 13 年度大阪大学大学院博士論文、2001 年、石丸久美子「日仏化粧品広告の比較研究:ディスクール分析の観点から」、平成 18 年度大阪大学大学院博士論文、2006 年や、アブドゥル・ラザック、シティ・ハジャ「ファッション雑誌の化粧品広告におけるオノマトペについて」『人間文化創成科学論叢』16 号、2014 年、臧薇「日中米雑誌化粧品広告ディスコースの対照研究」、平成 26 年度九州大学大学院博士論文、2014 年など化粧品広告を分析した研究も多くみられる。

[7] 南博「化粧学のすすめ（3）」ポーラ文化研究所『化粧文化』No.9、1983 年、pp.1-11。

[8] 久下司『化粧（ものと人間の文化史 4）』、法政大学出版局、1970 年、江馬務『江馬務著作集第四巻　装身と化粧』、中央公論社、1976 年、樋口清之『化粧の文化史』、国際商業出版、1982 年、などが挙げられる。

[9] 村澤博人・津田紀代編『化粧史文献資料年表』、ポーラ文化研究所、1979 年。

[10] ポーラ文化研究所編『ポーラ文化研究所コレクション 5　浮世絵美人くらべ』、ポーラ文化研究所、1998 年、陶智子『江戸美人の化粧術』、講談社、2005 年。

[11] 高橋雅夫校注『都風俗化粧伝』、平凡社、1982 年。

艶考』と『化粧眉作口伝』が資生堂企業資料館によって復刻されている[12]。また、近代から現代にかけての日本の化粧文化については、ポーラ文化研究所の村田孝子や資生堂企業資料館、身体文化論の石田かおり、化粧心理学者の平松隆円などによって論じられている[13]。

他方、女学生に限らず就学期の少女が化粧をしていた事実については、近代の化粧文化研究において見出せるものの、「少女の化粧」に特化してその実態調査や歴史的変遷を調査した研究は見あたらない。それは、これまでの先行研究において、化粧をする中心的な存在とされていたのが成人女性、いわゆる「婦人」であったからに他ならない。そして、少女の化粧の実態がつかめないため、化粧文化研究における少女の化粧は論じられてこなかったといえる。このように、化粧文化研究の中で少女の化粧という問題は見過ごされてきたかのようではあるが、隣接分野では女学生が化粧をしていたことはたびたび言及されてきた。日本文化研究者の川村邦光は、「化粧は、たとえ女学校で禁止されようとも、少なくとも都市部に住む若い女性にとって、日常茶飯事のこととなっていった」[14]と述べている。女学校で禁止されていたという見解については熟考が必要だが、化粧が女学生にとって日常的なものであったことが示されている。日常的に化粧を行なっていた理由として、まず身だしなみに包含されていたことが挙げられるが、他にも大きな理由が先行研究の中で提示されてきた。それが結婚である。風俗史に通じた作家の黒岩比佐子は、女学校に通いながらも美人が早々に結婚していくことから、美貌が幸せな結婚に結びつくことを挙げ、当時の令嬢たちが美顔術を受けたり最新の化粧品を試したりすることで美人になる努力をしていたと述べている[15]。このような指摘は、黒岩に先んじて風俗史研究者の井上章一の『美人論』でも行われていた。そこでは、女子教育で重視されていた「修身」の授業において、美人と不美人の差異が公然と論じられていたという[16]。

当時の女子教育の理念は良妻賢母主義に基づいていた。「良妻」と「賢母」という女性の理想像は前近代から存在していたが、近代国家としての明治期の日本において、昭憲皇太后をモデルとした「良妻賢母像」[17]が女子教育における強力な規範として再構築され、女学生に大きな影響を及ぼしていた。また「女学生」や「少女」についても、それらが明治期

---

12 資生堂企業資料館『復刻版「化粧眉作口伝」「都風俗化粧伝」「容顔美艶考」』、2000 年。

13 村田孝子編著・駒田牧子翻訳『近代の女性美 ： ハイカラモダン・化粧・髪型 = Female beauty in modern Japan：makeup and coiffure』、ポーラ文化研究所、2003 年、資生堂企業資料館編『研究紀要おいでるみん　化粧文化特集号　日本の化粧文化―明治維新から平成まで―』、2002 年、同『日本の化粧文化：化粧と美意識』、2007 年、石田かおり『化粧と人間――規格化された身体からの脱出』、法政大学出版局、2009 年、平松隆円『化粧にみる日本文化―だれのためによそおうのか？―』、水曜社、2009 年が挙げられる。

14 川村邦光『オトメの祈り―近代女性イメージの誕生―』、1993 年、p.151。

15 黒岩比佐子『明治のお嬢さま』、角川学芸出版、2008 年。

16 井上章一『美人論』、朝日新聞社、1995 年、p.20。

17 若桑みどり『皇后の肖像―昭憲皇太后の表象と女性の国民化』、筑摩書房、2001 年。

の近代化の過程において創出された記号や新しいカテゴリーであることが、近年の少女文化研究やジェンダー論を中心に盛んに論じられている。例えば、本田和子や今田絵里香は、近代教育制度は大人と子どもの間に「青年期」や「少年期」という就学期間を創出し、さらに就学期にありながら男性ではない者として「女学生」や「少女」というカテゴリーが生まれたとする[18]。また渡部周子は「少女」期を出産可能な身体を持ちつつも就学期であることを理由に結婚および出産を猶予されていた特別な期間と考える[19]。しかし、それら近代の少女研究においても「少女の化粧」に焦点を絞った研究は見当たらない。

よって本論では、上記のような少女文化研究やジェンダー論の議論も踏まえて、化粧文化史の視点から明治・大正期の少女の化粧を考察していく。そのために、教科書や教育論、化粧の指南書や少女向け雑誌といった文献を主要な資料とし、現代の女子教育においてはネガティブに受けとめられ排除されがちな化粧が、近代女子教育の黎明期においては新しい「少女」像の形成に重要な役割を担っていたという仮説を立て、その仮説を検証しながら、その役割とその役割を機能させていた諸々のシステムを詳らかにしていく。ただし、調査対象は明治に先立つ近世から始め、昭和初期までとする。というのも、江戸後期の化粧文化と明治以降のそれとの連続性と差異を一つの論文の中で論じることは化粧史研究のうえで非常に重要であると考えられる一方、昭和 6（1931）年の満州事変に始まる十五年戦争の時代に入ると戦時色のもとで化粧文化が自粛を余儀なくされるため、ここを一つの区切りとする。

本論の構成は次のとおりである。

第 1 章「前近代の理想像と化粧」では、近代以前の化粧指南として、近世の化粧文化について「女子用往来」と呼ばれる女子用の教育書と化粧法を指南する「化粧書（けわいしょ）」の内容を本論の目的に即して確認していく。中でも『都風俗化粧伝（みやこふうぞくけわいでん）』は高橋雅夫や資生堂企業文化博物館が復刻したように、近世の化粧文化を知るうえで重要な文献である。しかしながら、『都風俗化粧伝』の内容分析は試みられているものの、その化粧法や根底に理念として理想の女性像がどのような部分が近代では捨象され、どのような部分が近代にまで影響を与えたかという考察は行われていない。そこで本論では、以上のような観点から『都風俗化粧伝』の記述と挿絵の両面から分析を試みる。

第 2 章「『良妻賢母』の二分化と化粧の役割」では、まず「良妻賢母」の「賢母」として国民の生産と維持という役割を果たすために、近代になって導入された「衛生」概念が教育にもたらされたことを確認する。次に「母としての身体をもつ」女性であることと、母となるに先だって結婚するために「男性にとって魅力的な身体をもつ」女性であることという、女性の 2 つの存在を示し、その解決策として普及したと考えられる、当時の「美容

---

[18] 本田和子『女学生の系譜　彩色される明治』、青土社、1990 年、p.178。
今田絵里香『「少女」の社会史』、勁草書房、2007 年。

[19] 渡部周子『〈少女〉像の誕生――近代日本における「少女」規範の形成』、新泉社、2007 年。

家」の著書における化粧法を明らかにする。

第 3 章「女子教育における理想像」では、上記の「良妻賢母」における二分化について、学校教育の観点から考察する。「良妻賢母」の矛盾について最も影響を受けた存在が、高等女学校に通う「女学生」たちであった。まず高等女学校で「良妻賢母」思想や「衛生」について教授する修身という授業とそこで用いられる教科書を分析する。次に「衛生」と同じく西洋から導入された教育概念として「美育」に注目し、欧米の「美育」が日本で受容される過程で、どのようにその目的と対象が変遷していくかを明らかにする。さらに、美育も取り入れて初期の女子教育制度を形成していった女性教育者たちの著述を検証して、彼女たちが化粧をどのように捉えていたかを明らかにする。また、教育者達が少女雑誌というメディアを通じて、直接「少女」たちに与えていた化粧に関する助言も考察し、女子教育が目指した理想の少女像」にどのような化粧が認められていたのかを詳らかにする。

第 4 章「化粧品会社による商品開発と宣伝方法」では、まず明治期に設立した主要な化粧品会社である資生堂、平尾賛平商店、中山太陽堂の概要と、それぞれがいかなる商品が発売し、どのような販売経路とマーケティング戦略が取っていたかをそれぞれの社史や当時の化粧品産業に関連した資料から調査する。それによって化粧品会社はまず「少女」たちを重要な購買層として想定していたことを確認し、さらに、販売商品には前章で考察した女子教育者の化粧観が反映されていた可能性を提示する。それによって当時の化粧品会社がどのように女子教育における化粧と「少女」たちの化粧の実践とを具体的に結びつける役割を担っていたのかを考察する。

第 5 章「少女雑誌の化粧品広告における理想の少女像」では、まず少女雑誌という少女向けマスメディアが「少女」の形成にいかに重要であったかを示したうえで、代表的な少女雑誌『少女の友』に明治 41（1908）年から昭和 4（1929）年までに掲載されていた平尾賛平商店のレート化粧品と中山太陽堂のクラブ化粧品の雑誌広告における人物像を分析する。広告に描かれた人物像は幼児から成人女性と年代やタイプが多様であり、時期によって偏向も認められる。また図像に添えられた女学生特有の言語表現も分析すると、良妻賢母主義にとっての理想の少女像だけでなく、少女のコミュニティにおける理想的関係も表象されていること、さらに時代を下るにつれてモダンガールのように良妻賢母主義から逸脱した女性像も表象されていることが確認できる。本論で取り上げた近代女子教育と時期を同じくする雑誌広告の図像を視覚資料として検証することで、女子教育における少女と化粧の関係に別の視点を提示する。

最後に終章として、「少女」を取り巻く女子教育、少女雑誌、化粧品会社、美容家の関係を総括し、現代の別の視点から改めて全体をふり返る。

「女学生」や「少女」という限定されたグループに「教育」という目的で与えられたテクストとイメージから、実像なき彼女たちの化粧文化を読み取ろうとする本論の試みが、近代の化粧文化研究と少女文化研究を結びつけ、双方にとって基礎的資料の一つを提供できることを願う。

第１章　前近代の理想像と化粧

近世日本の教育機関や教科書の研究で知られる教育史学者、石川松太郎によると、古来より、女子の教育は「みやびやかな朗らかな女性」になることを目的とし、青少年期の女性が結婚生活へはいるまでの準備として行われてきた[20]。近世すなわち江戸時代になると、①道徳教育の分野を主とし、儒教哲学を背景として発達したもの、②躾、身だしなみの分野を主とした伝統的な女子教育、③封建社会の再組織に伴う新しい社会情勢に即したものの三源泉から女子教育の理念とその内容が構築された。このうち、③を基因として作られ近世初期から普及したのが女子用往来である[21]。近世の女子用往来は百科事典のようなもので、結婚前の女性が、結婚後どのように暮らしていくべきかを説いたものであった[22]。日本教育史を研究する小山静子は、近世における女性の存在意義について、「妻・嫁という面に限定されていたのであり、『良妻賢母』ではなく、『良妻』という側面だけが当時において意識されていた」と述べている[23]。

女子用往来の内容には、内面（精神面）だけでなく、外見（容姿）においても女性がどのようにあるべきかが書かれていた。しかし、その記述内容は少なく、具体的な化粧方法は記されていなかった。そのような中、文化文政の頃（1810 年代）になると化粧書が刊行される。それまでの女子用往来では触れる程度であった化粧について、その意義や方法までを書いたものが刊行されたのである。さらに、化粧書が刊行されたのちの女子用往来では、化粧によって外見を整えることは良い結婚をするために必要なものとして考えられるようになる。

近世の化粧方法や化粧文化と近代のそれらとの間にはどのような差異や連続性があるのだろうか。それを明らかにするために『都風俗化粧伝』の内容を確認する必要があると思われる。『都風俗化粧伝』は高橋雅夫や資生堂企業文化博物館が復刻したように、近世の化粧文化を論じるうえで重要な文献である。しかしながら、『都風俗化粧伝』の内容分析は試みられているものの、その化粧法や理念の根底にある理想の女性像がどのような部分が近代では捨象され、どのような部分が近代にまで引き継がれているのかという点は十分に明らかにされていない。

そこで本論では、『都風俗化粧伝』の記述と挿絵の両面から分析を試みる。女子用往来における女性の理想像は、時代や著者によって大きく異なっていくそのことに注目し、まずは女子用往来における女性の理想像や化粧についての記述を確認することから始める。

---

[20] 石川松太郎編『日本教科書大系　往来編　女子用』、1973 年、p.12。
[21] 同上書、pp.12-18。
[22] 同上書、p.36。
[23] 小山静子『良妻賢母という規範』、勁草書房、1991 年、 p.19。

第1節　女子用往来からみる女性の理想像と化粧

1-1　女子用往来について

日本の教育史研究の草分けである石川謙の『女子用往来物分類目録』によると、近世に登場した女子用往来の種類は、1000 種類以上あるとされる[24]。この女子用往来は次の 4 種類に分けることができるとされ、以下のように解説されている[25]。

教訓型：道徳や躾を中心に説いたもの。
消息型：習字や作文、またこれをとおして社交上の礼儀様式を教えようとしたもの。
社会型：日常社会に弘通する風習・行事・趣味・常識などを記したもの。
知育型：地理・歴史・産業はじめ、さまざまな知識を授ける目的で編まれたもの。

これらの 4 種類の型の中でも、もっとも古いものが教訓型である。近世初期から、家族制度の確定・固定化の情勢に即応しようとしたこの型の往来が、つぎつぎと用いられた。その中のひとつが女大学系である。『女大学』は、近世に刊行されて以来、多くの版を重ね、広く普及した女子用往来とされている。

次に、消息型は教訓型と雁行して、近世の前期から盛んに編まれ、広く普及した往来物である。女消息文を往来に載せ、教材の一種として編まれている。教訓型と消息型に遅れて登場したのが、社会型である。社会弘通の習慣、行事、嗜なむべき趣味、そして身につけておかなければならない趣味などを教材化したもので、社会系・年中行事系・趣味系の 3 つに分けることができる。

女子用往来の最後に登場したものが、知育型である。知育型は、めざましい発展をとげ、ついには女子教育の理念そのものの改変にまでせまっていった。知育型は、地理系・産業系・合本系の 3 つの系列にまとめることができ、その中でも、合本系は、女子用往来のいくつかをまとめて本文を構成したものである。さらに、女子が生活を営んでいくのにあたって、また身に嗜んでいくうえに大切と考えられたさまざまな記事や絵抄を付載したものであり、まさに女子のための日常生活総合教科書であったとされる。

これらの型の中で、消息型は手習いのための往来物であるため、化粧に関する記述は見当たらない。また、社会型の往来物においても女子が身につける趣味などが記載されており、化粧に関する記述がないため、本論の考察対象からは省くこととした。そのため、本論では、教訓型と知育型の往来物から化粧に関する記述について見ていく。まず、教訓型からは女大学系の往来物について概観する。女大学系は前述したとおり、多くの版を重ね、広く普及したものである。さらに、近代の女子教育にも活用されているため、本論では女

---

[24] 石川兼『女子用往来物分類目録』、1946 年、p.6。
[25] 石川松太郎編 1973、前掲書、pp.18-36

大学系を見ていく。そこで、『女大学』の基礎とされている貝原益軒の著作『和俗童子訓　巻之五　教女子法』について取り上げる。

次に、知育型として合本系の往来物を概観する。合本系とは「娘の時期から嫁の時代にかけて、たえず座右におかれ、あの場・この場、あの時・この時の必要にそくして利用される参考書ないし百科事典」[26]である。そのような合本系の中でも、最も需要が高かったとされる『女重宝記』の内容を確認する。

1-2　『和俗童子訓　巻之五　教女子法』

『和俗童子訓』は、宝永 7（1710）年 4 月、儒学者である貝原益軒が 81 歳の折に撰作し、大阪の渋川清右衛門の手で出版された（出版年月は不明）ことが石川松太郎によって述べられている[27]。その構成は、巻之一が『総論　上』、巻之二が『総論　下』、巻之三が『随年教法・読書法』、巻之四が『手習法』、そして巻之五が『教女子法』となっている。『和俗童子訓』は「かれ（筆者註：貝原）の教育思想が体系的にくみたてられている書物であるというばかりでなく、わが国における最初のまとまった教育論書である」[28]と石川謙に評されている。その中の『巻之五　教女子法』は女性論・女子教育論をとりあげ、十八カ条に分けて記述されている。その内容は、女性は嫁いだ先の「家」に属するものととらえ、それに向かっての婦徳、婦言、婦容、婦功の各面にわたる女子教育の望ましい方針・内容・方法について、ことこまかに諭すものとなっている。石川松太郎は、『巻之五　教女子法』について基本的には儒教理念のもとづく人間の価値平等観をもっているにもかかわらず、一方では男尊女卑にもとづく女子教育論を展開する矛盾を、益軒が矛盾として自覚しないまま記述しているところに、最大の特徴を見出すことができるとしている[29]。

では、『巻之五　教女子法』の内容を見ていく。内容目次は次のとおりである。

1　女児は親の教えひとつで育つ。
2　幼いときから「女徳」を育てるのが大切。
3　女性の徳は「和」と「順」とを守ることにある。
4　女性は敬順の道を重んじなければいけない。
5　女性の任務と仕事の内容（女功）。
6　とりわけ紡績（うみ・つむぎ）・裁縫（たち・ぬい）の技は重要である。
7　女性のつとめとしての四行。
8　女性の身につけるべき手習い・読書・教養。

---

[26] 同上書、p.36。
[27] 石川松太郎『女大学集』、平凡社、1977 年、p.3。
[28] 貝原益軒著、石川兼校訂『養生訓・和俗童子訓』、岩波書店、1961 年、p.295。
[29] 石川松太郎 1977、前掲書、p.4。

９　女性三従の道。
１０　女性七去の法。
１１　女児は、幼いとき、とりわけ厳しく躾られねばならない。
１２　早くから、女功を修練させておくのが望ましい。
１３　自分の身を、つねづね清潔にたもつように心がけさせよ。
１４　男女の別を厳しくたて、貞節をかたく守らせよ。
１５　嫁する日、親の戒めるべきこと、娘の心得。
１６　嫁する娘に、親が説ききかすべき十三カ条。
１７　いったん結婚したら、ふたたび生家にもどらない覚悟が大切。
１８　女性の心ざま悪しき五種の病気。この点からみた女子教育の重要性。[30]

このような内容の中で、女子の身体について述べられているのは、「７　女性のつとめとしての四行」、「１３　自分の身を、つねづね清潔にたもつように心がけさせよ」、「１４　男女の別を厳しくたて、貞節をかたく守らせよ」、「１８　女性の心ざま悪しき五種の病気。この点からみた女子教育の重要性」である。

「１３　自分の身を、つねづね清潔にたもつように心がけさせよ」では、父母、夫、舅姑につかえる身なので、清くして汚らわしくしてはならないことが書かれている。また、「１４　男女の別を厳しくたて、貞節をかたく守らせよ」では幼いころから男女が一緒にいてはならず、女性は常に貞節をもって潔くしなければならないとする。さらに、「１８　女性の心ざま悪しき五種の病気。この点からみた女子教育の重要性」では、女性の多くは怒りや嫉み、妬みなどの病気にかかる。そのような病気にかからないように教育しなければならないことが述べられている。

これらの中で、「７　女性のつとめとしての四行」で取り上げられた四行は、女性にとって重視すべきものであるとされた。鈴木則子は、「結婚前の娘達にとって大切なのは、今さら変わるはずのない生まれつきの容姿に手を加えることではなく、女性の四行を修め、婚家においてそれぞれの家にとって分相応の生活を、大過なく送る準備をすることだった」[31]と述べている。そのため、本論ではこの四行を着目する。

四行とは、婦徳、婦言、婦容、婦功である。婦徳とは心だての良いことをさし、婦言は言葉の使い方や話し方が良いことをさす。婦容は姿が女性らしく身ぎれいであることをさし、婦功とは女性がやるべき仕事ができることをさす。このように、女子が嫁いだあとに必要とされることを四行として取り上げて説明している。この中で、容姿に関する婦容について、益軒は次のように述べている。

---

[30] 同上書、pp.4-5。
[31] 鈴木則子「江戸時代の化粧と美容意識」女性史総合研究会『女性史学』第 13 号、2003 年、p.3。

婦容とは、かたちのよきを云う。あながちに、かざりを専らにせざれども、女は、容なよよか（なよやか）にて、雄々しからず。よそおいのあではか（上品）に、身もちきれいにいさぎよく、衣服もあかづきけがれなき、是れ婦容なり。[32]

この記述から、女性に対して「なよよか」という身体的な女性らしさを求めていたことが分かる。また、装いに関しては上品であることを求め、身体や衣服に垢や汚れがないようにするべきだと説いている。鈴木は、身体を清潔に保つことを勧める言説が女訓書に限定されていることを指摘し、清潔であることはとりわけ女子に厳しく強要される徳目であったと論じている[33]。清潔さが女性の徳目の中で重視されていたということを化粧方法に引きつけて考えるならば、身体に白粉などを塗布するというメイクアップ行為よりも、身体から汚れを除去し、清浄に保つというスキンケア行為の方を重視していたと言えるだろう。それは白粉などで汚れを隠すことによって白い肌を表現するという考え方から、身体から垢や汚れを除去することによって白い肌を得るという考え方へと変わったということであろう。鈴木は、それにより「自己の身体と向き合い、磨き抜いた身体でもって女性たちが表現したのは、男に媚ない意志の美しさ、豊富な人生経験を感じさせる美という、本来の封建的価値観から逸脱した女性美」[34]を生み出すきっかけとなったという大きな変化を見る。

この『和俗童子訓　巻之五　教女子法』の中に記された女子教育の方針、方法、内容の一部を書き直したものが『女大学』である[35]。『和俗童子訓　巻之五　教女子法』が女子の成長を願って指導にあたるものにあてた著述であることに対し、『女大学』は女子そのものが学習して、みずからの成長の糧となりうるように編集されているなど相違点が見られる[36]。

『女大学』の原型とされているのが、享保元（1716）年に刊行された『女大学宝箱』である。その後、この享保版をほぼ忠実に踏襲したもの（第一類型）と、形式にならいながらもまったくの異文で編集したもの（第二類型）が刊行されるようになる[37]。

そして、近代に入り、福沢諭吉が『女大学評論　新女大学』を刊行し、女子教育の在り方について詳記した[38]。この頃の女子教育については、第三章にて詳しく述べることとする。

---

32 石川松太郎 1977、前掲書、p.10。
33 鈴木則子「日本の化粧意識の近代化をめぐる比較史的考察――清潔習慣の展開をめぐって」『コスメトロジー研究報告 11』、2003 年 a、p.95。
34 同上書、p.98.
35 石川松太郎 1977、前掲書、p.313。
36 同上書、pp.311-312。
37 同上書、pp.314-317。
38 同上書、p.322。福沢が『女大学評論　新女大学』が刊行した明治 30 年代は、中層以上の家庭や、その子女のかよった女子教育機関（とくに私立）では、享保原板『女大学』本文を、そのまま受けついで修身教材に採りあげているところが少なくなかった。

1-3　『女重宝記』

『女重宝記』は艸田寸木子（本名：苗村丈伯）によって元禄 5（1692）年に刊行された。艸田寸木は、苗村を崩したものである。苗村は、字を三徑、号を林庵・苗齋・艸田齋（子）・寸木子・徑山子などといい、丈伯は通称である。また、生没年は未詳とされている。近江の人で彦根藩井伊侯の侍医であったが、その後同国野洲郡落合村に隠栖したという。元禄年間には京都で盛んに執筆活動をしていた、とされている[39]。

『女重宝記』の書型冊数は、半紙本で 5 巻 5 冊ある。外題は「ゑ入　女重宝記」と書かれ、丁付丁数は次の通りである。

「巻一　女中万たしなみの巻」:「一（序）二（目録）三－二十終」20 丁
「巻二　祝言の巻」:「一（目録）二－十八終」18 丁
「巻三　懐妊の巻」:「一（目録）二－二十一終」21 丁
「巻四　諸芸の巻」:「一（目録）二－二十一終」21 丁
「巻五　女節用集字尽」:「一（目録）二－二十終」20 丁

行数は毎半葉、序文は 8 行、本文は大体 10 行である[40]。

重宝記とは、「江戸時代を通じてもっともよく大衆に迎え入れられた、文字どおり、便利で読みやすく、わかりやすい、日常的な、百科事典式の解説書であった」[41]とされる。

『女重宝記』は、一之巻から五之巻までの五巻構成となっている。それぞれの巻は、項目化され、化粧に関する項目は一之巻の六番目に「女化粧の巻」として書かれている。さらに、「女化粧の巻」は細かく分類されており、「髪の油の事」、「髪の赤きを直す薬」、「髪の垢落し様」、「髪の生ゆる薬」、「髪の結ひ様」、「額の作り様」、「眉作り様」、「白粉紅つけ様」の八項目となっている。

このうち、髪に関する項目は五項目と最も多く、「髪は女の命」であったことがわかる。『女重宝記』の中でも、「徒然草」の一節を出して、女性にとって髪が美しいことが重視されていることを強調している[42]。

髪に艶があり、きれいに結い上げられているさまは、「顔立にかたなれども、よく見ゆるものなれば、女中の別してたしなみ給ふは髪なり」[43]と記され、顔立ちの良し悪しに関係なく、髪が美しければ良く見えるものだと断言している。そのため、「朝寝して、寝乱れ髪を

---

[39] 苗村の詳細については、長友千代治校註『女重宝記男重宝記　元禄若者心得集』、社会思想社、1993 年、p.387 を参照。
[40] 同上書、p.388。
[41] 同上書、p.382。
[42] 同上書、p.40。また、村田孝子編『結うこころ　日本髪の美しさとその型』（2000 年、p.38）にも、「女性の丈なす黒髪は美人の条件とされていた」と記載されている。
[43] 同上書、p.40。

夫に見せ給ふ事有べからず」[44]とし、夫に見られることなく身だしなみとして髪を結うべきであることを述べている。

次に書かれているのは額の作り方である。額の大きさは人それぞれであるので、顔に応じて額を整えるように記されている。その次に書かれているのは、眉の作り方についてである。目元に応じて眉はつくるものであるため、人それぞれに形は違うとしている。しかし、美しい眉は「弓張月のほの／＼と出るがごとく」[45]引かれたものである旨が記されている。

『女重宝記』5 巻（18 丁オ）

上記の項目については、挿絵入りで説明が書かれている(右図)[46]。挿絵には、四人の女性が描かれている。上部右側には鏡を見ながら剃刀を手にする女性、上部左側には花が咲いている庭の植え込みを見る女性、下部右側には床の間を見ている女性、下部左側には鏡を見ながら眉を描いている女性である。女性たちの絵の横には詞書があり、また説明にも同じ文言が見られる。そこから女性たちが何を示しているのかが分かるようになっている。まず、上部右側には「高根の花にかすみのかゝりたるてい」と書かれており、同じ文言が「額のつくり様」の説明に出てくる。そのため、上部右側の女性は剃刀で額の毛を剃っている様子であることが分かる。また、詞書に合うように中央に霞の上に花が描かれている。高根は富士山を表わす言葉でもあり、花の後ろに描かれているのは富士山であると思われる。生え際の形が左右対称の山形に整った額を富士額と呼ぶことと掛けていると思われる。

次に、上部左側の詞書を読むと「ぼたんの花のまがきの内に」と書かれている。この文言は「髪の結い様」に書かれており、まがきのから出る牡丹の花のように、高くもなく低くもない高さに結うと「田舎めきたり」することはないとしている。また、同様に、「高からず、下からず、生けたる花の花瓶相応」にすべきだとする。この文言は挿絵の下部右側に書かれた詞書と同じであり、結髪に関連して、形が重視される植え込みや生け花の挿絵が左右対称的に繰り返し描かれている。

最後に、下部左側の詞書には「霞の内にゆみはり月のほの／＼といづるてい」と書かれている。同じ文言を「眉作り様」に見ることができるため、鏡に向かって眉を引いていることが分かる。その上には、月と雲が描かれており、挿絵のような弓張月を描くように薄く眉を引くと良い旨が記されている。この女性と剃刀を持つ女性の挿絵は、「鏡を見ながら何かをする」という同じ構図をしており、やはり左右対称的に描かれていると言えるだろ

---

[44] 同上書、p.40。
[45] 同上書、p.44。
[46]高井蘭山『女重宝記』5 巻（刊年不明）、"国立国会図書館デジタルコレクション" <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/993503>　2016 年 3 月 24 日閲覧。

う。

眉の次は、白粉と紅について書かれている。白粉を塗ることについて、次のように記されている。

> されば白粉をぬる事、女のさだまれる法にして、色どり飾るためばかりにあらず。（中略）しかれば、女と生れては一日も白粉をぬらず素顔に有べからず。[47]

白粉を塗ることは、美しく飾るためではなく、身だしなみとして必要であり、素顔でいることはありえないことだとしている。前述した髪を結うことと同様、人に素顔を見られないように白粉を塗ることを奨励していることがわかる。

紅についての記述は少なく、「頬さき、口びる、爪さきにぬる事薄／＼と有べし」[48]とされ、薄く塗るべきであることが書かれている。濃く赤く塗ることは「茶屋の嚊」のようだと例えを挙げている。そのため、濃く赤く塗ることは身だしなみではなく、人に媚を売るように考えられたと思われる。薄化粧を勧める中で唯一濃いものとすべきものとして記載されたのがお歯黒である。「黒々と毎朝つけ給ふべし」[49]と書かれ、結髪や白粉と同様、毎日の身だしなみとして必要とされていたことが読み取れる。

このように、『女重宝記』には、化粧について項目別に説明が書かれていた。その順と内容量から、『女重宝記』が重視していたのは、①髪、②額、③眉、④白粉・紅・お歯黒であることが分かる。特に、髪、額、眉については挿絵入りで説明がなされるなど、かなり重視していることが読み取れる。このことから、『女重宝記』が刊行された元禄の頃は、「化粧すること」自体は身だしなみとして必要とされつつも、その中で美人を表現するものは髪と額と眉であった。そして、白粉、紅、お歯黒は身だしなみとして必要とされつつも、美人を作る付属品の扱いであったと言えよう。

第 2 節　『都風俗化粧伝』からみる化粧

上記のように女子用往来では、化粧に関する記述はあるものの具体的な化粧方法を詳細に記したものはなかった。しかし、江戸時代後期になると化粧書が刊行され、具体的な化粧方法が記載されるようになる。これらの化粧書の中でも、文化文政の頃に刊行された『化粧眉作口伝』、『都風俗化粧伝』、『容顔美艶考』は江戸時代を代表する化粧書とされている[50]。

---

47 同上書、p.45。
48 同上書、p.45。
49 同上書、p.45。
50 陶智子は「『化粧眉作口伝』は<礼法>としての化粧本、『容顔美艶考』は<メーク　アップ>を中心とした化粧本、『都風俗化粧伝』は<総合美容>としての化粧本ということである。また化粧関連の記述のある書物は他にもあるが、この三点を江戸時代の化粧本を代表するものとみなすことができる」と述べている（『解説　「化粧眉作口伝」「都風俗化粧伝」「容

このうち、『都風俗化粧伝』は大正 11（1923）年まで版を重ね、約 100 年間刊行された。これほど版を重ねた化粧書は他に類を見ない。そのため、本論では『都風俗化粧伝』を最も重要な化粧書と捉え、その内容について取り上げる。また、『都風俗化粧伝』には挿絵が多く描かれている。『巻之上』19 図、『巻之中』14 図、『巻之下』84 図となっており、その総数は 117 図となる。

『都風俗化粧伝』は文化 10（1813）年に刊行された。作者は佐山半七丸、挿絵は速水春暁斎である。初版の書肆は「京堀川通仏光寺下ル　河南喜兵衛（金華堂）」、「京西堀川蛸薬師上ル　中川藤四郎（文林堂）」、「江戸田所町利右衛門店　鶴屋　金助（雙鶴堂）」、「大坂心斎橋通北二丁目　秋田谷太右衛門（宋栄堂）」の 4 店である。

作者の佐山についてはどのような人物であったかは不明である[51]。しかし、速水については「玉山の画風をうけて居る。（中略）大坂の人。絵本忠臣蔵二十冊、絵本甲越軍記二十冊などを始めとして、多くの読本の挿絵をかき、また名所図絵をもかいて名声を得た」[52]人物であったと言われている。

『都風俗化粧伝』は上中下の三巻で構成されており、初版本の大きさは、三巻とも縦 24.5cm、横 16.6cm である。また、丁付丁数は、巻之上が序文 4 丁、目録 1 丁、本文 30 丁である。巻之中は目録 1 丁、本文 30 丁であり、巻之下は目録 1 丁、本文 30 丁、広告半丁、奥付半丁となっている[53]。価格については記載されていないため、詳細は不明である。『都風俗化粧伝』はその後、嘉永 4（1851）年に河内屋吉兵衛ほか十三書肆から、明治初（1868）年に愛文堂福井久兵衛から刊行される。また、刊年は不明であるが雁金屋青山清吉から『女子風俗　化粧秘伝』と改題して刊行された。さらに、明治 20 年代には好古堂酒井藤兵衛から、大正 11（1923）年に伊勢辰商店から刊行された[54]。

『都風俗化粧伝』の各巻の内容について次項で概観する。

2-1　『都風俗化粧伝　巻之上』

『都風俗化粧伝　巻之上』は「前書」として以下のように書かれている。

この化粧伝（けわいでん）は、化粧（けわい）の伝（しよう）、身の動静（とりまわし）の秘儀を洩（も）らさず出だしぬれば、たとえ醜き顔容（かおかたち）、

顔美艶考」復刻版』資生堂企業資料館、2000 年、p.296。）。

[51] 同上書、p.279。

[52] 藤懸静也『増訂浮世絵』、1946 年、pp.192-193。
速水の師である玉山とは岡田玉山のことであり、その師に石田玉山がいる。石田は絵本に人物、山水、花鳥の密画を画いたことで名高い人物である（『増訂浮世絵』、p.191）。

[53] 高橋雅夫校注『都風俗化粧伝』、平凡社、1982 年、p.274。

[54] 各版の詳細については、前掲書『都風俗化粧伝』の「解説」に詳細に記載されているため、そちらを参照いただきたい。

あるいはいかかほどあしき難癖(なんくせ)ありとも、この書を得てその法のごとく仮粧(みじまい)なし給わば、たちまち絳唇白玉(こうしんたま)をふくみ、紅瞼(こうけん)明珠を曜(かがや)かし、翠(みどり)の眉緩(まゆゆる)く縈(まと)い、雲の鬢(びんずら)儼(おごそ)かに、花の容(かたち)、月の貌(かんばせ)、百媚百嬌(ひやくびひやくきょう)をそなう美人となさしむること、何のうたがう処かあらん。なお児女子(おんなこたち)の見安からんがため、その側(かたわら)に図をいだして、作りかたを季(くわ)しく記し、その余、色を白くし、肌膚(はだえ)の密理(きめ)をこまやかにして光沢を出だし、顔に生ずる腫物(できもの)を治す薬の法より、婦人(おんな)の身嗜(みだしなみ)になるべき伝受にいたるまで、もらさずしるしたれば、実に婦女子のためには千金にも換(か)えがたき秘蔵の書と謂(い)いつべきものなるべし。[55]

ここでは、『都風俗化粧伝』がどのような目的で書かれているかが記されている。『都風俗化粧伝』を読み、そこに記された化粧方法を施せば、どんなに醜い顔や難しい癖があったとしても美人になれるとしている。『都風俗化粧伝』が述べる美人とは、赤い唇（絳唇）に白い歯（白玉）、眉を緩く描き、髪の毛が美しい（雲の鬢儼かに）様子の女性を指している。このような美人になるため、未婚の女性たち（児女子）でも見やすいように挿絵とともに，化粧方法を詳しく解説している。

『都風俗化粧伝』は三巻構成であり、色を白くする方法や、肌の肌理（密理）を細かくしツヤ（光沢）を出すベースメイクの方法から、身嗜みとしてどのような服装をするかまで、総て網羅している。よって『都風俗化粧伝』は、婦女子にとってお金には換えがたい秘蔵の書であるとされている。

上記の文言が示すように、『都風俗化粧伝』は肌をきめ細やかにすることから、身だしなみまでのすべてを扱っている。また、化粧を「仮粧」と書き、化粧をしている顔を「仮の装い」であることを示しながらも、化粧によって美人となることは疑いようがないとしている。

この「前書」のあとに「顔面之部」として、肌に関する項目が一巻を通して設けられている。「顔面之部」の頭書には、「化粧の仕様(しよう)、顔の作りようにて、よく美人となさしむべし。その中にも色の白きを第一とす。」[56]と述べ、化粧の仕方や顔のつくりで美人が決定す

55 高橋雅夫 1982、前掲書、p.10。
56 同上書、p.12。

るが、肌の色が白く、密理が細かいことが美人にとって最も重視すべきである旨が書かれている。そのため、『巻之上』では、顔の色を白くする方法の他に、粉刺(にきび)や黒痣(あざ)を治す方法が書かれており、いかに顔が白いことや肌理が細やかであることが重視されていたかが分かる。それはまさしく現在のスキンケアと同じであり、化粧を行なう前の土台作りの方法を示している。また、色を白くする方法では、何種類もの薬の調合を記している。それらの薬は全て、湯煎で溶かし、肌に塗り、その後洗い落とすという手順が必要とされている。

肌を白くする方法を述べた次に、「鼻の低きを高う見する伝」として、鼻を高く見せる化粧の方法を挿絵入りで示している。「鼻は顔の中にても中央にありて、第一(ひと)他の目につくものなれば、鼻筋とおりたるをよしとす。」[57]と述べ、顔の中でも鼻は最も目立つため、鼻筋は通っているのが好ましく、そう見せるための方法は、鼻の部分に塗る白粉を濃いめにし、眉も少し濃く引くこととされており、現代でも使われているハイライト効果のテクニックが教示されている。

次に述べられているのは、眸(まじり)の化粧方法についてである。「眸の低(た)れ下がりたるを上げ、また眸(まじり)の上がりたるを真(まつ)すぐに見する化粧(けしょう)の伝(しよう)」[58]とあるように、まぶたの端が下がって見えるのを防ぐ、またはまぶたが上がり鋭く見えてしまうのを防ぐ化粧法が書かれている。そして、下がりすぎず、上がりすぎない眸が良いとされている。眸が下がっている場合は、白粉をぼかして塗ることや紅を薄く引くことで、眸が引き立てて見えることが述べられている(右図)[59]。また、「目の大なるをほそく見する伝(でん)」[60]という項目もあり、「あまり大き過ぎたるは見苦し」としている。とくに、目を見開くことに対して注意を促し、外に出るときは「目八分」として、自身の少し前を見下すようにすると、目を見開くようなことにはならない、としている。伏し目がちになることで、おのずから瞼が下がり、目が細く見えることを記していることから、大きな目であることは近世の女性に

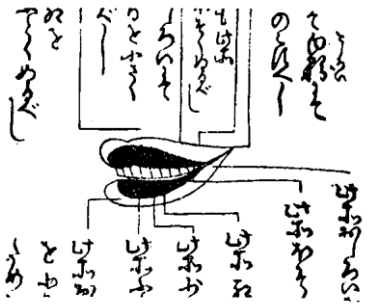
『巻之上』
「第壱　顔面之部」(p.86)

---

57 同上書、pp.80-81。
58 同上書、p.85。
59 挿図はすべて高橋雅夫 1982 年から転載した。
60 同上書、pp.87-89。

とって不要なものであったことが読み取れる。さらに、化粧方法として、瞼や外眥に赤色染料の生燕脂を薄くさすと、目が大きいことを隠す効果がある旨が記されている。また、「瞼〔目の上かわの所なり〕の上、すこしばかりまつ毛のあたりを、しめりたる手拭にてのごい、いたつてうすき紅をさすべし。」[61]と記しており、まぶたの上の白粉を少しとりのぞき、薄く紅をつけると、小さい目を少しでも大きく見せることができると書かれている。このように、目が小さすぎることも当時の美人観からは外れていたことが読み取れる。これらの方法は、現在のアイラインやアイシャドウと同じポイントメイクのテクニックである。今のような豊富な種類のポイントメイク用化粧品がなくても、白粉や紅という化粧品によって目の印象を変えようとしていることが分かる。

次に書かれているのは、口に関する項目である。口は大きすぎず、小さすぎず、また口唇は分厚すぎない方が良いとしている。そのため、白粉や紅の濃淡によって調整するべき旨が記されている。この方法は、現在の化粧方法でも使われており、当時から唇を美しく見せる方法が記されていたことが分かる(右図)。



『巻之上』「第壱　顔面之部」(p.95)

最後に書かれているのは、丸い顔を長く見せるための化粧方法と、額を短くする方法である。どちらも額をどのように剃るか、白粉を塗るか、ということを示したものであり、これは『女重宝記』でも書かれていた項目でもある。ただし、額だけでなく、顔全体の化粧方法も記載されており、『女重宝記』よりも詳細に化粧方法が書かれていることが分かる。

このように、『都風俗化粧伝　巻之上』では、肌に関する項目を一巻すべてに盛り込んだ形式となっている。その内容は、スキンケアによる肌の土台作りから始まり、ベースメイクからポイントメイクの方法まで記されたものであった。

2-2　『都風俗化粧伝　巻之中』

次に、『都風俗化粧伝　巻之中』を概観する。この巻には、まず「前書」に次のことが書かれている。

化粧容儀するは、愛敬を得、徳をおさむるの源にして、身の穢れ、不浄を清潔し、

61 同上書、p.92。

礼を正しうするのもと、身清ければ心自ら正しく、聖人も婦人の四徳を挙げ給う。中にも徳容と並べ挙げ玉えり。徳とは身を脩め、家を斉うるをいう。容は容儀することを謂う。容儀とは、化粧し、容儀を正しうするを云えり。心と容儀は、原、一体にて、化粧し容儀するときは、心自ら清く、父母に孝を尽し、嫁しては舅、姑によくつかえ、夫に貞節を守り、他人を敬い、召仕える者に慈悲深く、貧しきを救い、長たるを敬い、幼きをあわれむは、みな愛敬より出るところなれば、晨（朝早く）に起きては日々に鏡にむかい、顔に化粧し、容儀をつくり、心の鏡にむかいては、あしきを遠ざけ、よきにうつり、曲がれるをた（矯）め、直きにしたがい給わば、実に女の道を守り、化粧の誠を得玉えると謂いつべきなり。日々にみがき、時々に化粧し、顔容は嬋妍つくりすましたりとも、心の化粧正しからず、頑愚にして少しの事をも罵り、怒り、妬み、他のあしきを悦び、善きをそしる心あらんには、顔容の化粧も、何の益かあるべきや。よく心にとめて、教戒とし給えかし。それ、化粧は、何となくじんじょうにして、艶にやさしく、自ら風流ありて、うっきりとおとなしきこそ、奥ゆかしく、人の心ばえ、さぞとおしはかられ、氏なうて玉の輿にのる立身出世もなるべし。[62]

『都風俗化粧伝　巻之中』では、まず化粧の意義について説明している。「容儀」には、「かたちつくり」もしくは「かたち」、「すがた」とルビがふられている。そして、容儀とは化粧をして姿（容儀）を正しくすることであると述べている。そして、心と姿はもとはひとつのものであり、化粧をするときは心が清らかでなければならない。そのためには、父母に孝を尽し、嫁いだあとは舅姑に仕え、夫に貞操を守り、使用人を思いやる心（愛敬）が必要である。毎朝、早く起き鏡に向かって化粧を行なうときには、心を矯正しなければ

[62]同上書、pp.103-106。

ならない。単に顔を美しくしても心が美しくなければ意味がないことを示している。この言葉は、『和俗童子訓　巻之五　教女子法』に書かれた内容と類似している。『和俗童子訓　巻之五　教女子法』によって説かれた婦人の心得を、『都風俗化粧伝』では化粧をすることでやさしく思いやりのある婦人となることができることが付け加えられていると言えよう。さらに、最後の「玉の輿にのる立身出世もなるべし」という文言は、後述する『女教艶文庫』に記載された内容と同じであり、『都風俗化粧伝』が『教女子法』と『女教艶文庫』といった女子用往来の内容を、化粧という行為を通して自己を見つめ、道徳的に内面を向上させることを説いた実践書としての役割を果たしていたということができるだろう。そのため、玉の輿にのるためには顔だけでなく、他の部分も美しくなければならなくなる。

そのため、『都風俗化粧伝　巻之中』では、「手足之部」がまず記載されている。「手足は繊々（せんせん）と細く、娜々（なるなる）としなやかなるを美人の相という。」[63]として、手足は細く、しなやかであることが美人であると書かれている。そして、顔にきれいに化粧をしても、手足が荒れて節くれだったり、指が太く爪がのびて、垢がたまっていては興がさめてしまうと述べられている。そのため、手足を細くしなやかにする方法などが記されている。また、歩き方についても書かれており、顔かたちが良かったとしても歩き方が悪ければ全体的に悪く見えるものだとしている。「身体（からだ）をしゃんとのびやかにし、首を直（すぐ）にそなえ、仰（あお）のかず俯（うつ）むかずに融々（のびやか）に歩（あ）行（る）けば、風俗（ふうぞく）しとやかにして見よきもの也。」[64]とし、体をのばし、首をまっすぐにうつむかずに歩くことで、しとやかですらりとした姿こそが美人になるために必要である旨が書かれている。

「手足之部」の次には「髪之部」が掲載されている。髪がきちんと結えていないと、その人の心映えも悪く見えるとし、朝は早く起きて寝乱れ髪を人に見せないようにとしている。これは、『女重宝記』にも記載されていた点であり、髪を結う=身だしなみという考え方が浸透していることを示しているといえよう。ただし、『女重宝記』では、髪が初めに述べられていたが、その内容が『都風俗化粧伝』ではかなり後方で書かれている。つまり、『教女子法』で述べられた「肌を清潔にすること」が「髪を整えること」よりも重視されていたといえるだろう。

---

63 同上書、p.107。
64 同上書、p.120。

「髪之部」では『女重宝記』と同様に、毛生え薬の作り方や髪の結い方について書かれている。また、挿絵として、鏡の前で髪を梳く女性が描かれている(右図)。その横には、侍女と思われる女性が髪の毛束に筆で何かをしている様子が描かれている。毛生え薬の項目の上の挿絵であるため、おそらく髪の量が少ない女性が行なった対処法を描いていると思われる。そのため、この挿絵は、侍女が髢を筋立てと呼ばれる櫛で梳いている様子であると考えられる。

『巻之中』「第参　髪之部」(p.123)

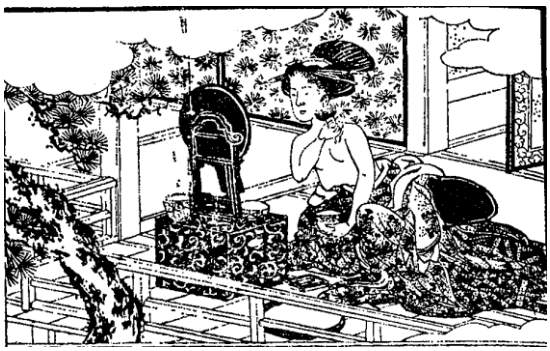
また、髪を洗う方法も挿絵入りで書かれている。挿絵には、上半身裸の女性がたらいの中に髪を下ろし、手で梳いている姿が描かれている。さらに、白髪を黒髪に染める方法なども書かれ、艶のある黒髪が美人の条件のひとつであることが『女重宝記』から変化がないことが言えるだろう。「手足之部」と「髪之部」はともに、『巻之上』では触れられなかった部分であり、『巻之上』の内容（肌の土台作り・ベースメイク）をより際立たせるものとして取り上げられていると言えよう。

次に、「化粧之部」が記載されている。まず、次のように書かれている。

> 婦人の紅粉を施すことは、驕奢風流のためにあらず。礼容を整え、面のつきづきしきを陰し、愛敬を添えんがため、また、嫁ては舅、姑、夫につこうまつる礼なれば、必ず朝は疾く起きて湯をつかい、髪のみだれたるを正しうし、紅粉を施して、人に寝乱髪のみだれたる寝惚顔の気疎き（興ざめな）を見することなかれ。さればとて、目さむるばかりにつくしすまし、けわけわしく（けばけばしく）見ゆるは、却ってあしきものなれば、心を用い給うべし。紅は赤きを好めども、余り濃く付きて、黒くきたなく、或いは人を喰いたる口のごとくに付けすごしたるは、おそろしく見ゆるものなり。白粉も、余り濃くぬれば、石仏のごときなんどと、人の譬諭にあいて、腹後指をさされたまうべからず。いかにも細やかに、濃き淡きは、我が顔に似合うように施し、耳の根、はえ際に、むらなくおとなしくつくりなすは、誠に自然の風流と見ゆる

こそ、好もしきものなり。[65]

この頭書には、化粧をすることはおしゃれをするためではなく、礼儀のためであると書かれている。結婚後、夫や舅姑に乱れた格好で接するのは礼儀に反するとしている。しかしながら、紅や白粉を濃く塗るとけばけばしくなり、人から後ろ指をさされてしまう。そのため、自分の顔に合わせて白粉の濃さを決め、派手にならないように化粧をするほうが人から好まれるだろうと書かれている。



『巻之中』「第肆　化粧之部」(p.155)

頭書の横には、上半身を肌蹴させ、刷毛で白粉を塗る女性が描かれている(右図)。
当時の白粉は、水で溶いたものを使用していたため、この書でも「白粉をとく水の伝」や「白粉解きようの伝」など、白粉の溶き方がまず書かれている。そのあとに、「白粉をする伝」が書かれ、「耳へ白粉をする伝」や「首筋へ白粉をする伝」など細かく白粉を塗る方法が書かれている。そして、「人の顔は、皆一様(いちよう)ならぬものにて、千万人みな悉(ことごと)くに変わりあるものなれば、その人、その面(かお)の恰好(かつこう)によりて、化粧(けわい)をなすべし。」[66]として、人の顔はそれぞれ違うのだから、各々の顔の形に合わせた化粧をするべきだと述べられている。そのため、白粉だけでなく紅の引き方や髪形によって顔が変わるため工夫する旨が書かれ、そのあとに「紅の付ける伝」を記載されている。その中で、『都風俗化粧伝』の頃に登場した特徴的な紅の塗り方が紹介されている。

紅を濃く光らさんとするには、まず下地に墨(すみ)をぬり、その上へ紅を濃く付けべし。濃く見え、紅の色青みて光る也。すべて紅の濃く光るは、その顔、かたく見ゆるものなり。少し淡(うす)きが顔立和(やわ)らかに見えて、おとなしく愛敬(あいきょう)あるなり。[67]

唇にまず墨をぬり、その上に紅を塗ることで青く光るようになる。また、濃く塗りすぎるよりも少し淡く塗る方が顔立ちが柔らかに見えると書かれている。このような紅を「笹

---

65 同上書、pp.154-155。
66 同上書、p.178。
67 同上書、p.179。

色紅」または「笹紅」と呼び、当時流行した紅の引き方であった。この様子は美人画にも多く登場しており、このことについては後述する。

また、「巻之中」の最後には、「青き顔をほんのりと桜色に見する伝」と「目の上に紅をさす伝」が書かれている。この方法は、肌の色を「嬋娟（あでやかで美しい）たる桜色」[68]に見せるためのものであり、ただ肌が白いだけではなく、血色のよい肌であることが当時の美人であったことがわかる。

このように、『巻之中』では、『巻之上』で書くことができなかった顔以外の部分の化粧方法を記し、さらに、紅の引き方をより詳細に掲載した。高橋雅夫は笹紅について、「この笹紅は渓斎英泉・歌川国貞など末期の浮世絵師に多く描かれたとし、特に英泉の文政中期の作品のなかで、もっとも英泉らしい嬌艶な女の色気を表現している、と同時に笹色紅も、この期に集中していた、と述べている[69]。このように、流行に則ったものが掲載され、単に紅を引くという行為を紹介するだけでなく、流行を意識した形式になっていたことが分かる。

2-3　『都風俗化粧伝　巻之下』

『都風俗化粧伝　巻之下』の「前書」にはその時々の風俗に合わせて化粧や髪型、衣服などを選ぶべきことが述べられている。

> 容（かたちつくり）は、身を正しうするの源（もと）、身正しき時は心正しく、心正しき時は貞操正しく、心容（かたち）は、鏡の影をうつすがごとし。心正しからざれば、自（おのずか）らその形を外に顕わし、いか程容（かたちつくり）に心を要（もち）いたりとも、動作騒々（とりなりそうぞう）しく、身の備え宜（よろ）しきにかなわざれば、心を正しからず。（中略）化粧（けわい）し、容（かたちつくり）するをよしとて、目覚るばかり作りたるも、その人の心孚（こころばえ）浅はかに、長（おとな）しからず見ゆるものなれば、髪の結い様（よう）、化粧（けわい）の施（し）よう、衣服の好みおとなしく、駘蕩（のどやか）なるべきこそ、一際（ひときわ）心床（ゆか）しく思わる。さればとて、おとなしき斗（ばか）りをよしとて、古（いにしえ）の風俗をまねまば（ママ）、姿（すがたかじけ）瘁（ただ）て（やつれはてて）見よからず。只

[68] 同上書、p.184。
[69] 高橋雅夫「浮世絵に見る化粧」『化粧文化』第一号、ポーラ文化研究所、1979 年、p13。

その時々の風俗になれて、その中において賤(いや)しからざる様(よう)に心を用ゆるこそ肝要なれ。[70]

この文言は、『和俗童子訓　巻之五　教女子法』に書かれた「婦人は心だによからんには、かたち見にくくとも、かしずきもてなすべき理なれば、心ざまを、ひとえにつつしみまもるべし。其の上、かたちは生まれ付きたれば、いかに見にくしとても変じがたし。心は悪しきをあらためてよきに移さば、などかうつらざらん」[71]を変化させたものと言える。『和俗童子訓　巻之五　教女子法』では、身体は生まれつきのものであり、変化させることはできないと述べ、それに対し、心は悪い部分を直すことで変化することが出来ると説いている。『都風俗化粧伝』においても、『教女子法』と同様、心が良いことが最も重要であることが述べられている。ただし、『都風俗化粧伝』では、『和俗童子訓　巻之五　教女子法』と同じく、心と身体はひとつのものであり、身体は心を映す鏡であるため、いかに身体を美しくしても心が醜ければ意味がないことを示している。心が美しければ、髪型や化粧、衣服の好みがおとなしくても、心ゆかしい恰好と見ることができる。ただし、古ければ良いものではないため、その時々の風俗に合わせて髪型や化粧の方法、衣服の好みを変える方が良いことが述べられている。それは、化粧が婦容を表すための方法であることを述べてきた『巻之上』『巻之中』の繰り返しとも取ることができる。ただし、それまでの巻が『和俗童子訓　巻之五　教女子法』などの女子用往来の内容をなぞったものであることに対し、『巻之下』に書かれた内容は、『都風俗化粧伝』独自のものであるといえよう。この「心の変化が外見に影響を与える」という言葉は、近代以降の女子教育に受け継がれ、さらに解釈が加えられることになる。このことについては、後述する。

では、『巻之下』の内容を見ていく。『巻之下』には「恰好之部」、「容儀之部」、「身嗜之部」と三つの部に分けられている。「恰好之部」では、「面上(かお)の図を数多画(おおくえが)きて、その下に紅粉(べにおしろい)の付けようより、顔の作りかたをくわしくしるす。」[72]と最初で述べられているように、様々な顔立ちで、様々な格好をした女性たちが描かれている。そして、その下には、その顔立ちと格好に合った化粧方法が事細かに書かれている。女性たちは身分、年齢、既婚／未婚など様々であり、それぞれに合わせた化粧方法を記しているといえよう。

次に「容儀之部」として、「身の癖あるを直し、おのずから風俗よく見ゆる伝」として帯の結び方や襟の付け方などが挿絵入りで記されている。その方法によって、低い背を高く見せたり、逆に高い背を低く人並みに見せることができると書かれている。また、「首筋のみじかきをながく立ちのびて見する伝」では、首筋が短いと襟に垢がつく可能性が人に比

[70] 高橋雅夫 1982、前掲書、p.187。
[71] 石川松太郎 1977、前掲書、p.6。
[72] 高橋雅夫 1982、前掲書、p.191。

べて高いことが述べられている。また、白粉の濃さによって首筋を美しくする方法も書かれており、顔だけでなく首筋までを美しく見せることが必要とされていたことが分かる。

最後に書かれているのが「身嗜之部」である。「身嗜之部」では、頭書に次のことが書かれている。

> 勝れて紅粉を施し、粧いたりとも、鼻毛のび、あるいは耳の毛蒙茸とし、或いは耳垢たまり、または歯の清め麁しく歯垢のこり、或は口臭く舌に糟たまり、または手足の爪のび、垢たまりて爪の先黒きなんど一ツもある時は、悪きを見出ださんとする人心なれば大いに譏笑わるること也。これらの身嗜みは、その時にあたりて、俄かにこと多くして行き届きがたければ、平生に嗜みありたきもの也。[73]

『巻之下』「第七　身嗜之部」(pp.254-255)

ここでは、どんなに美しく紅白粉を塗っても、鼻毛がのびていたり、耳垢がたまっていたり、歯に歯垢がたまっていたり、爪に垢がたまっていると、人から謗りを受けることになるため、常に気を付けなければならないと書かれている。

化粧をする前提として、身体を清潔にする方法がこの部では書かれている。その方法として、「湯化粧の伝」、「一夜化粧の伝」など、白粉をすり込み、肌を白く見せることが記されている。その中に見開きで挿絵が描かれている（右図）。挿絵の右側に子どもを連れ、鍬と土瓶を持った乱れ髪の女性が描かれている。女性の視線の先には、若い女性が描かれている（挿絵左側）。若い女性はきれいに髪を結い上げ、艶やかさがにじみ出ている。この様子は、『巻之上』の最初に書かれた次の文章を絵図化したものといえる。

> 僻地の婦人、都会の地に出でて一とせ二年住みなれて古郷へかえれば、にわかに容色よ

[73] 同上書、pp.240-241。

く見え、都女郎になりたりと人こぞって賞美(ほめ)、媒妁(なかだち)をたのみ、赤縄(えん)をもとめ、はからざる立身出世する人、世に多し。これ都へ出でたりとて、低き鼻の高うなり、短き脊(せ)の長うなりたるにはあらねど、紅粉(べにおしろい)の仮粧(つけよう)、容(からだ)の動静(とりまわし)にて、低き鼻を高う見せ、短き脊を長う見する伝(しよう)を知るが故なり。[74]

都会に1、2年住んだ田舎の女性でも、玉の輿に乗り立身出世を果たす人が多くなる。それは、都会で化粧を学び、自分の欠点を補い、常に身だしなみに気を付けた結果であると書かれている。

このように、『巻之上』で述べた結果を記したものが、『巻之下』に挿絵として最後に描かれている。これは、『都風俗化粧伝』に書かれていた内容を実践することで、「田舎の女性も垢抜けることできる」と示しているのである。そして、その内容は『女重宝記』や『和俗童子訓　巻之五　教女子法』などの教訓書の内容も含みながら実践書として記されたものなのである。

2-4　『都風俗化粧伝』の挿絵

『都風俗化粧伝』には、化粧をする様子が挿絵として描かれている。そこで、本節では、『都風俗化粧伝』の挿絵と、同時期に化粧の様子を描いた浮世絵を比較する。化粧の様子を描いた浮世絵は美人画とされ、鮮やかに彩られた女性が描かれていた。その女性は、(絵師の趣味嗜好が入っているにしても)美人として扱われ、その化粧をする様子は「美人は化粧をしている」ことを明示している。

まず、『都風俗化粧伝』の挿絵について見ていく。『都風俗化粧伝』の挿絵を描いたのは、前述したとおり速水春暁斎である。速水が活躍した文化年間は、美人画が流行した時期でもあった。そのような中で、三代歌川豊国(1786～1864)や渓斎英泉(1791−1848)は「好んで化粧を題材にしたかに見える」[75]ほど、化粧の様子を描いた美人画をたくさん描いている。

歌川国貞（後の三代歌川豊国）(1786−1865)は、号を五渡亭とも香蝶楼ともいう。初め草双紙の挿絵を描き、のち役者似顔絵や美人画に転じ、最高の人気絵師となった[76]。

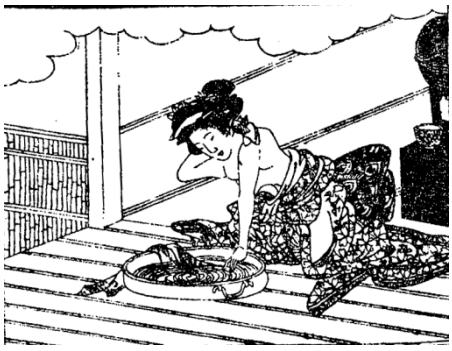
渓斎英泉(1791−1848)は、文化の半ばから嘉永の初めにいたる40年余りの間作品を作り

---

[74] 高橋雅夫1982、前掲書、p.10。
[75] 高橋雅夫1979、前掲書、pp.5-18。
[76] 略歴については、『国史大辞典』の「歌川国貞」の項と、藤懸静也『増訂浮世絵』雄山閣出版、1946年、pp.258-259を参照した。

続けた絵師である。遊女・芸妓に取材した濃艶・退廃的な美人大首絵(おおくびえ)を得意とした[77]。

彼らの描く美人画を見てみると、『都風俗化粧伝　巻之上』の「第壱　顔面之部」挿絵の構図とよく似ていることが分かる。例えば、『都風俗化粧伝　巻之上』の「第壱　顔面之部」に描かれている身体を拭いている場面と、豊国が描いた≪江戸名所百人美女　御殿山≫(安政 5[1858]年)[78]である（次頁）。どちらに描かれている女性も、上半身を肌蹴させ、盥に覆い被さるように中腰になって、左手を盥に差し入れ、右手に持った手ぬぐいで首の辺りを拭いている。それぞれ盥の側にもう一枚手ぬぐいがあり、女性の背後に鏡台が置かれている[79]。このように、この 2 枚の絵には多くの類似点がある。



『巻之上』「第壱　顔面之部」(p.12)

≪江戸名所百人美女　御殿山≫

次に、剃刀を使用する場面である。『都風俗化粧伝　巻之上』の「第壱　顔面之部」には、女性が膝立ちせず、左手は胸元に置いた状態で鏡を見ながら眉の上部に剃刀を当てている様子が描かれている(下左図)。

---

77 略歴については、『国史大辞典』の「渓斎英泉」の項と、藤懸静也『増訂浮世絵』(雄山閣出版、1946 年、pp.245-247)を参照した。

78 三代歌川豊国≪江戸名所百人美女　御殿山≫、安政 5（1858）年、ポーラ文化研究所所蔵。

79ポーラ文化研究所編『ポーラ文化研究所コレクション 5　浮世絵美人くらべ』、ポーラ文化研究所、1998 年には、次のように解説されている。

> 絵の女性は、上半身裸になり金盥の湯と、紅絹の手ぬぐいで襟足を洗っており、つぶし島田にべっ甲の櫛、簪を挿している。奥の鏡台は、江戸時代の基本的な形で、小物の入っている引出は、横についている。当時は糠で顔や体を洗った。(p.7)

『巻之上』「第壱　顔面之部」(p.94)

≪江戸名所百人美女　芝明神前≫

この様子を少し構図を変えた形で描いているのが、豊国の≪江戸名所百人美女　芝明神前≫（安政 5[1858]年）である[80]。ここに描かれている女性は、膝立ちし、鏡を見ながら眉の下あたりを剃刀で剃っている[81]。

そして、髪を洗う場面である。『都風俗化粧伝　巻之中』の「第参　髪之部」の挿絵には、盥に髪をつけ手で梳いている女性の右横には櫛が置かれている(次頁)。また、女性の後ろには鏡が置かれている。豊国の≪江戸名所百人美女　今川はし≫（安政 5[1858]年）[82]に描かれた女性は、上半身を肌蹴させ膝立ちし、髪を金盥の中につけ櫛で梳いている。女性の前には、櫛や糠袋、手ぬぐいが置かれている。女性は≪江戸名所　今川はし≫と同様に、上

---

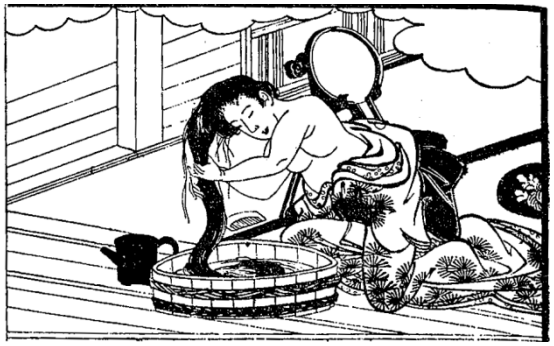
80 三代歌川豊国≪江戸名所百人美女　芝明神前≫、安政 5(1858)年、ポーラ文化研究所所蔵

81 ポーラ文化研究所編 1998、前掲書、には、次のように解説されている。

> こま絵には、寛永からある化粧油「花の露」で有名な芝明神前の喜左衛門の店が描かれている。
> つぶし島田の遊女が鏡台に向かい立ち膝になって、剃刀で眉の形を整えている。横には、化粧油「花の露」がある。寛永頃からあるこの油は吹き出物に効果があり、顔に光沢を出す匂油といわれた。文化頃には同名の化粧水「花の露」の製法が美容書に記されているが、この香薬水は、いばらのエキスを抽出し、各種香料を加えたものであった。化粧前後に付けると顔の吹き出物が治り、光沢が出てきめが細かくなるとあるが、油分は含んでいない。人気の商品名で成分の異なったものがあったのであろう。(p.20)

82 三代歌川豊国≪江戸名所百人美女　今川はし≫、安政 5(1858)年、ポーラ文化研究所所蔵

半身を肌蹴させ、膝立ちの状態で髪を洗っている。鏡は、豊国が香蝶楼国貞として描いていた頃の作品である≪婦人たしなみ草≫(弘化 4[1847]年)[83]に濡れた髪を梳いている場面に描かれている[84]。この様子から、『都風俗化粧伝　巻之中』の挿絵は、≪婦人たしなみ草≫と≪江戸名所百人美女　今川はし≫をまとめた状態で描かれていると思われる。



『巻之中』「第参　髪之部」(p.145)

≪婦人たしなみ草≫

≪江戸名所百人美女　今川はし≫

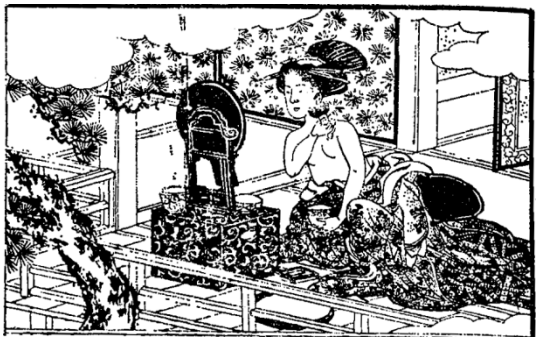
そして、最後に白粉を塗る場面である。『都風俗化粧伝　巻之中』の「第肆　化粧之部」では上半身を肌蹴させ、鏡を見ながら首の辺りに右手に持った刷毛で溶いた白粉を塗っている様子が描かれている(下図)。

---

83 香蝶楼国貞≪婦人たしなみ草≫、弘化 4(1847)年、ポーラ文化研究所所蔵

84 ポーラ文化研究所 1998（前掲書）には、次のように解説されている。

「婦人の髪化粧ハ親夫への礼なれバ取乱さぬやうに心からなすたしなミの第一なれ凡そ婦人に四徳といふあり　婦徳婦功婦言婦容これなり　婦容とは容をいふ　すべて婦人ハ髪化粧によりて貞実にも淫風にも見ゆるものなれば婀娜めかぬやうに容をすべし　努々遊女夜発の風を真似て人の謗りを受ることなかれ」と記されている。
長い髪を梳くには、この姿勢が一番よく梳けたのであろう。着物が汚れないように肩に前垂をかけている。足元には、元結、櫛はらい、梳き櫛、柄の長い毛筋立、鬢付油、にぎりばさみがある。(p.24)



『巻之中』「第肆　化粧之部」(p.155)

≪美艶仙女香≫

渓斎英泉の≪美艶仙女香≫（文政頃）[85]には、手鏡を右手に持ち、左手で頬から首にかけて「志のぶ」と書かれた刷毛で白粉を塗る場面が描かれている。白粉を塗るために、襟もとが少し肌けている。≪美艶仙女香≫の上部には詞書があり、「美艶仙女香といふ坂本氏のせいする白粉の名高きに美人をよせて」とあり、「白粉に花の香のある美人かな」という句が添えられている[86]。美人画のタイトルにもなっている美艶仙女香とは、現在の東京京橋交差点のすぐ近く、かつての南伝馬町稲荷新道にあった坂本氏から売り出された[87]。仙女香の銘柄の由来は名女形瀬川菊之丞が仙女と改名したところから取ったとされている[88]。「商工案内は言うに及ばず、合巻・人情本・咄本などの戯作本や、美人画・役者絵・名所絵などの錦絵に、仙女香に言及するテクストやイメージを挿入して、女性たちに白粉の存在を広く知らせ、かつ／あるいはその購入・使用を勧めることによって、マスメディアを利用した宣伝・広告の最初の例となった」[89]化粧品である。

また、「美艶仙女香」に描かれた女性の唇を見ると、下唇が青くなっていることが分かる。これが前述した笹色紅（笹紅）である。『都風俗化粧伝　巻之中』でも紹介された紅の塗り方は、英泉の美人画に多く登場する[90]。このように、当時の美人画が美艶仙女香などの化粧

---

[85]渓斎英泉≪美艶仙女香≫、文政頃(1818-1830)、ポーラ文化研究所所蔵。
[86] ポーラ文化研究所編 1998、前掲書、p.14。
[87] 高橋雅夫 1979、前掲書、p.16。
[88] 花咲一男「坂本氏・仙女香図説」『化粧文化』第四号、ポーラ文化研究所編、1981 年、pp.35-48。
[89] 岸文和『絵画行為論―浮世絵のプラグマティクス』、醍醐書房、2008 年、p.205。
[90] 高橋は「浮世絵にみる化粧」において、「この笹紅は英泉・国貞・広重など末期の浮世絵師に多い。特に英泉は多く、その作品を文政初期・中期・末期・天保初期・中期と分類してみると、文政中期の作品が、数多い作品のなかで、もっとも英泉らしい嬌艶な女の色気を表現している、と同時に笹色紅も、この期に集中していた」と述べている(高橋雅夫 1979、

品の広告効果をもったものだけでなく、化粧方法のビジュアル効果も果たしていたと岸は論じる[91]。

描かれた美人が化粧をしている様子を色鮮やかに描いた美人画は、当時の女性たちにとって、憧れの容姿を持つ女性だったと考えられる。岸は当時の美人画の機能について次のように述べている。

> 仙女香に言及する美人画や役者絵が、たとえ副次的・偶然的にせよ、広告的に機能する可能性があったことはたしかである。（中略）美人―多くの場合「売物」である遊女―の風俗を「うつす」ために、「すがた絵」というメディアを利用していたということ。遊郭もまた流行を発信する場所であったが、世の女性たちは、間接的にその情報と接していたということ。（中略）美人画という、男性を主たる受容者とするメディアが、女性を受容者とする場合には、当時の女性=自己自身のあるべき姿―男性が要求する理想像―を提示するとともに、その理想像を実現するために女性たちが何をなすべきかを指令する（【提案する】【推薦する】【依頼する】）規範的なメディアとしても機能していた。[92]

岸が述べるように、美人画に描かれた女性の多くは身分としては賤しいとされた遊女たちである。とはいえ、人気のある絵師に「美人」として描かれる遊女たちは、実際に遊女を見ることができる男性たちにとって美人は手に入れたい存在であっただろう。市井の女性たちにとって遊女たちの容姿の美しさは憧れの対象でもあったといえるだろう。そのような中で、美人とともに描かれる「美艶仙女香」などの化粧品は、美人画を見る男女ともに「美人をつくるもの」として認識されたのではないだろうか。そのため、岸が述べる「当時の女性=自己自身のあるべき姿―男性が要求する理想像―」という図が出来上がったのではないかと考えられる。

それは、「美人は化粧をしている」ということが美人観の根底となったといえよう。それは『女教艶文庫』や『都風俗化粧伝』によって、化粧をして美人になるという考え方と合致したといえる。また、女子用往来や化粧書の読者であった若年層の女性たちの一部は、女学生として西欧の美育思想に触れることとなる。さらに、美人コンテストが行われ、顔によって美人、不美人が決められる風潮となる。そのため、スキンケア化粧とベースメイ

前掲書、p.13)。

91 英泉の美人画を広告媒体として分析し岸は、「英泉の「美人東海道」シリーズ中の一点≪藤枝駅　廿三≫などのように、たとえ爪を切っていようが、何をしていようが、湯上がりであろうが、なかろうが「うつくしい」女を仙女香と隣接して並置するだけで、仙女香と美人が、原因と結果の関係―あるいは手段と目的―の関係として表象されることになるからである。仙女香を購入・利用すれば、こんな妖艶な美女になれますよと【主張する】ことによって、商品を購入・利用するよう【助言する】というわけである。」と述べている(岸文和 2008、前掲書、p.217。)。

92 同上書、pp.230-231。

ク化粧法は「美人になるもの」として必要であるものとして、化粧品会社によってイメージ化が図られることとなる。

第 3 節　近世後期の女子用往来からみる化粧と女性の理想像の変化

3-1　弘化版『女重宝記』

元禄 5（1692）年に刊行された『女重宝記』はその後、幾度も版を重ねることになるが、弘化 4（1847）年に刊行された『女重宝記』はそれまでのものと違い内容が増補訂正され、挿絵も一新される。弘化版『女重宝記』は、高井蘭山（1762-1839）によって増補され、応為栄女(生没年不詳)によって挿絵が描かれた。

弘化版『女重宝記』の丁数は次の通りである。

「一の巻　女中萬たしなみの事」: 序文 1 丁、目録半丁、本文 12 丁
「二之巻　しゆうげんの巻」: 目録 1 丁、本文 15 丁
「三之巻　くわいにんの巻　子のそだてやう」: 目録 1 丁、本文 16 丁
「四之巻　しょげいの巻」: 目録 1 丁、本文 14 丁
「五之巻　女節用字つくし」: 目録 1 丁、本文 13 丁、奥付半丁

弘化版『女重宝記』(10 丁オ)

作者の高井蘭山は江戸の人で、宝暦 12（1762）年に生まれ、天保 9（1839）年に 77 歳で亡くなっている。蘭山は名を伴覚ともいい、字名を思明、通称を文左衛門といった。蘭山は文化元（1804）年に『絵本三国妖婦伝』を著作したのち、読本作家として出発し、読本、しかも敵討物の全盛期であった文化 5、6 年に人気の波に乗り、数々の作品を残している。また、応為栄女は、葛飾北斎の三女である。「応為・栄女・阿栄」の名で作品を生んでいるが、現在残された作品は多くない[93]。「女けしょうの巻」に関しては、元禄版『女重宝記』と記述部分では変化していない。しかし、挿絵については元禄版と弘化版(左図)とは大きく変化している。

まず、上部右側に花が咲く縁側に腰掛け振り返っている女性、上部左側に鏡を見ながら頬に剃刀らしきものを当てている女性、下部右側に鏡を見ながら簪をさそ

[93] 横山學「女子教養書　弘化版『女重宝記』と高井蘭山」江森一郎監修『江戸時代女性生活研究（江戸時代女性生活絵図大事典　別巻)』、大空社、1994 年、pp.100-114。

うとする女性、下部左側に花瓶に生けた花を振り返りながら見る女性が描かれている。各女性に添えられた詞書を見ると、上部右側の女性には「ぼたんの花のまがきの内に咲たるてい」と書かれ、元禄版『女重宝記』と同じように、髪の結い方について述べている。しかし、元禄版が「高くもなく低くもない」ように結うことを述べていることに対し、弘化版では、女性の後ろ姿を描き、鬢の形や押し出し方などを述べている。元禄版の頃よりも髪型が変化したため、詞書は変わっていなくともその内容は変化していることがわかる。

次に、上部左側の女性に添えられた詞書を見ると、「高ねの花にかすみのかかりたるてい」と書かれている。描かれている女性は鏡を見ながら頬に剃刀を当てており、この様子は、元禄版と似ているといえる。ただし、元禄版が「額をつくる」ために額に剃刀を当てているのに対し、弘化版が頬に剃刀を当てていることから「額をつくる」ためではなく、白粉を塗るための下準備ともとれるしぐさであるといえるだろう。

下部右側の女性に添えられた詞書には、「霞の内にゆみはり月のほの／＼といづるてい」と書かれている。元禄版では、「眉作り様」で眉を描くしぐさをする女性を描いていたが、弘化版では、鏡を見ながら簪をさす女性が描かれている。ただし、簪をさす女性は鏡越しで描かれており、その鏡には眉を引いた顔が写っている。そのため、この詞書が添えられているように、「ゆみはり月」のような眉を描いた女性を鏡越しに見るという構図になっているのである。そして、最後に、下部左側には、「高からずひくからず花をいけたるてい」という詞書が添えられた立ち姿の女性は振り返りながら花瓶を見ている。花瓶には、花というよりも柳の木が活けられている。元禄版と同様に結髪の方法に関する内容にこの詞書と同様のことが書かれているため、弘化版においても内容は変化していないといえる。

このように、弘化版『女重宝記』を見てみると、元禄版『女重宝記』と（化粧に関する記述においては）ほとんど変化が見られない。ただし、挿絵の女性の服装や髪形の描かれ方は大きく変化している。そういった意味では、女子用往来は時代の変化に合わせて髪型や着物の着こなし方など、内容を多少なりとも変えていく必要性があったことが読み取れる。それは、女性にとって重要な婦徳、婦言、婦容、婦功の四行を踏まえつつも、その時々の流行に合わせて化粧や髪型を変え、衣服の好みを変えるという『都風俗化粧伝』の文言も組み込まれたといえよう。

3-2　その他の女子用往来

弘化版『女重宝記』が刊行される 80 年ほど前から、女子用往来の中では化粧を美しくなるための道具であることが述べられていた。例えば、明和 6（1769）年に刊行された『女教艶文庫』では、「婦容」を拡大解釈し、単なる身だしなみではなく美しくなるための化粧を奨励した。そして従来非難されてきた美貌によって玉の輿に乗る女性を、自分を美しく見せる努力を惜しまず、またその術を心得た聡明な女性として称賛した、と鈴木は論じて

いる[94]。

では、『女教艶文庫』にはどのように記述されていたのだろうか。『女教艶文庫』の作者は東鶴編・跋、挿絵は西川祐信である。初版は宝暦 11（1761）年に京都の銭屋庄兵衛が版元で、売出は江戸の吉文字屋次郎兵衛である。次に刊行されたのは明和 6（1769）年に、吉文字屋次郎兵衛ほか 2 書肆からである[95]。このうち、明和版『女教艶文庫』には、化粧や身だしなみについて次のように書かれている。

女中教訓取体鑑

凡女中の四徳とて肝要とすべき事四品あり其中にも徳容の二つを重しとなすされば心をみがき形をみやびやかにし給ふべき事也誠に女は姓なふして玉のこしにのるとて容儀のすぐれたる人はいやしき身にてもいかやうの仕合とも成親兄弟迄立身する事なれば容儀はたしなむべきこと也されども何ほど形うつくしき人といへ共心ざしあしくいやしければ一旦のてうあひもおとろへて末とをらぬものなりよつて心の徳をみがくべき事也仏説に外面似菩薩内心如夜叉ととき給ひしも顔形斗うつくしくて心のあしきたとへなり又生れつきの品はよけれ共風俗の拵へあしくてつたなく見ゆる人あり是口惜き事也又さまでよからぬ生れつきなれ共風俗の仕こなし髪の結やう衣装のもやうなどの心づかひにて美人のやうに見ゆる人あり是其人の心のはつめい也されば生れつきのあしき所をもなをすの道理なれば風俗のたしなみ女中の第一成べし兼好法師も女は髪のめでたからんこそ人の目だつべけれといはれし也俗に髪型といへば髪の結やうに気を付給ふべしさはいへどあながちに風流をつくらんとて衣装のもやうなど一際めだちてきれかはり髪の結やう顔の作りなどはでにするははしたなくいやしき遊女の有様に見えてかへつてあしき也たゞ何となくじんじやうにして艶にやさしく自然と風流ありてはなやか成こそ其人の心ばせもさぞとおしはかられて心ときめきする物なりつれ／＼草にも大かたの人の心はもてる調度にてもおしはからるゝとあればまして風俗の作りやうにては其人の心のさまをしらるゝ事なればはづかしき事成べし都女郎の風俗とて諸国の女中も見習ひてうつす事なればいやしき風にしなすは無念の事成べし都の風俗といへるも其品やはらかにして艶成をもつて也[96]

『女教艶文庫』では、まず女性が大切にすべき徳と容の二つについて触れ、玉の輿に乗るためには、外見を装うだけでなく、心の徳を磨くことが必要であることを説いている。しかし、生まれが良くとも外見の様子（着物の着こなし方など）が悪ければ、良いように

---

94 鈴木則子「江戸時代の化粧と医療――『容顔美艶考』と『都風俗化粧伝』の分析を中心に(日本歯科医史学会第 30 回(平成 14 年度)学術大会一般演題抄録)」『日本歯科医史学会会誌』、24(4)、2002 年、p.290。

95 小泉吉永『女子用往来刊本総目録』、大空社、1996 年、p.169。

96 江森一郎監修『江戸時代女性生活絵図大事典　第 6 巻』、大空社、1994 年、pp.32-38。江森は句読点を入れて読みやすくしているが、本論では原文の形にそって引用した。

は見えない。逆に、生まれが悪くとも、髪の結い方や衣装の模様などに気遣いがあるならば、美人に見えることができるとしている。つまり、悪い部分を直すためにも髪の結い方などの外見に気を配る必要があるとしているのである。しかし、化粧などの外見のみに気を配ることは、遊女のようでありはしたないことである。外見の様子は心のさまを他人に見せることであるため、気を付ける旨が記されている。諸国の女性が見習う都の女性（=都女郎）の風俗は、品が柔らかく艶やかである必要がある。これらの言葉は、『都風俗化粧伝』に度々登場しており、女性の徳と容姿の不可分性を説いている点で共通している。

この『女教艶文庫』を模倣した『女小学身持扇』（天保 14 年以前に刊行）を見ると、前書に「美しくなるための化粧」について挿絵入りで書かれている[97]。『女小学身持扇』の体裁は、天地 25.7cm、幅 17.1cm であり、全部で 28 丁である。女子往来物のひとつ『女小学』の異本と見なされており、頭書や前付の記事は他の往来を模倣したものと考えられている[98]。文章は変わっておらず、『女教艶文庫』の内容を踏襲している。挿絵についても、着物の柄などに多少違いはあるものの、髪型などは『女教艶文庫』のものと同じである。

挿絵に描かれているのは、髪を結う女性、身体を手ぬぐいで拭く女性、鏡を見ながら眉を引く女性、若い女性の額を剃刀で剃っているもうひとりの侍女と思われる女性が描かれている[99]。『女小学身持扇』が刊行する少し前には、文化 7（1810）年に『化粧眉作口伝』、文化 10（1813）年に『都風俗化粧伝』、文政 2（1819）年に『容顔美艶考』が刊行されるなど化粧書が刊行された。それ以前から、「美しくなるための化粧」が女子用往来の中にも記述されており、化粧の必要性はすでに確立していたといえよう。金崎充代は「（女子用往来は）庶民の娘たちにとって自分の身近な環境を描いたものではなかった。彼女らは往来物を見ることで、自分たちよりも上の階級の生活をかいまみ、憧れをかきたてられたのではないだろうか。そして、その憧れを現実にする手段として、結婚があったのではないだろうか。」[100]と述べている。女子用往来が結婚への憧れを示し、かつ強化するものであると同時に結婚をするためには外見から美しくならなければという考えを普及するものであったといえるだろう。

近世後期になると、化粧の実用書（化粧書）が相次いで刊行された。それらの化粧書は民衆の化粧への関心の高まりを反映していると考えられるが、同時にそれらの出版によって、さらに化粧の必要性の認識が広まったと言えよう。化粧書が刊行される以前から化粧

---

97 『女小学身持扇』が『女教艶文庫』を模倣した点については、小泉吉永「往来物における絵図資料の活用について」(教育史学会第 46 回大会コロキウム要旨)を参照した。(http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/E_2002_10.htm　2014 年 12 月 13 日最終閲覧)
また、江森一郎は『江戸時代女性生活絵図大事典　第 6 巻』（大空社、1994 年）において、『女教艶文庫』と『女小学身持扇』の挿絵を比較している。(pp.30-38)

98 小泉吉永『女子用往来　第 86 巻』、大空社、1994 年。

99 本屋治右衛門(仙台)版『女小学身持扇』、石川松太郎監修『往来物大系　第 86 巻』、大空社、1994 年。

100 金崎充代「近世女子用往来に見る産育―「憧れ」としての往来物」『教育学論集』22 号、1996 年、pp.24-25。

で美しくなることが説かれ、化粧によって美人となることで玉の輿に乗ることができるとまで書かれるようになるのである。

このような記述の変化は、幸せな結婚を実現するために容姿を向上させるという目標が確立され、そのための方法として着物の着こなしや髪の結い方に加えて、化粧の有効性が注目され、化粧の知識と技術が必要とされていった動きを示している。それと同時に、それまでの化粧が結婚後の女性（婦人）に必要とされていたことに対し、結婚前の女性（児女子）にも化粧の必要性が説かれるようになってきたのである。近世の化粧法は、化粧品の種類も方法論も多様な現代ほどには概念的にも技術的にも明確化されていないが、スキンケアとしての基礎化粧と、メイクアップ化粧と、メイクアップ化粧の土台となるベースメイク化粧の区分がなされていることは確認できた。スキンケアの重要性は女子用往来から述べられており、化粧書においてもベースメイク化粧の必要性とともに語られている。

こうした変化を生起させつつ、近世から近代へと時代が移るととりわけ西洋の文化と技術が流入することで、化粧品や化粧方法も急激に近代化する。洋装の登場によって、洋装に似合うように髪型も変化する。また、お歯黒や眉剃り、眉づくりといった化粧法が外国人たちの目に奇異に写ったことから、明治 3（1870）年に太政官布告、明治 6（1873）年に昭憲皇后が率先して行わなくなったことを機に、徐々に一般の女性たちも行わなくなっていった[101]。お歯黒は結婚が決まると染めはじめ、眉剃りは子どもができると始めた、近世の化粧習慣であった。そのような儀礼を廃したところに、近世から近代への化粧の捨象をみることができる。だが、スキンケアによって土台である肌を整えることや、メイクアップによる容姿の美しさの向上、その目的としての結婚への憧れは近代以後にも継承されており、近世から近代への連続性と捉えることができる。

このように、近世における化粧は、「良き妻や嫁であり、そこでは夫や舅姑に対する従順という徳目が第一に求められた」[102]対家族道徳で構成された女性像をつくるために、「身だしなみ」として必要なものとされたのである。そして、「伝統」的なものとして、結婚可能な身体をもつ女性たちの意識の中に刷り込まれていったと考えられる。その意識を近代以降に最も強く引き継ぐことになったのが、次章から論じる「女学生」や「少女」という新たなカテゴリーなのではないだろうか。

---

[101] 村田孝子編著・駒田牧子翻訳『近代の女性美 ： ハイカラモダン・化粧・髪型 = Female beauty in modern Japan：makeup and coiffure』、ポーラ文化研究所、2003 年、p.4
[102] 小山静子『良妻賢母という規範』、p.24

第 2 章　「良妻賢母」の二分化と化粧の役割

前章において、近世後期の女子用往来では「良妻」となることが女性の徳であり、幸せであるとして、良い伴侶を得て、良き妻となるために容姿を高める方法としての化粧の役割が説かれていたことを明らかにしたが、近代になると「良妻」に「賢母」が加わった「良妻賢母」という理想像が主流となっていく。若桑みどりはジェンダー史研究の観点から、近代国家は男性に対して労働力と兵力を、女性に対してそのための生産者と維持者であることを求め、家庭に入って子供を産み、育児、家事を行うことが道徳的であるという教育が徹底されたと述べている[1]。

この方針により、女性の理想像として「良妻賢母」が掲げられ、妻として家を守り、母として子どもを育てるためには「健やかな身体をもつこと」が必要とされた。そのため、「衛生」という近代に新たに導入された概念が重視されることとなったのである。

そのため、本章では衛生概念が浸透していく中で、女性が「良妻賢母」になるために必要な身体とはどのようなものだったのか、また、その際、化粧はいかなる役割を担っていたのかを検証する。

第 1 節　衛生概念について

近代の衛生概念について、社会学者の宝月理恵は「国家が国民の身体をコントロールするための近代西洋医学を用いた統治技術としてつくられたものである」[2]と述べている。そして、衛生規範や衛生道徳は個人の身体を規律化し、集団生活に順応しうる近代的個人を作り上げた。また同時に、母親を標的に衛生規範を介して、有為な国民の再生産の拠点としての家庭を構築したと論じている[3]。そもそも、近世の日本には漢方医学による養生概念が存在していた。養生概念とは、「『不老長生』『無病長生』を目的として、それらをより確実なものにしていくための生活実践としての『養生』のあり方について述べている」ものであり、「『生命』自体に高い価値が与えられていた」と衛生学研究の瀧澤利行によって説明されている[4]。養生概念と衛生概念について、瀧澤は、個人の健康形成概念としての「養生」と集団ないし社会の健康形成を理念型としてきた「衛生（Hygien）」とが混淆する過程で、明治日本ではきわめて特異な概念統合がなされたとする[5]。そして、個人から国家への

---

[1] 若桑みどり『皇后の肖像　昭憲皇太后の表象と女性の国民化』、筑摩書房、2001 年、pp.10-12。
[2] 宝月理恵『近代日本における衛生の展開と受容』、東信堂、2010 年、p.120。
[3] 同上書、p.276。
[4] 瀧澤利行『健康文化論』、大修館書店、1998 年、p.30。
[5] 瀧澤利行『近代日本養生論・衛生論集成　別巻　近代日本健康思想の成立』、大空社、1993 年、p.237。

漸層化が一見論理的に矛盾なくおこなわれ、個人の「養生（衛生）」は国家の「養生（衛生）」の必要不可欠な単位となったと論じている[6]。

このように形成された衛生概念を国民に知らしめるためには、衛生によって得られる良い結果を示す必要があった。そこで、衛生概念をもち健康であることが幸福につながる、という筋道をつくることとなる。このことについて、新村拓は次のように述べている。

> 幸福を脅かすものは不潔であった。それは清潔感の欠如、衛生法への非協力、怠惰や羞恥心の欠落という不健全な精神から来るものとされ、それゆえに政府は道徳と科学をからめた健康教育を徹底させる必要があった。その内面化教育こそが清潔で健康な均一社会を生み出す鍵と捉えられていたのである。[7]

このように、「健康=幸福」という分かりやすい図をつくり、教育に盛り込むことで衛生概念の浸透と健康な身体づくりをすることを示したのである。

さらに、女性に対しては衛生に関する知識を得ることは、将来の母として育児をするうえでも重要であるとされた。そのため、女性が衛生を身近なものとして捉えるため、「美容」と結びつけて捉えられるようになったのである[8]。

第 2 節　健康美によって回避される身体の二分化

衛生と美容を結び付けるために新たに発明された概念が「健康美」である。

健康美という概念によって「健康=美しい」という構図が強固につくりあげられた。その仕組みを原克は以下のように説明する。

> 健康美という言葉を発したとき、形式論理的には四つの分類が同時になされたことになる。まずは、健康でありかつ美しいもの。次に、健康ではあるが美しくないもの。さらに、健康ではないが美しいもの。そして、健康でもなく美しくもないもの。この四つである。
>
> (中略)要するに、健康美という言葉が言いつのられるとき、それは二重の機能を果たしているのだ。ひとつは、文字通り「健康とは美しいものだ」というストレートな意味を伝えること。と同時に、もうひとつは、暗黙のうちに「それ以外のものはダメだ」という意味を、いやおうなく含意してしまうということ。つまり、健康美という言葉は、ひとつの意味を伝達するものであると同時に、それ以外の意味を排除するもので

---

6 同上書、p.237。

7 新村拓『健康の社会史　養生、衛生から健康増進へ』、法政大学出版局、2006 年、pp.225-226。

8 鈴木則子「『女学雑誌』にみる明治期『理想佳人』像をめぐって」栗山茂久他『近代日本の身体感覚』、青弓社、2004 年、pp.137-162。

もあるのだ。[9]

このように、美しくなくても健康であることも、不健康な美しさも否定しながら、強調される健康美という価値観をつくり出したことによって、女性が健康や衛生についての関心を持ち、知識を得て、実践することとなり、国家が求める「良妻賢母」像の実現に近づくものと考えられた。しかし、子を産み、母になるためには結婚する必要があり、結婚するためには男性側にとって魅力的である必要がある。この「母としての身体」と「男性にとっての魅力的な身体」という二分化を回避するための方法のひとつとして、衛生と美しさを併せ持った「健康美」という概念が生まれたのである。そして、1920 年前後に衛生と美意識、セクシュアリティが結び付けられ、そのことが女性を社会規範に縛り付ける「美のくさり」となっていったと成田龍一は指摘している。佐伯は、「男性（将来の配偶者候補）の関心を惹き、より安定した生活を手に入れるために「美人」になるという戦略が要求された」[10]と述べている。このように、結婚までの女性は「商品」として容姿を美しくしなければならず、男性の眼にとまるためには、化粧を施して、着飾らなければならない。さらに、その化粧は近世の厚化粧の芸者ではなく、明治の最先端の理想的美人としてみなされた薄化粧であることが喜ばれた。その理由について、佐伯は、明治の女性の間で、手を加えた人工的な美しさよりも、飾らぬ美しさを「自然」で価値があると考えられたためであるとする[11]。そのため、近世までのメイクアップによって濃く塗られた顔よりも、自然なメイクアップによってつくられる顔が好まれるようになる。その薄く塗るメイクアップ法を示したのが美容家である。

第 3 節　美容家の存在―遠藤波津子を例に―

美容家（=美容師）とは「美容術を施して他人の顔かたちを美しくすることを職業としている」[12]者のことである。美容術とは「美顔・整髪・着付けなど、容姿を美しくするために施す技術」[13]のことである。高橋晴子は「美容師という呼称が普及するようになったのは一九一〇年代にはいってのことである」[14]と述べている。また、後述する遠藤波津子が美容術を学んだのが明治 36（1905）年であることから、明治 30 年代後半から明治 40 年代はじめには美容家が登場していたと思われる。当時の美容家たちは、美容術を「美顔術」と呼び、美顔術を広める活動を行なった。このような美容家たちの始祖ともいうべき人物の一人が遠藤波津子(1862-1933)である。佐伯は、遠藤波津子について、「西洋社会を参考にして女性

---

[9] 原克『美女と機械　健康と美の大衆文化史』河出書房新社、2010、pp.15-16。
[10]佐伯順子『明治「美人」論 ： メディアは女性をどう変えたか』、NHK 出版、2012 年、p.121。
[11] 同上書、p.56。
[12] 「びよう - か【美容家】」『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2002 年より抜粋。
[13] 「びよう - じゅつ【美容術】」『大辞泉』、小学館、第二版、2012 年より抜粋。
[14] 高橋晴子『近代日本の身装文化　「身体と装い」の文化変容』、三元社、2005 年、p.350。

の社会的地位を向上させようとする、『文明開化』の男女平等への志向と連動し、化粧というテクニックを超えた女性の主体性の確立」[15]したと論じている。

では、遠藤とはどのような人物で、彼女の化粧法とはどのようなものであったのだろうか。

3-1　遠藤波津子とは

遠藤波津子は、文久 2（1862）年に現在の神奈川県足柄下郡河原町土肥に生まれた。明治 21（1888）年に結婚。明治 36（1903）年に横浜居留地に住むドクター・W・キャンブルーから、ハイジェニック・フェイシャル・カルチャーという顔面美容のマッサージ法を学んだ。そして、このマッサージ法を「美顔術」=健康を生かす化粧法とした[16]。そして、明治 38（1905）年、現在の銀座七丁目に理容館を創設した。このような近代的な美容術は、華族や財界、政界、文化人の子女、ハイカラな令夫人、令嬢方を中心に広がることとなったと、四代目遠藤波津子は述べている[17]。今成弘によると、当時の日本髪の結い賃が 10 銭～30 銭であったのに対して、美容家が経営する美容院では、シャンプー・結髪・美顔術・マニキュアがセットで 7 円（約 35000 円）となっていた[18]。価格から考えても、現代の高級エステサロンに近かった美容院の顧客は上流階層に限定されたものであった。

遠藤波津子の理容館について、『婦人世界』では美顔術の開業者が初めて現われたとし、今では大阪、神戸、広島等に支部を設けられる程繁昌していると語られている[19]。東京だけでなく、またたく間に大阪や神戸などにも店舗を設けていたことは、遠藤の美顔術がいかに婦人たちの間で人気を博していたかを示している。

また、遠藤は自身の店で化粧品を売り出す。それがライラック化粧品である。ライラック化粧品は、米国ライラック社の製品を遠藤が日本人の肌に合うように改良して明治 43（1910）年に販売し始めたものである。当初は美顔術の顧客用として販売されていたが、その後広く販売されるようになった。この頃になると、「美顔術」が世の流行語になっていたこともあり、美顔術で用いる西洋式化粧品の売上げは良かったようである[20]。

美容家が店を出し、自身で研究した化粧品を売り出すためには客層というものが重要である。理容館の客は、三井家や岩崎家、渋沢家など財閥、華族などの上流階層の人間だった。当時の上流階層の女性は、外の世界とあまり触れることがなかったようで、外の世界への唯一の「窓」の役割を果した職業の一つが美容師であったと、タキエ・スギヤマ・リ

---

[15] 佐伯 2012、前掲書、p.117。
[16] 並木孝信『BEAUTY LEGEND'S STORIES　近代美容の歴史を彩った先人たち』、女性モード社、2015 年、p.11。
[17] 遠藤波津子『遠藤波津子の世界：婚礼衣裳』、婦人画報社、1985 年、p.176。
[18] 今成弘『日本の美顔術・全身美容の始祖　芝山兼太郎伝』、女性モード社、1986 年。
[19]実業之日本社編『婦人世界第二巻第五号臨時創刊　化粧かがみ』、1907 年 4 月。
[20] 遠藤 1985、前掲書、p.181。

ブラは述べている[21]。この「窓」の役割を利用し、女流階層の女性とつながりを持つことによって、美容家は「上流階層の女性が認めた」という肩書きをつけることができたと思われる。

また、化粧品を販売するだけでなく、遠藤は自身の美容術を記した著書を刊行する。それが、『化粧と着付』である。後にこの本は加筆修正され、『正しい化粧と着付』として改版された。そこで、次節では、この 2 冊の著書の内容について考察する。

3-2　『化粧と着付』と『正しい化粧と着付』

遠藤波津子の著書『化粧と着付』は大正 7（1918）年に刊行された。その後、加筆され大正 15（1926）年に『正しい化粧と着付』として刊行されることとなった。

まず、大正 7 年版『化粧と着付』の内容を確認する。『化粧と着付』は、阿蘭陀書房出版から刊行された。B6 版で総ページ 200 ページ、定価は 2 円 20 銭であった[22]。その中には口絵写真が 32 枚掲載されている。また、内容は「化粧の巻」と「着付の巻」の 2 部構成となっている。

まず「化粧の巻」として、「化粧は婦人の美徳」と題し、化粧をする意義の説明から始まっている。遠藤は、化粧という言葉を「美しい顔は更に美しく、醜い顔は取り繕つて其醜い所を隠す」[23]という意味だとしている。そして、「化粧は天然の麗質を保護して益々其れを発揮するのが目的でありますから、決して無用の虚飾ではありません」[24]と述べている。しかし、「一部の教育家のやうに、唯其弊害ばかりを恐れて無暗に之を禁ずるのは非常な考違ひではなからうか」[25]と非難している。ここでいう「弊害」とは、「化粧を異性の眼を惹きつける手段」[26]と考え、「芸人遊女のやうに堕落した化粧を真似る」[27]人たちがいることである。化粧とは、「自分の気品を保つ上からのみならず、夫の体面を保ち或は家庭の名誉を維持する上から云つても、常に自分の位置階級年齢等を考へて、苟且にも他人に悪感を起させないやうに、また特殊の感じお與へないやうに各自相当の化粧を施すことは、婦人として絶対に必要な一つの義務であらう」[28]と述べる。化粧をすることは婦人にとって必要不可欠であることを説くと同時に、セクシュアリティを生計を立てるための商品とする女性たちの異性に向けた「堕落した化粧」と、富裕層の女性たちの上層階級意識を誇示するための「気品ある化粧」とを差異化する。その上で、美容院に通うことができないからこそ

---

[21] リブラ、タキエ・スギヤマ『近代日本の上流階級：華族のエスノグラフィー』、世界思想社、2000 年、p.77。
[22] 同上書、p.184。
[23] 遠藤波津子『化粧と着付』阿蘭陀書房、1918 年、p.1。
[24] 同上書、p.3。
[25] 同上書、p.4。
[26] 同上書、p.3。
[27] 同上書、p.4。
[28] 同上書、p.5。

上流階級に憧れを抱く中下層階級の女性読者たちにも向けて後者を強くアピールするのである。

遠藤の推奨する「気品ある化粧」の方法を具体的に見ていくと、まず「婦人日常の心得」で皮膚の構造について理解し、自身で気をつけることをまとめている。例えば、皮膚を健康的に整えるために睡眠が必要なことや、そのための方法が書かれている。また、皮膚の組織がどのように形成されているのか、どのような働きをしているのかという生理学的な説明が行われている。同じく、日やけの原理についても述べられ、その対処法として洋傘の使用を推奨している。このように、皮膚を健康な状態に保つための科学的な方法が西洋で行われていること示したうえで、次章の「化粧前のお手当」につなげているのである。

スキンケア目的の基礎化粧を説く「化粧前のお手当」では、まず剃刀の使用法が記されている。遠藤は「お化粧を綺麗にお見せ遊ばすには何は兎もあれ第一に皮膚を整へる必要」[29]があるとし、剃刀を使い無駄毛を剃ることが重要であると説いている。次に、入浴の際の注意と、洗顔の仕方について述べている。そして、入浴後に化粧水やクリームをつけることを推奨している。その後、「お素人方に出来る美顔術」として家でできる美顔術について記載し、化粧前に皮膚を清潔にする方法を述べている。

そして、「一般の化粧法」と題した章では、ベースメイクからメイクアップにいたる具体的な化粧方法を記載している。遠藤は化粧法を「普通の化粧法」、「濃化粧の仕方」、「薄化粧の仕方」、そして洋風の化粧の際に用いる「粉化粧の仕方」の 4 種類に分けて、それぞれ詳細に説明している。これらの化粧法は、薄化粧以外は、基本的にクリームを塗り、その後白粉を塗るという方法がとられている。それに対し、薄化粧の方法は、クリームは全く塗らず、水白粉を顔にごく薄くつけ、その上に化粧水をつけた刷毛でなでることが記されている。

このように、一般の化粧法が記載されたのち、「容貌に応じた化粧法」が記載されている。その項目は、「脂肪の強いお顔」、「荒性のお顔」、「血色の悪いお顔」、「赤ら顔及び頬の赤いお顔」、「面皰のあるお顔」、「雀斑のあるお顔」、「丸顔」、「長顔」、「色の黒いお顔」、「頬骨の高いお顔」、「目尻の下つたお顔と目の窪んだお顔」、「目尻の上つたお顔」、「お鼻の低いお顔」、「お額の広いお顔」、「お額の狭いお顔」、「眉毛の直し方」、「落し眉毛のお手当」、「毛虫のやうな眉毛」、「巾の広い眉毛」、「襟足の取り方と其お化粧」、「お口の大きい方」、「唇の厚い方尖つた方」、「艶紅のつけ方」、「笹紅のつけ方」、「洋風の紅のつけ方」の 25 種類に分けられている。遠藤は、眉毛を整え、頬紅と白粉を塗り、髪を整えることによって、それぞれの顔に合った化粧ができるとしている。

さらに、第 6 章では「年齢に応じた化粧法」が記載されている。まず、「七歳から十二三歳まで」の化粧が述べられている。クリーム、白粉、頬紅をつけ、眉毛を整えることで「大変お可愛らしく」[30]見えると述べている。次に、「十四五歳から十七八歳まで」の化粧が述

---

[29] 同上書、p.18。
[30] 同上書、p.71。

べられている。遠藤は、「少女から一人前の御婦人へ」[31]なる時期であるため、洗顔などの手入れを怠らないように説いている。さらに、「十八九歳から廿二三歳まで」の化粧について説明され、「二十四五歳から三十歳まで」、「三十歳から三十五六歳まで(忍び化粧)」について述べられている。次に、「四十歳から四十五六歳まで(隠化粧)」が述べられ、最後に「五十歳から六十歳まで」の化粧が述べられている。

年齢別の化粧方法が述べられたあと、遠藤は「季節に応じた化粧方」を記している。「御年始頃」、「お花見時」、「初夏の頃」、「眞夏時」、「避暑地に於ける水の御注意」、「海水浴後のお手当」、「山地避暑の御注意」、「温泉に於ける御心得」、「香水の用ひ方」、「腋臭のお手当」、「初秋の化粧と日焦」、「厳寒の頃」、の 12 項目に分けられ、それぞれの時期に合った化粧法が述べられている。

第 8 章では「場合に応じた化粧法」が記されている。まず、「学校卒業当時のお手当」が記されている。遠藤は、通学中は白粉をつけることは少ないため、白粉を塗るようになるのは女学校卒業後のことだと述べ、それよりも日常の手入れが必要であるとしている[32]。次に、「御見合のお化粧及び心得」、「写真の撮り方と其注意」、「園遊会のお化粧」、「夜会及び宴会のお化粧」、「結婚披露に招かれた時のお化粧」、「観劇のお化粧」、「お産後のお手当」、「葬式の心得」とに分けて説明されている。

最後に、「其他色々の注意」として「眼の美を保つ法」、「手のお化粧」、「爪のお化粧」、「耳のお化粧」、「御足の注意」、「毛髪の保護」、「毛髪の洗ひ方と其洗料」、「枝毛の手当」、「髪の解し方」、「中剃と雲脂」、「枕禿げの手当」、「快脳術」、「日本髪と束髪」、「癖直しの仕方」が順に述べられている。

このように、遠藤が大正 7 年に記した『化粧と着付』では、まず婦人の化粧がいかに必要かという持論が述べられ、その後美顔術や化粧法を記すという形式になっている。しかし、大正 15 年に刊行される『正しい化粧と着付』ではその記述方法に違いが出る。

『正しい化粧と着付』は『化粧と着付』と同じ B6 版で、総ページ数は 204 ページ、定価は 2 円であった[33]。挿絵数は 40 枚（うち、化粧の部 5 枚、着付の部 35 枚）となっている。次に口絵写真として、和装の花嫁の写真が 22 枚、ドレス姿の女性が 1 枚、帯をお太鼓に結んだ女性の写真が 1 枚の計 24 枚貼られている。構成は『化粧と着付』と同じく「化粧の部」と「着付の部」の 2 部構成となっている。

「正しい美容法の基礎」ではまず、次のように記述されている。

> 昔からお化粧は婦徳の一に数えられ、婦人は身だしなみを忘れぬようにと教えられて来ましたが、それに伴ふ弊害もあつて、一部の道徳者はこれを嫌ふ傾きも見えました。(中略)人間は或る期間を経ると体力が衰へて、肉体の美が消滅するように出来てゐます

[31] 同上書、p.72。
[32] 同上書、pp.105-106。
[33] 遠藤 1985、前掲書、p.184。

から、肉の衰へを補ひ隠す必要も起るのでございます。殊に婦人は世の花とも称へられ、生きたる美術品又は紅の字を当てられる程に、美しくあるべきものとされてゐますから、その十分に発揮させ、醜い所を取繕ふのは当然の義務でありませう。[34]

この部分は『化粧と着付』と同じであり、美しく化粧をするには、その前段階である整容法をきちんと身につけなくてはいけないとしている。そのためには「身体の健康、精神修養、自分の容貌にふさはしい化粧術と、この三つを心掛ける事が一番大切であります」[35]と述べている。そして、この 3 つを心掛けるために必要なこととして、睡眠をとり皮膚を健康にしておくこと、精神を落ち着かせ気品をもつこと、皮膚組織の構造を理解しておくことを挙げている。

さらに、「化粧道具と化粧品」の項目で、化粧をするための刷毛について、その種類と保存方法を挿絵付きで紹介している。この記述は『化粧と着付』ではなかった内容である。そして、化粧品では、日常使用する化粧品を挙げつつ、最も重要であるものは化粧水であるとしている[36]。これらの項目は、『化粧と着付』では第 1 章と第 2 章にあたり、『正しい化粧と着付』ではまとめられて記述されている。

次の「皮膚日常の手当」は、『化粧と着付』の中では第 3 章にあたる。ただし、記載順は変えられている。化粧前の肌を整える方法が記されており、まず毎日の洗顔方法について書かれている。次に、入浴時における顔と身体の洗い方が記されている。そして、洗顔後に施す美顔術の方法が記載されている。

美顔術は前述したとおり、遠藤波津子たち美容家によって取り入れられた美容法である。本来ならば、美容家によって施術してもらうものであるが、遠藤は自身の家でもできるように、その方法を記載していた。『化粧と着付』では、挿絵もなく記述のみであったが、『正しい化粧と着付』では、美顔術に使用する道具の挿絵と美顔術の順番の挿絵が描かれ、美顔術の方法をより分かりやすく説明している。次に、剃刀を使い産毛を剃る方法を挿絵付きで記述し、白粉をつけるまでの方法が詳しく書かれている。

次に、「白粉のつけ方五種」が記載されている。『化粧と着付』では 4 種であったが、「早化粧」の項目が追加され、5 種の白粉のつけ方が説明されている。まず、「普通の化粧法」は「湯上りや、朝の身じまひに施す化粧法であり、一寸した訪問や買物散歩などの外出時に」[37]する化粧法であると述べている。その方法は、襟にハイゼニッククリームを少量塗り手で伸ばし、その手についたクリームに化粧水を落としてさらに目から下に塗り、刷毛を用いて水白粉を薄く塗る。最後に、粉白粉をもみ込むように押さえつける、という方法である。それにより、「眞から色が白ように美しく」[38]白粉がつくと述べている。

---

[34] 遠藤波津子『復刻版　正しい化粧と着付』女性モード社、1997 年、pp.1-2。
[35] 同上書、p.3。
[36] 同上書、p.11。
[37] 同上書、p.24。
[38] 同上書、p.25。

次に記載されているのが「濃化粧の場合」である。「濃化粧は重に結婚式や披露で礼装をお召しになる時、又は多勢の前で音楽を演奏なさる場合などで兎に角紋服や社交服を召して晴れがましい場所へお出になる時に施すお化粧」[39]である。そのため、「斑のないように白粉をつけ、それを長く保たせる必要がある」[40]としている。そのために必要なこととして、クリームをつけることが重要として、むらなく付けるようにと記述している。また、濃化粧は一度に濃く塗る化粧ではなく、水白粉を何度も重ねて塗っていく化粧であるとしている。

次に、「薄化粧」が記載されている。「夕涼みの浴衣の時とか、親しい人達四五人の集まる時」[41]に最もふさわしいとされている。この化粧ではクリームは用いず、水白粉を薄く塗り、さらに化粧水を上からつけることで、白粉が肌に落ち着くという方法である。ここで紹介されている薄化粧は若い方がするものであり、お年を召した方のは忍び化粧、隠し化粧として別の項で述べると記載されている。

四つ目に紹介しているのは、「粉化粧」である。洋装をする際にする化粧として、細かく説明されている。この頃になると、粉白粉も真白なものだけでなく、肉色（淡紅色）、肌色（黄色）、緑色、紫色などがあると述べ、その粉も荒いものと細かいものがあるとしている[42]。粉化粧をするには、まずコールドクリームを疋、パッフに粉をつけて一面に真白く打ち込み、次に、刷毛で眉毛やまつ毛などの白粉を払い、頬紅を付ける。最後に、鼻頭などにもう一度白粉をつける、という手順である。

最後に記載されているのが、「早化粧」である。「早化粧」の項目は、大正 7 年版では掲載されていなかったため、化粧品や化粧道具の改良などによって、その後にできた化粧法であるといえよう。早化粧は、「外出勝（ママ）の方や、人出入の多い家庭の主婦、又は人を待たせて置いた場合」[43]にする化粧だと述べている。早化粧は、クリームにライラック水を混ぜたものを塗り、刷毛で水白粉をつけたあと、粉白粉を塗り、眉毛を直せばできる 5 分程度の化粧である。さらに、3 分ほどでできる方法も記載され、いかに手早く化粧をするかが記載されている。

次に、「化粧栄えさせる諸注意」として、顔以外の身体に関する化粧法が述べられている。まずは「日本婦人は頸の美しさに大きい魅力がある」[44]と述べ、「頸足の白粉」について説明している。さらに、「耳の化粧」をすることで顔を一層引き立てることができるとしている。

次に、白粉を付けた後の顔に色味を付けるために、黒の化粧として眉墨を引いて眉を整

---

39 同上書、p.25。
40 同上書、p.25。
41 同上書、p.28。
42 同上書、p.29。
43 同上書、p.30。
44 同上書、p.31。

える「眉毛の直し方」と、赤の化粧としての「紅のつけ方」が記載されている。紅のつけ方の中には、『化粧と着付』で紹介されていた「笹紅」も掲載されている。遠藤は「現代向ではありませんが、小さいお子さんなどには可愛らしいもの」[45]であると述べている。

さらに、手足の手入れについても記載されている。特に、手については、「美爪術」が詳しく説明されている。「爪を美しくする事は美容上からだけでなく、衛生上からも必要である」[46]とし、美爪術のために使う道具も挿絵が描かれ、その説明もかなり詳しく書かれている。

以上のように、顔から手足までの基本的な化粧方法が掲載されたのち、時節に応じた化粧法がそれぞれ記述されていくこととなる。まず始めに書かれているのは、「四季の化粧法」である。新年、春先き、梅雨期から初夏、盛夏、初秋から中秋、晩秋から冬にかけてと、6期に分けて、それぞれの時期の化粧法について掲載している。さらに、「日焦けの予防と手当」として夏の日やけや冬の雪やけに対する注意や、温泉によって皮膚の色が変わることに対しても注意するように述べるなど、皮膚を白く保つことをかなり重視していることがわかる。

次に、「皮膚に応じた化粧」として、「色の黒い顔」、「赤ら顔」、「血色の悪い顔」、「脂肪の強い顔」、「荒性の顔」に分けて述べられている。これらの場合の化粧をする際に、最も多く登場しているのが頬紅である。頬紅によって赤ら顔を美しく見せる方法や、血色を添えるように書かれ、頬紅が健康的な肌に見せるために必要な化粧品であったことが読み取れる。

「顔立に応じた粧り方」では、「丸顔」、「長顔」、「頬骨の高い顔」、「広い額」、「狭い額」、「鼻の形いろ／＼」」、「眼の作り方いろ／＼」」、「眼の美を保つ法」、「太い眉と巾の広い眉」、「口の恰好」の 10 項目に分けて述べられている。この項目は、『化粧と着付』の内容よりも詳しく記述されている。顔立ちによって化粧を工夫する部分が違うことや、額、鼻、眼、眉、口の順で書かれている。

「年齢に応じた化粧」は、『化粧と着付』では第 6 章にまとめられている。「幼兒時代」、「女学生時代」、「青春時代」、「三十才前後」、「中年時代」、「四十歳前後」、「老年時代」に分けられている。『化粧と着付』では、「〇歳～〇歳」という風に年齢別に分けられていたのに対し、『正しい化粧と着付』では、「〇〇時代」という風に書き方が変えられている。しかし、「女学生時代」の化粧について「化粧に念を入れず、生地を整へる事に注意なさいませ」[47]と述べているように、記述内容に変化は見られない。

「時に応じた化粧法」では、「日本髪と束髪」、「見合ひの化粧と心得」、「写真化粧と撮り方」、「昼間の会合」、「夜の宴会」、「音楽会、観劇の化粧」、「結婚の披露宴」、「凶事」に分けて述べられている。『化粧と着付』の内容とほとんど変化は見られないが、「学校卒業当

---

45 同上書、p.36。
46 同上書、p.38。
47 同上書、p.68。

時のお手当」についての記述がなくなるなど、多少の変化を見ることができる。

次に、「肌に対する種々の注意」では、まず「若さを失はぬ肌」について述べられている。この記述は『化粧と着付』には書かれていない内容であるため、若さを失わないというアンチエイジングの方法が新しく導入されていることが分かる。次に、「そばかす」、「にきび」、「はたけ」など、顔のできものに対する対処法が記載され、さらに「腋臭の手当」、「産後の手当」などが掲載されている。

最後に、「毛髪上の注意」について述べられている。毛髪の保護の方法や、毛髪の洗い方などが記載されている。また、洋髪を結うための鏝の当て方や逆毛の立て方なども記載され、洋風の髪型が結われるようになってきたことが読み取れる。これらの方法については、『化粧と着付』にはない。

このように、大正 7（1918）年に刊行された『化粧と着付』では和装における化粧や髪形が重視されていたが、『正しい化粧と着付』が刊行される頃には、化粧法も髪型も洋風なものに変化してきていることが分かる。さらに、『化粧と着付』、『正しい化粧と着付』は近代の化粧書として、『都風俗化粧伝』の近代版のひとつとして数えることができるのではないだろうか。

3-3　『都風俗化粧伝』との比較

『化粧と着付』、『正しい化粧と着付』の内容は、近世に刊行された『都風俗化粧伝』の化粧法との類似点が多い。

まず、『都風俗化粧伝』も『化粧と着付』、『正しい化粧と着付』も、どちらもスキンケア法とメイクアップ法が記載されているという点である。近代に入り西洋の衛生概念が流入することによって、それまでの「養生」という考え方から「衛生」による「健康美」という考え方が生まれた。『都風俗化粧伝』は「養生」に沿って素肌の清潔さを重視し、『化粧と着付』と『正しい化粧と着付』では「衛生」に沿って素肌の清潔さを重視していることから、スキンケアを重視するという点において連続性をみることができる。

また、その構成も、『都風俗化粧伝』、『化粧と着付』と『正しい化粧と着付』はよく似ている。『都風俗化粧伝』では、まず上巻で皮膚の肌理の大切さや面皰やあざなどに関する説明とベースメイクについて書かれており、中巻で化粧の意義を述べたのち、化粧方法について記述されていた。

中巻で述べられていた化粧方法については、『化粧と着付』や『正しい化粧と着付』と類似している点が多々ある。例えば、それぞれの顔に合わせた化粧法を述べる際に「長い顔の場合」や「丸顔の場合」など、『都風俗化粧伝』と同じ内容で書かれている。また、紅の化粧法の中で「艶紅」なども近世の化粧法に少し改良を加えたものが掲載されるなど、基本的な化粧法に大きな違いはない。

また、『都風俗化粧伝』は嫁入り前の女性から結婚後の女性まで幅広い年齢層の女性を読

者対象としていた。このことも『化粧と着付』、『正しい化粧と着付』の読者対象と共通している。結婚前から結婚後まで読めるようにしている点にも類似点をみることができよう。

相違点として挙げられるのは、『都風俗化粧伝』と違い『化粧と着付』、『正しい化粧と着付』では皮膚構造の説明など、科学的な要素を含めて説明している点である。また、使用する化粧品も、それまでの伝統的な美容要素である糠などを使用するだけではなく、西洋の技術を取り入れた化粧品を使用することを勧めた。また、血行を良くし、肌を美しくする美顔術を取り入れたことも、近代の化粧書の特徴である。

このように、近代に流入した衛生概念を化粧にうまく取りこみ、それにより自身の化粧法を紹介したのが美容家である。美容家の誕生と美容書の刊行は、化粧と衛生概念をうまく繋いだといえよう。教育に衛生概念を組み込み、その浸透を図ったように、美容家と美容書は化粧に衛生概念を組み込み、「健康でありかつ美しいもの」[48]を作り出す啓蒙活動を行なったと考えられる。

「良妻賢母」を理想像とした結果、「母としての身体」と「男性にとっての魅力的な身体」という二分化を回避するための方法のひとつとしての「健康美」を体現するための役割としての化粧が必要とされたのである。

[48] 原 2010、前掲書、p.15。

第 3 章　女子教育における理想像

理想的な女性になるための心得、美容法、化粧法を説いていた近世の化粧書や近代に登場した美容家の著書は、幅広い女性読者層を教育対象とした指南書であった。本章では近代女子教育の黎明期に、理想的な女性の育成を目的とした高等女学校という公的な教育機関でいかに容貌に関する心得や知識、そして化粧が教育のなかに取り入れられていたかを当時の教科書、教育論における美育の導入、女性教育者の著述から検証していく。

第 1 節　高等女学校における修身

明治 28（1895）年 1 月に高等女学校規定が公布され、6 月には教科書検定規定が公布された。次いで明治 32（1899）年 2 月に高等女学校令が公布されたことにより、女子中等教育が制度的に確立した。第二章で述べたように、近代国家による女子教育は、労力であり兵力でもある国民の生産と育成を担う女性、すなわち女子をいかに立派な良妻賢母に育てるかという良妻賢母主義をその基盤とし、かつ最大の目標としていた[1]。明治 30 年代から、全国に高等女学校が設立され、第二次世界大戦の終結まで女子中等教育を担っていたが、実際には「高等女学校は、一方で中等教育機関でありながら中学校に比べると教育内容や教育程度は低く、他方で良妻賢母育成を目標に掲げながら、家事・育児教育に徹さず、従来の女子教育に比べれば、程度の高い普通教育が与えられる学校であった」[2]という見方もある。

そのような高等女学校の教育内容は、次のとおりである。

まず、明治 28（1895）年に初めて示された高等女学校の学科目は、修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、家事、裁縫、習字、図書、音楽、体操である。このうち、外国語と図書、音楽は随意科目であった。また、家事、裁縫が女子教育において加えられていた。

明治 34（1901）年に「高等女学校令施行規則」第二条に「修身ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キ道徳上ノ思想及情操ヲ養成シ中等以上ノ社会ニ於ケル女子ニ必要ナル品格ヲ具へ」させることを要旨とすることが定められたように[3]、第二次世界大戦後に改められるまで、教育勅語に基づいた「修身」という科目名で行われた道徳教育は全ての科目に先立つ最も重要な教育科目と目されていたが、こと女子教育においてとりわけ重視されていた。明治

---

[1] 蔵澄祐子「近代女子道徳教育の歴史：良妻賢母と女子特性論という二つの位相」『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室紀要』34 号、2008 年、p.51。
[2] 小山静子『良妻賢母という規範』、勁草書房、1991 年、p.50。
[3] 久保内加菜「女子教育の構成に関する歴史研究(その一)」『山脇学園短期大学紀要』42 号、2004 年、p.91。

34（1901）年の高等女学校令施行規則と、明治 36（1903）年の高等女学校教授要目によって、裁縫と図書の配当時間は減らされ、修身と家事の配当時間が増やされたことは同時期の中学校と比べて、大きく違う点である。中学校では教えない家事や裁縫、音楽が高等女学校では教育内容に入っていることに加え、修身も中学校に比べて多く時間が割り当てられている。高等女学校の教育目標である良妻賢母を育てるために、最も重視されていたのが修身だったのである。

女子教育における修身は、「例話の人物として多く女子をとっていること、女訓・女徳に関する事項の多いこと、女子の礼儀作法に対する考慮が特になされていること」[4]などの特徴をもっていた。生徒に望ましい徳性を養成するための教育であり、アカデミックな学科と異なる「生活に関する科目」の一つと考えられていた[5]が、理想の女性となるための心得を学ぶ科目として、近世の女子用往来の伝統と理念を継承していたと言えよう。

1-1 修身教科書の三系統

高等女学校の各科目の教授内容は高等女学校教授要目によって定められた。修身は、第一学年と第二学年では、個人の生活習慣や家庭・社会・国家に対する道徳の形成に重点が置かれ、第三学年と第四学年では、将来結婚して嫁、妻、母になった場合の心得や家族に対する心得を中心としつつ、社会・国家・人類などへの「責務」により、女性としての全般的な道徳の涵養を目指した内容となっている[6]。その後、刊行される修身教科書はすべてこの要目に基づいて作られている。

修身教科書には、宮内省刊行の修身教科書、文部省の編集局から刊行されたものと、それに準拠して民間で編集された修身教科書との三つの系統のものがあった。

まず、宮内省刊行の修身教科書は、『婦女鑑』である。『婦女鑑』は明治 20（1887）年に刊行された。これは、皇后（のちの昭憲皇太后）の内意によって編集されたものであり、華族女学校の修身教科書にあてられ、その後一般にも使用がすすめられた。『婦女鑑』の内容は、女子の美談を和漢洋の材料によって編集されたものと、母親としての善行を集めて載せたものとなっている[7]。越後純子は『婦女鑑』について、「和漢洋にわたる例話を盛り込んだ総合的な列伝形式の女子用修身書の登場と見ることができ、しかも、それまでになく多くの徳目を女性に期待しており、特に『慈善』『愛国』などの徳目を取り入れた先駆的存在であったと考えられる」としている[8]。

---

[4] 海後宗臣編『日本教科書大系　近代編　第三巻　修身（三）』、講談社、1962 年、p.611。
[5] 久保内 2004、前掲論文、p.3。
[6] 姜華「修身教科書に見る良妻賢母教育の実際とその特質―明治後期を中心にして―」『早稲田教育評論』二五(一)、2011 年、p.93。
[7] 海後 1962、前掲書、pp.595-596。
[8] 越後純子「『婦女鑑』の研究：徳目構成と例話内容の分析を通して」『人間文化創成科学論叢』一三巻、2010 年、p.215。

次に、文部省が編集した修身教科書は『高等女学校用修身教科書』である。初版は明治34（1901）年であり、その翌年には訂正再版、明治37（1904）年に第三版、明治38（1905）年には第四版を発行した。さらに、明治 40（1907）年に新版を刊行している。なお、『高等女学校用修身教科書』使用した高等女学校は83校と、他の検定本の使用数と比べて最も多く使われている[9]。小山は、『高等女学校用修身教科書』を分析し、明治35（1902）年までの良妻賢母は舅姑と同居し、家事使用人も抱えた家族にあって、夫や舅姑につかえ、子を育て、教育し、家政を管理できる女性、そして国民としての自覚を持ち合わせた女性であるとした。しかし、明治40（1907）年に刊行された『新編高等女学校用修身教科書』は、良妻の条件として、無条件に夫に従順するのではなく、必要であれば諫言することが挙げられている。このことについて、小山は家事・育児を国家の視点でとらえ直し、家族の健康を気遣い、家庭の繁栄を助けることが女性の社会に対する務めであり、その家庭が良ければ社会に反映し、さらには国民の気風や国家の品位につながるとし、女性と国家の関係性を明確化した、と述べている[10]。

そして、民間で編集された初めての検定合格本は、井上円了の『中等女子修身書』である。そして、明治36（1903）年の高等女学校教授要目が公布されて以降、井上哲次郎や吉田静致などによって、修身教科書が発行されることとなった。とくに、井上哲次郎が刊行した『女子修身教科書』は全国で12校の高等女学校で使われており、一定数使用された教科書と推測されている[11]。

これらの 3 種類の修身教科書のうち、井上哲次郎の編纂による『女子修身教科書』は最も刊行された時期が長く、冊数も多いため、高等女学校での教育を知るための重要な手がかりとしてその内容を検証していこう。

1-2 井上哲次郎による修身教科書

日本人初の東京帝国大学哲学教授となった井上哲次郎（1856-1944）が編集した女子教育の修身教科書は以下のとおりである。

明治36（1903）年『女子修身教科書』、『女子修身教科書』（改訂再版）
明治37（1904）年『女子修身教科書』（改訂三版）
明治39（1906）年『訂正女子修身教科書』
明治40（1907）年『訂正女子修身教科書』（訂正五版）、『女子修身教科書　上級用』、『女子修身教科書　上級用』（訂正再版）
明治43（1910）年『再訂女子修身教科書』（訂正六版）

---

9 高等女学校研究会『高等女学校資料集成』第一〇巻、大空社、1989年、p.1。
10 小山1991、前掲書、pp.204-205。
11 姜2011、前掲論文、p.93。

大正元（1912）年『新編女子修身教科書』
大正 2（1913）年『新編女子修身教科書　上級用』
大正 5（1917）年『新訂女子修身教科書』（訂正再版）

このように加筆修正を繰り返しながら、1、2 年ごとに各 4 巻ずつ刊行されている。その構成は、高等女学校教授要目に沿ってつくられているが、内容は文部省のものに比べて具体的かつ詳細に述べられている。本論は明治 36（1903）年に刊行された『女子修身教科書』を中心に内容について考察する。

『女子修身教科書』は以下の 4 巻に分けて刊行されている。その構成は以下である。

第一巻
「第一編　生徒心得」、「第二編　衛生に関する心得」、「第三編　修学に関する心得」、「第四編　朋友に対する心得」、「第五編　起居動作に関する心得」、「第六編　物品に関する心得」

第二巻
「第一編　家庭に於ける心得」、「第二編　国家に対する心得」、「第三編　社会に対する心得」、「第四編　修徳に関する心得」

第三巻
「第一編　自己に対する務」、「第二編　家族に対する務」、「第三編　社会に対する務」

第四巻
「第一編　社会に対する務」、「第二編　所属国体に対する務」、「第三編　国家に対する務」、「第四編　国際に関する務」、「第五編　人類に対する務」、「第六編　萬有に対する務」、「第七編　結末に於ける訓戒」

これらの項目の中で、衛生や化粧に関することについて書かれている、第一巻の「第二編　衛生に関する心得」、「第五編　起居動作」、第三巻「第一編　自己に対する務」の 3 つの項目の内容を見ていこう。

「衛生」の項目では、①衛生の肝要なる事、②精神を安静にすべき事、③飲食を慎むべき事、④運動すべき事、⑤沐浴すべき事、⑥休息睡眠をなすべき事、⑦衣服家屋を清潔にすべき事が記述されている。これらは、明治 43（1910）年の『再訂女子修身教科書』（訂正六版）まで変わることなく記述された内容である。『再訂女子修身教科書』（訂正六版）では、①摂生の肝要なる事、②飲食を慎むべき事、③運動すべき事、④休息の必要なる事、⑤清潔にすべき事、という内容になっており、「摂生の肝要なる事」が新たに記述され、「精

神を安静にすべき事」が削除されている。

「起居動作」の項目では、①時間を貴ぶべき事、②秩序を整うべき事、③礼儀を重んずべき事、④容儀をつくろうべき事、⑤言語を慎むべき事、⑥品格を高くすべき事、⑦持久を務むべき事、⑧敏捷を務むべき事、⑨快活なるべき事が書かれている。しかし、明治 36（1903）年 10 月に出された第二版には「快活なるべき事」がすぐに削除されている。さらに、明治 43（1910）年には「敏捷を務むべき事」が削除されている。

以上のように、「衛生」、「起居動作」の項目は、改訂され続け、その内容を変化させ続けていた。これらの項目で削除された内容の中でも「快活なるべき事」、「敏捷を務むべき事」が削除されていることは注目すべき点である。当時の良妻賢母思想は健康のために運動は必要であるが、快活で敏捷であるよりも礼儀や慎みとそして容儀を重視していたことがわかる。

大正元（1912）年の井上編『新編女子修身教科書』において、女学生に求められた理想像は次のように集約されている。

> 男子は多く外に出てて、社会的の業務に従事すべきも、女子は多く内にありて、家政を治め、家人の和合を謀るを以て、其の任務となすものなれば、温順にして貞淑なるを、女子の第一の徳性とす。又其の動止は、しとやかにして、優美なるべく、言語は、やさしくして、上品なるべし。即ち男子には壮美を貴び、女子には優美を貴ぶ。両性各其の長所を発揮して、相共に家族・国家・社会に尽すべきなり。[12]

この記述には、「起居動作」、「修徳」の内容が含まれている。「起居動作」によって「容儀を整え、動止を慎むと共に、品格を高尚に」する。さらに、「修徳」によって「柔和」や「優美」が得られる。さらに、家族や国家、社会につくす前提として必要なのが、家庭を守り子どもを育てるための健康的な身体であり、そのために必要な項目が「衛生」であった。これらの項目を備えることにより、『女子修身教科書』が求める女学生像が完成するのである。

さらに「衛生」、「起居動作」、「修徳」を詳しく見ていこう。

・「衛生」について

近代日本に登場した衛生規範は、衛生と健康と容姿の美を関連づけることで、生涯を通じて日常の不断の努力と注意を女性の身体に向けることを可能にしたことは先行研究でも論じられており、また前章でも示した通りである[13]。成田が示したのは、1920 年代の衛生意識のことであるが、修身の教科書では、すでに衛生と健康と容姿の美を関連付けて述べ

---

[12] 井上哲次郎『新編女子修身教科書』第三巻、金港堂、1912 年、p.73。
[13] 成田龍一「衛生意識の定着と「美のくさり」―1920 年代、女性の身体をめぐる一局面」『日本史研究』366 号、1993 年、pp.64-89。

ている。

井上編『女子修身教科書』では、「衛生に関する心得」の中で、次のように始められている。

第一節　衛生の肝要なる事

人は、我が身に対する務として、衛生を重んぜざるべからず。身体健康ならずして、常に疾病多ければ、親に孝を致すこと能わず、君に忠を尽すこと能わず、又一家の幸福を図ることも、世間の利益を興すことも為し能わざるべし。然のみならず、我が身に取りては、朝夕の飲食も旨からず、月花の歓楽も興あらず、よろづの事、総べて憂の種ならざるはなし。

虚弱なる母の生める兒子は、大抵虚弱なるものなり。虚弱なる国民の殖え行くは、一国の上より見ても、甚だ憂ふべきことなり。

されば、女子は、殊に衛生を重んじて、健康なる母とならんことを心掛くべし。[14]

さらに、「第四節　運動すべき事」において、容姿の美について次のように述べられている。

世には、顔色蒼白にして、四肢枯痩せる婦女子を見て、美人なりと思えるものあれども、蒼白枯痩は、病人の相なり。美人と云うは、此くの如きものにはあらざるなり。[15]

このように、「衛生に関する心得」という項目の中で、衛生と健康と容姿の美は関連付けられているのである。まず、健康がすべての根源であり、そのためには衛生を重んじなければならないことを述べている。それは、女学生が「結婚し、子どもを産み育てる」という前提として考えられていたからである。健康な子どもを育てるためには、まずその母親から健康にならなければならないという考えのもとに、女学生は健康であることを求められた。そのため、「運動すべき事」において「顔色蒼白にして、四肢枯痩せる婦女子」は不健康であり、美人の代名詞ではないと否定的に語られているのである。この考え方は、井上の中で一貫したものであり、その後の教科書においても、同様の記述を見ることができる。

しかし、実際、健康になるために必要とされた運動は、当時の女子教育において活発に取り入れられなかった。「女性らしくなくなるから」という理由から、運動に対して反対意見があったからである。そのため、『訂正女子修身教科書』では、「運動」の内容で「家事手伝いも運動する事と同じである」[16]と妥協意見ともとれる記述がなされている。このよう

---

14 井上哲次郎『女子修身教科書』第一巻、金港堂、1903 年、pp.9-11。

15 同上書、p.17。

16 井上哲次郎『訂正女子修身教科書』第一巻、金港堂、1906 年、p.17。「運動すべき事」

に、衛生を重視し「健康なる母」となることを実現することは難しいことであったといえるだろう。

・「起居動作」について

「起居動作」には、まずはじめに「時間を貴ぶべき事」、「秩序を整ふべき事」が書かれている。時間の使い方や事物の前後本末を考え、秩序を整えることを説いた中で、外見（身体面）について書かれていたのは「容儀を整ふべき事」である。

「容儀を整ふべき事」については、次のような記述がされている。

> 容儀を整うるは、人の親愛を得る道なるのみならず、人に対して務むべき礼儀なれば、之を唯虚飾の為めにする事と思うは、誤解なり。[17]

上記の文章からは、容儀が人に対して務めるべき礼儀であり、身だしなみとして捉えられていたことを示している。では、どういった場面で、礼儀として容儀を整えることが必要となるのか。それは、「人の親愛を得る」ためである。ここで示される「人」とは、誰のことであろうか。『女子修身教科書』よりも少し後に刊行された礼儀作法書に、同じような記述がみられる。

> 士は己を知る者の為めに死し、女は己を悦ぶ者の為めに貌づくるとは、晋の豫譲の言葉にして、実に婦人の身まわりのみだりがはしげなるほど見苦しきはなく、随て世の人にも指弾きさて夫にも疎まるることもあるべし。されど、朝な夕な扮粧し居るは女の礼なりとて、古より宮仕へする婦人などは年老いても尚お薄化粧を為すといへり。されば、今の婦人も身分相当なる衣服を着け、其身に似合ひたる髪を結い、年齢相応に臙脂白粉を施して扮粧を為すを礼とこそいうべけれ。(註：句読点は筆者が付けた)[18]

つまり、「人」とは「世の人」と「夫」を指すのであり、容儀を整えることは身近な人たちからの親愛を受けるためのものだと言えるのである。

しかし、容儀は虚飾と誤解されることも多々あることも読み取れる。なぜ、容儀を身だしなみではなく、虚飾と捉えることがあったのであろうか。それを示すのが、次の文章で

の中に、次のように述べられている。

> 運動とて、必ずしも散歩・体操等を為すのみを云うに非ず、水汲・洗濯・洒掃・料理等の如き家事の手伝、或は、花草の栽培、菜園の手入等の如きことも、亦有益にして、趣味ある運動なりとす。

[17] 井上哲次郎 1903a、前掲書、p.49。

[18] 国分操子『日用寶鑑貴女の栞』、大倉書店、1897 年、p.577。

ある。

> 総べて、衣服なり、髪飾なり、人の妻は妻らしく、学生は学生らしくすべし。仮りにも、卑猥賤陋の流行を追い、浮華軽薄の時様を学ぶべからず。時様と流行とに齷齪すれば、容儀を乱して、人の侮蔑を招くものなり、堅く誡むべし。[19]

虚飾と捉えられる要因は、「卑猥賤陋の流行を追い、浮華軽薄の時様を学ぶ」ことによって起きるものといえる。「学生は学生らしく」と述べられているように、分相応な容儀の整え方をすべきであると誡められている。それは同時に、当時の女学生たちは分不相応な容儀、つまり虚飾であったといえるのである。その原因については、当時の高等女学校の様子から伺うことができる。

当時の高等女学校では、授業参観システムを使い、近隣の有力者たちが息子の嫁をさがし、外見で判断して嫁を選んでいったとされている。そのため、外見が良い女学生は途中でやめることとなり、卒業までいる女学生は外見が悪いというレッテルとともに「卒業面」と呼ばれていた[20]。さらに、明治 40（1907）年には時事新報社主催の美人コンテストが開催され、大々的に「美しい女学生」が評価された。そのため、外見は重要であること、そして外見は世間の評価対象となること、さらに外見の良し悪しで結婚できるかどうかが判断されてしまうという状況になったのである。

高等女学校に入学し、修身などの学科目で外見よりも内面を磨くことを目的とした教育を受けながら、その実際は外見を重視されて、卒業することなく退学してしまうのが「花道」とされる。しかし、どれだけ修身において内面を重視する内容が書かれていても、良妻賢母になるためには結婚しなければならない。結婚するためには、外見を整えることのほうが、内面を磨くことよりも重視される。とはいえ、修身では外見が虚飾になることを否定し、内面を高尚にすることを望んだ。それが、「品格を高尚にすること」である。これは、外見（身体面）というよりも内面（精神面）についての記述といえる。品格については、次のように述べられている。

> 人は、容儀を整え、動止を慎むと共に、品格を高尚にすべし。品格を高尚にせんと欲せば、先づ其の情操を純潔にすべし。蓋し情操純潔なられば、容儀も動止も自ら修りて、謂わゆる上品の人となるべし。[21]

前述した「容儀を整えること」の根底として、「品格を高尚にすること」つまり、「情操を純潔にすること」が必要事項であると説いているのである。この文章からは、内面を磨

---

19 井上哲次郎 1903a、前掲書、p.51。

20 井上章一『美人論』、朝日新聞社、1995 年。

21 井上哲次郎 1903a、前掲書、pp.53-54。

くことで外見を磨くことができるという、従来の修身の内容と変化がないように見える。しかし、この明治 36（1903）年の『女子修身教科書』において、外見と内面が等しく重要なものとして扱われるようになったのである。それはつまり、結婚するためには外見を重視しなければならないが、修身においてはそれを大々的に言うわけにはいかない。そのために、品格と容儀を整えることを同列に扱うことで、その矛盾を少しでも和らげようとしたと考えられる。

このように、「起居動作」の項目では内面（精神面）よりも外見（身体面）を重視した内容となっていた。それは、井上哲次郎や渡部周子[22]が論じているように、女学生たちが男性のための「美」の媒介として存在していたこと、そして、そのためには結婚できるような外見が必要であったことが『女子修身教科書』において示されていたのだといえるだろう。

・「修徳」について

「修徳」の項目の内容は最も変化が大きい。この項目の中で注目すべき点は、「柔和」と「優美」について述べていることである。

「修徳」の目的は、「言語柔和にして、人に対して、何事も逆らうことなきは、女子に貴ぶべき美徳なり。柔和を以て人に対すれば、人の怒を招くことなくして、よく感情を和ぐべし」[23]であり、柔和であることは女子にとって必要なことであることが示されている。しかし、それと同時に、次のようにも示されている。

> 柔和にして優美なるを貴べども、柔和は、惰弱に流れ易くして、優美は浮華に陥り易ければ、常に之を慎まざるべからず。[24]

上記の文章は、「起居動作」にも出てくる「卑猥賤陋の流行を追い、浮華軽薄の時様を学ぶ」という表現と似ている。「起居動作」の項目では、容儀を整えるという外見（身体面）に対して使われていた言葉であるが、「修徳」の項目では、柔和や優美といった内面（精神面）に使用されている。この類似した表現には、修身が外見（身体面）よりも内面（精神面）を重視していたことを読み取ることができる。たとえば、次のような文章である。

> 外には、如何に容貌を飾るとも、内に汚濁の心ある人は、美しき仮面を被れる夜叉に比すべく、又如何に、言を巧にし色を令くすとも、其の志正しからざれば、錦衣を着たる悪魔に擬すべし。是皆人を欺き己の悪を蔽ふ手段にして、不良の甚しきものなり。[25]

---

22 渡部周子『「少女」像の誕生—近代日本における「少女」規範の形成』、新泉社、2007 年。
23 井上哲次郎『女子修身教科書』（改訂再版）第二巻、金港堂、1903 年、pp.34-35。
24 同上書、p.48。
25 同上書、p.32。

さらに、次のような表現もされている。

> 容貌の美醜は、人の生来にて、如何とも為し難きものなれども、心は如何ようにも改め得らるるものなり。されば人は、其の心の持ちやうに由りて、悪人も善人となること、必ずしも難きに非ず。[26]

このように、修身では内面（精神面）が重視されていた。しかし、修身の教科書の中には、近世の女子用往来と同じく、「容貌の美醜」について書かれていた。明治 36（1903）年の『女子修身教科書』において、第 1 版では「容色姿勢」と述べられているのに対し、第 2 版では「容貌」と表現が変化した。この「容貌」とは容姿全体ではなく、顔かたちを述べているといえる。その理由として挙げられるのが、女子教育に貢献した三輪田眞佐子（1843-1927）が、明治 33（1900）年の『女鑑』に掲載した「女品論」で述べられた記述である。3 回に分けられて書かれた「女品論」の中で、三輪田は男性が女性を評するさいに先ず外貌の美醜で判断することを例に挙げ、そのため、「化装をつとむるは、多数婦人の習」であることを述べている[27]。そして人を選ぶ標準とすべきもののひとつに、「身体の健全なるもの、その次に於て、比較上容貌は、醜よりも、美をとるは可」であることを論じている[28]。このように、同時代の教育者の記述では、「外貌」や「容貌」は身体ではなく顔について述べられている。そのため、明治 36（1903）年の修身における「容貌」という表現は、容姿全体ではなく顔に限定されたものであったと推測できる。

明治 43（1910）年の『再訂女子修身教科書』（訂正六版）には、次のようなことが書かれている。

> 女子は男子よりも外貌を飾る必要多きため、自ら虚栄心を増長せしむるに至ること、其の一なり。男子は虚栄心あるも、之を制する力強し、然るに女子は此の事に関して自制力弱し、其の二なり。女子は男子に比して感情を富めるが故に、感情の向う所、動もすれば中正を失うに至る、其の三なり。特に修養足らざる女子は、虚飾によりて己の品格を高め得べしと信ず、其の四なり。
> 虚栄心に富める女子は、沐猴にして冠すと云う譬の如く、其の虚飾にとりて、己の愚をあらわすと共に、其の品位を賤しくし、心ある人をして、嫌悪の情を起さしむるものなれば、平生最も誡むべき事なり。今や人情風俗浮薄となり、慈善を為し、交際をなし、其の他何事をなすにも、虚栄虚飾の為にする人少からず、片腹いたき事というべし。　（中略）

---

[26] 同上書、p.57。
[27] 三輪田眞佐子「女品論(天)」『女鑑』、国光社、1900 年、p.3。
[28] 同上書、p.3。

嫉妬心の誡むべきは、独り既婚の女子に限らず、学生にありても亦慎むべき事なり。例えば上席の人を見て、己れも亦勉強して其の位置を得んことを力めず、唯何となく之を妬み、如何にかして其の人の失敗せんことを祈るが如し、実に浅ましき事というべし。又容貌の美しき人に対して不愉快なる感情を懐き、其の人の欠点をもとめて之を中傷せんとするが如き、皆これ嫉妬心より来るものしにて、隅々以て己れの心の卑しきを示すに過ぎず。女子が自己の品格を高め、其の幸福を図る上に於て、是等は大に注意すべき事なり。[29]

ここにある、女子は「外貌を飾る必要がある」とはように、明治 33（1900）年の『女鑑』において、「外貌を飾る」ということは「化粧をする」ということであったのと同じと考えることができる。

ただし、品格のない容儀は虚飾であると述べられており、この点に関しては明治 36（1903）年の『女子修身教科書』の内容と変化がない。

しかし、明治 43（1910）年の修身教科書には、虚栄心と嫉妬心について書かれている。この項目は、「修徳」内のものではないが、内容は「修徳」で書かれていることと類似している。虚栄心と嫉妬心の項目において述べられていることは、虚飾による虚栄心と、容貌の美しき人への嫉妬心といった、外見への執着が生み出す悪しき心持ちについての内容である。つまり、女学生は外見にまつわる虚栄心や嫉妬心を抱きがちであると認識されていたということである。

初期の修身では、外見よりも内面重視の内容で書かれていた。しかし、実際は、外見を疎かにしていては結婚できず、良妻賢母になることができない。結婚するためには、身体を磨くことが必要となった。化粧はそのひとつの方法であった。だが、修身において「虚飾」である化粧を簡単に認めることはできない。そのために、まず内面と外見を同等に重要であることを述べ、次に内容や表現を変えて、外見重視へとだんだんと移行したのである。そして、一見内面重視であるようにみせかけながら、外見重視であることとの矛盾をなくそうとしたのである。

以上、井上哲次郎編『女子修身教科書』の内容分析をとおして、当時の修身のあり方を考察した。前述したように、修身が求めた女学生の理想像は、「健康で、容儀を整えた上品で優美な女性であること」である。そのためには、内面（精神面）を磨くことが重要であり、外見（身体面）は付随してくるものであると、当初は考えられていた。

しかし、どんなに修身で内面重視であることを説いても、実際の縁談話においては容姿は重要な判断要素の一つであることは間違いない。そして、結婚ができないということは、「良妻賢母」になるという目標の喪失をもたらすだけでない。結婚ができない理由が詮索され、まずは外見が悪いからだということになり、さらに外見が悪いのは内面を磨いていないからであるというロジックから、内面まで問題視されてしまうという負の連鎖ができ

[29] 井上哲次郎『再訂女子修身教科書』（訂正六版）第四巻、金港堂、1910 年、pp.87-91。

あがってしまったのである。

そういった矛盾や負の連鎖を少しでも軽減するために必要とされたのが、化粧だと思われる。明治 43（1910）年の修身教科書で「外貌を飾る」必要性があったことが示唆されている点からも、良妻賢母という目標のためには、多少の化粧をすることは認めるべき思われたのではないだろうか。教育者が「指導」という形で化粧方法を述べることにより、女学生の化粧が（あくまでも）女子教育から外れた行為でないことを示したのである。陥ることを回避するために、化粧を禁止するよりは基礎化粧に重点をおいた化粧のガイドラインを設け、化粧の方法を画一化することによって、容姿の優劣を緩和することによって嫉妬心も抑制することができる。このようにして化粧教育は修身における矛盾や負の連鎖を目立たないものにする役割を担うようになったといえるだろう。

第 2 節　女子教育論における美育について

井上哲次郎はドイツ留学経験を持ち、日本に西洋哲学を紹介したことで知られているが、陽明学や朱子学など漢学や神道にも造詣が深く、むしろ東洋哲学が彼の思想の基盤を形成していたと考えられる。彼が編纂した女子修身教科書も第一巻巻頭の「生徒心得」に次いで「衛生」という近代的概念が取り上げられている点を除けば、とくに西洋の強い影響を感じさせる内容はない。だが、西洋からもたらされた重要な教育概念として美的教育すなわち美育があり、女子教育論に関する先行研究でも注目されている。

高等女学校では教育概念として、まず知育・徳育・体育の「三位一体」が唱えられたが[30]、そこに美育が加えられていったのである。渡部周子は普通教育における美育の必要性が説かれることになったのは明治 40 年代ごろのことであったのに対し、「女子教育では明治二〇年代から三〇年代初頭にはすでにその重要性が認識され提唱されていた。さらに、普通教育での美育が情操教育を意図するものであったのに対し、女子教育での美育は容貌を美しく育むことを意図するものとしてその機能を変えた」と指摘し[31]、また、鈴木則子によると、女子教育の目的は「知・徳・体」であったが、「美育」という教育領域が加えられ、さらに「美育」の真の意味はすり替えられて、美容の大義名分として機能したという[32]。この美育とはいかなる教育であり、どのように日本に導入されたのであろうか。

美育とは、「感性と理性の両面をふくむ人間性そのものの育成を意味」する。初めて日本で受容された美育論は、19 世紀アメリカの教育学者ジェイムズ・ジョホノットの美育論であった。彼は美育について、「美育ハ啻ニ美ヲ鑑識スル能力ヲ養成スルノミナラズ、又美ヲ

---

[30] 成瀬仁蔵『女子教育』、青木高山堂、1896 年、p.180。なお、成瀬は日本女子大学校の創始者である。

[31] 渡部 2007、前掲書、p.97。

[32] 鈴木則子「『女学雑誌』にみる明治期『理想佳人』像をめぐって」栗山茂久他『近代日本の身体感覚』青弓社、2004 年、p.154。

創造スル能力ヲ養成スルモノナリ」[33]と述べている。

次いでフランスのコムペーレの美育論が翻訳された。

> 而シテ美育ハ其ノ最廣キ意味ニテ云ハヾ、凡ベテ天工及ビ人工上ノ諸美ノ測量、文學ノ嗜好、音樂ノ快樂、模造術ノ知識及ビ他人ノ工作ニ備ハル所ノ美ヲ感ズルコトヲ得ルノミナラズ、自巳ノ工作ニ依リテ美ヲ實現スルコトモ爲スコトヲ得ル所ノ種々ノ才能ヲ包含スルモノナリ。[34]

コムペーレの美育論も、ジョホノットと同じように、美育において美を鑑賞する能力と美を実現する能力（美術作品を作る能力）の養成が必要であることを述べている。しかしながら、明治 10 年代から明治 20 年代にもたらされたジョホノットやコムペーレの美育論は定着せず、日本で美育が広まるのは明治 30 年代に入ってからであった[35]。

「本来的にはシラー的な意味における人間教育を意味」[36]していると言われる美育概念は、明治 30 年代に論じられるようになった。前田博によると、その先駆者のひとりである教育学者、小西重直はこのシラーの美的教育論に大きく影響を受けているという[37]。

18 世紀ドイツの思想家、フリードリッヒ・フォン・シラーの美的教育論とは、「美はけっきょく感性と理性の合致における人間性の表現とされるゆえ、美や芸術にもとづく情操教育は、実はただちに人間性の育成を意味するものでなければならず、逆にいえば、人間教育は根源的に美や芸術による美的教育でなければならない」[38]という論である。

小西は、このシラーの美的教育論を、明治 39（1906）年の「趣味教育に就いて」と題した講演や、明治 41（1908）年の『学校教育』（博文館）などの著書に引用している。渡部

---

33 ジョホノット、ゼームス『教育新論　巻之三』（高嶺秀夫訳）、東京茗渓会、1886 年、p.448。

34 コムペーレ、ガブリエル著、ペーン、ダブルユー・エッチ訳注『教授論(根氏)　第二冊』（能勢栄重訳）、金港堂、1892 年、p.241。

35 美育が定着しなかった理由として、前田は以下のように論じている。前田博『ゲーテとシラーの教育思想』、未来社、1966 年、p.80。

> 美育が教育の中で正しく位置づけられ、美育が論せられ美育論が傾聴せられるようになるには、いくつかの条件がそなわらなくてはならなかった。たとえば、美が独自の価値として認められ、教育価値の中にも位置を占めるようになるということである。学問や道徳についての研究とともに美や芸術についての研究がさかんになってくること、芸術がさかんになり、また人びとの生活において美の享受が位置を占めることができる程度に社会の秩序がととのい生活が豊かになってくることが必要である。また思想界全般の傾向も大きな要因であることはいうまでもない。このようにみてくると明治十年代二十年代に普通教育の一部として美育を重んずる思想が起ってこなかったのは無理もないことである。

36 下中直也『哲学事典』、平凡社、1971 年、p.1151。

37 前田 1966、前掲書。

38 下中 1971、前掲書、p.1151。

周子は、小西の美育論を分析し、「普通教育の一分野として美育を位置づける試みは、明治三〇年代に行なわれたのだとしても、幼児教育では明治一〇年代に、女子教育では明治二〇年代から三〇年代初頭にはすでにその重要性が認識され提唱されていた、さらに、普通教育での美育が情操教育を意図するものであったのに対し、女子教育での美育は容貌を美しく育むことを意図するものとしてその機能を変えたのであった。」[39]と述べ、女子教育における美育の特異性について考察している。さらに、「一九〇五年に小西重直がシラーに依拠した美育を提唱するまで、普通教育の一分野として美育を位置づける試みは充分に行われていなかった」[40]とも述べている。

しかしながら、美育についての先行研究を見てみると、シラーのみに依拠したとはいえない。前田は、小西と同時代の教育学者である、大瀬常蔵と森岡甚太郎を取り上げ、彼らがドイツの哲学者、レーマンの美育論に影響を受けていたことを論じている[41]。さらに、近年の研究では、赤木里香子がドイツの教育学者、ジョハン・フリードリッヒ・ヘルバルトの理念を取り上げ、道徳的判断を導く美的判断力、さらには、その基礎となる美的感覚や感情を育てるという目的観があったことを論じている[42]。また、石井慎一郎はニーチェの教育思想に着目し、明治期から大正期の美育論や芸術教育論に与えた影響について論じている[43]。これらの先行研究が示しているように、近代日本における美育論は、西欧、とくにドイツの美育論が重視され、教育に取り入れられている[44]。

また、シラーやレーマンなど、ドイツの美学者の考えを通して、日本における美育のあり方を模索した小西や、吉田熊次が登場する時期でもある。吉田は、小西と同じくシラーの美的教育論に拠った美育論を展開している[45]。その中で、当時の日本の美育について以下

---

39 渡部 2007、前掲書、p.97。
40 同上書、p.94。
41 前田 1966、前掲書、pp.88-89。
42 赤木里香子「明治後期における児童の発見と美的教育論の形成―「趣味」と「芸術」のあいだに―」、『アート　エデュケーション』No.26、建帛社、1996 年。
43 石井慎一郎「日本の教育思想とニーチェ―美育あるいは芸術教育について―」『外国語教育論集第 26 号』、筑波大学外国語センター、2004 年、pp.11-20。
44 ただし、ドイツの美育論が取り入れられるまで、イギリスやアメリカなど様々な国の美育論が訳され、教育に取り入れられていた。
45 吉田熊次『系統的教育学』、弘道館、1908 年、p.613。吉田はシラーの美的教育論を以下のように述べている。

> シルレルの考から言へば、美と云ふものは一切を包含して、而もそれ等一切を理想化したるものでありまするからして、眞も善もこれに總て含まれて行く譯であります。若し斯の如く美と云ふものを解するならば、美育と云ふことが教育の終局、教育の理想であつて宜いと云ふことは言ふまでもない。若し美育と云ふものをシルレルの如くに解釋しまするならば、今日と雖も美育は教育の理想であると斷言して少しも差支へないと思ふのであります。

のように述べている。

> 美と云うふのは、主觀に氣に入ることである。自分の氣に入つたものであるならば、如何なる内容を有つて居るものでも、美は則ち美である。…それを見て面白いと感じ、美しいと感ずれば、それが美であると云ふ風に見る……これが即ち輓近の思潮であります。[46]

明治20年代までの美育は美を鑑賞する能力と創造する能力を養うことを目的としたものであったが、吉田の美育論では美を鑑賞するときに、自分が美しい、面白いと思えば美であるという主観性を重視したものとなっている。

また、「此美育の如きは、學校教育其物のみにては決して十分に出來上げることの出來ぬ性質のものであつて、矢張り社會と相須つてするでなければ、完全に其効を奏することが出來ぬのであります。」[47]とも述べており、学校教育における美育の限界と、社会における美育との連携を指摘している。

小西重直は明治 35（1902）年から明治 38（1905）年までドイツに留学し、当時ドイツに起こっていた芸術教育運動[48]の経験と「恩師」フォルケルトとの影響によって、日本における美育定着に奔走することとなる[49]。ドイツから帰朝したのちの小西が、「趣味教育に就いて」と題した講演の中で、美育を論じたのは 1906（明治 39）年のことである。そして、明治 41（1908）年に刊行した『学校教育』において、美育の重要性を説いている。

『学校教育』において、小西は審美的情操として美育を以下のように論じている。

> 審美的情操
> 此情操は美に對して、快、安心、平和を感じ此を賞し醜に對して不快不安緊張を感じ此を退くつの精神状態である。蓋し美は多様の統一である。諸要素の調和の状態である教育一般より見れば美か教育上價値あるのは美感の高尚なる國民の美術工藝品は立派であつて國の經濟力の増進を促し又國民の野卑なる欲望を高尚にする、品性を麗はしくする點であるが訓育上に於ては最初の經濟力増進に關しては寧ろ間接の關係であつて後の方の德性に關する事が直接である。[50]

---

46 同上書、pp.615-616。
47 同上書、p.627。
48 前田は、「芸術教育運動の起源は一八六〇年代にさかのぼる。当時の教育においては学者的な理想が掲げられ劃一的な主知的な教育が強制せられた結果、独創的な芸術力が失われてきたのに対して、新しい理想を待望する造形芸術家たちの抗争からこの運動は起こった」と述べている。前田 1966、前掲書、p.60。
49 前田 1966、前掲書、pp.84-85。
50 小西重直『学校教育』、1908 年、博文館、p.398。

ここから、小西が美育を単に美術工芸品を作るために必要な教育ではなく、品性を養うために必要であると考えていたことがわかる。それは、明治 20 年代までのジョホノットやコムペーレの美育論とは違っている。翻訳されたものは、美を鑑賞する能力を養うことよりも、美術工芸品をつくる能力を重視するような記述が多く、これは現在の美術教育に繋がっている。

こうした状況において、明治 40 年代に、ヴィクトリア朝イギリスを代表する思想家であり、美術評論家でもあったジョン・ラスキンの美育論が紹介された。『女子の本分』というこの文献を翻訳したのは、女子教育者の下田次郎である。

> 女子の教育において、第一に行ふべき事は、體育なり。體育の目的は、單り身體を健全ならしむるのみならず、その美を完成するにあり。女子の美を最高度に發達せしむるには、立派なる體力を養ふと共に、其動作を優美ならしむること肝要なり[51]

ラスキンは、美を得るためには体力及び動作が優美であることが必要であるとし、女子教育における体育の重要性を示唆した。ここに、それまでの美育論とは違った視点を見ることができる。明治 20 年代の美育概念は、美を鑑賞する能力、美術作品を作り出す能力を養うことを目的としていた。それに対し、明治 40 年代の美育論は、体育を通じて、女学生の身体の育成に美という概念を導入していったのである。

以上のように西洋からの美育概念の導入の流れを追うことによって、渡部や鈴木が指摘したように、美育は、一般の中学校を含めた普通教育に先駆けて女子教育のなかで普及し、かつ、美的観賞能力や美的表現力の育成という目的から、女学生自らの身体の美の育成へと大きく方向を転換させていった日本の近代女子教育における美育導入の特徴が明らかになった。

第 3 節　女子教育論における化粧

高等女学校令によって女子教育が盛んになった明治 30 年代から 40 年代には女性の女子教育者たちのめざましい活躍があった。彼女たちは女学生の化粧をどのように考えていたのであろうか。本節では、明治期の著名な女子教育者である三輪田眞佐子と下田歌子の女子教育論にそれを確認し、また、当時の少女雑誌に掲載された女子教育者の化粧論も併せて考察する。

3-1　三輪田眞佐子と下田歌子の女子教育論にみる化粧に対する考え方

[51] ラスキン、ジョン『女子の本分』（下田次郎訳）、金港堂、1908 年、p.61。

三輪田眞佐子は天保 14（1843）年に京都で生まれた。幼い頃より漢学詩文を学び、明治 20（1887）年には私塾翠松学舎を開き、漢学を教えるようになった。その後、明治 35（1902）年に三輪田女学校を創設し校長となる。女子の徳性を第一義とし、必要な知識でこれを補う徳才兼備の女性を理想とした。また、儒教的秩序観から、女性の役割は内助にあるとして良妻賢母教育を行なった。『女子の本分』や『女子教育要言』、『教へ草』など多くの著書がある[52]。

三輪田は明治 30（1897）年の著書『女子教育要言』のなかで、女子教育における徳育、知育、体育の「三位一体」に美育を加えることを提唱した人物でもある。体育は体操によって女子の姿勢を端麗にすることで美育の一端となる[53]という彼女の考えは、前節で紹介した美育を身体美の育成に拡大したラスキンの美育論、それが翻訳によって紹介された明治 40 年代に先だっていた。

また、明治 33（1900）年に教育啓蒙誌系の雑誌『女鑑』において「女品論」という文章を 3 回にわたって書いている。その中で、男性が女性を評するさいにまず外貌の美醜で判断することを例に上げ、そのため、「化装をつとむるは、多數婦人の習」[54]であることを述べている。さらに人を選ぶ標準とすべきものは、「先づ心術の卓抜なるもの、身體の健全なるもの、その次に於て、比較上容貌は、醜よりも、美をとるは可なり。」[55]としている。教育者として三輪田も、心術、つまり精神美を重視しており、「精神美なれば、これが表出して人品高雅なるべし」[56]と説き「外貌は、先天的の美醜なれば如何ともすること能はざるも、人品は、後天的の美醜なれば、美となるも、醜となるも、自ら撰ぶを得るなり」[57]と、品性を高めることによって自らを美しくすることができると啓蒙する。

化粧については、上に述べたように「女品論」では婦人の習いとし、また『女子教育要言』のなかでも「白粉を施すは、一般の風習」と認めている。しかし続けて「なれど、こは、皮膚を害し、衣襟を穢す恐あれば、少量に用ふべし。こを大量に用ふるは、反りて、浅まじと見劣りせらるゝものなめり。」[58]と戒めているように、白粉を厚く塗りすぎるのは皮膚の健康を害し、衣服も汚す可能性があるため、白粉の量を少なくするよう注意している。見方を変えるならば、健康を害する可能性があるにも関わらず、容貌を向上させるための風習として、衛生目的のスキンケアでもないベースメイクとしてのお化粧を認めていることは極めて重要である。

一方の下田歌子は、三輪田眞佐子から遅れて安政元（1854）年に美濃国恵那郡岩村に生まれ、同じく幼い頃より漢学と和歌を学んだ。その後、宮中に出仕し、明治 18（1885）年

---

52 三輪田の略歴については、『国史大辞典』を参照・抜粋した。
53 三輪田眞佐子『女子教育要言』、国光社、1897 年、P.127。
54 三輪田眞佐子「女品論(天)」『女鑑』、国光社、1900 年、p.3。
55 同上書、p.3。
56 三輪田眞佐子「女品論(地)」『女鑑』、国光社、1900 年、p.5。
57 同上書、p.5。
58 三輪田 1897、前掲書、pp.107-108。

に華族女学校の教授として上流女子教育の任にあたった。明治 26（1893）年から明治 28（1895）年まで欧州 7 カ国（イギリス、フランスドイツ、イタリア、オーストリア、ベルギー、スウェーデン）とアメリカに留学し、帰国後、明治 31（1898）年に実践女学校および女子工芸学校を開設し、良妻賢母を基調とした実学実践の教育を行なった。また、40 点近い教科書・著書・雑誌を刊行した[59]。

その著作のひとつが明治 43（1910）年に刊行した『婦人常識の養成』である。その中で、身だしなみと虚飾について、以下のように書かれている。

> 身嗜みは、自分を美しく見せると云ふ考へよりも、高尚に端正に見られて、他人に失礼に當らぬ様にすると云ふ考へがあらまほしいので御座います。艶麗、濃美といふよりも、高潔、清楚と云ふ方が、即ち身嗜みの極意であらうと存じます。
> 所が、虚飾となりますと、身分をも忘れ、年齢をも忘れて、無暗に派手な、若い風をして見たり、非常に美しい衣物や帯を着けて見たり、金銀珠玉の飾り物に高價な金を拂つても、猶飽き足らぬとなるもので御座います。[60]

このように、下田は身だしなみと虚飾の違いについて、身だしなみは他人に失礼が無いようにするために行なうものであり、虚飾は自分を美しく見せるために派手な装いをするものと述べている。このことは、大正 4（1915）年 10 月の『少女の友』において、「女の身だしなみの大切な事は昔から『婦容』と言われており、虚飾やお洒落とは違い、清潔に端麗にすること」[61]であると説明されており、下田が三輪田と同じく、近世の女子用往来を踏襲した考え方を持っていたことが分かる。

しかしながら、漢学の私塾の開設を経て、三輪田女学校（現三輪田学園）を創設した三輪田や、宮中に出仕して皇后の信任も厚く、欧米教育視察を経て、実践女学校（現実践女学園）を創設した下田という近代女子教育の開拓者である女性教育者であり、しかも女学校の校長たちが、揃って化粧という前近代からの女性の身だしなみとしての風習を近代においても踏襲することを選んだことは、女学生に節度のある化粧を認めるというお墨付きを与えたことになったといえるだろう。

---

[59] 下田の略歴については、『国史大辞典』および実践女子大学・実践女子大学短期大学部ウェブサイトの「下田歌子小伝」を参照・抜粋した。
「下田歌子小伝」（発行年不明）、"実践女子大学・実践女子大学短期大学部"ウェブサイト <http://www.jissen.ac.jp/idea_and_tradition/shimoda_utako/biography/index.html>2016 年 3 月 24 日閲覧。

[60] 下田歌子『婦人常識の養成』、実業之日本社、1910 年、p.272-p.273。

[61] 下田歌子「女の身だしなみ」『少女の友』、実業之日本社、1915 年 10 月、p.54。

3-2　少女雑誌の化粧記事

三輪田や下田の教育論としての著作だけでなく、下田が「女の身だしなみ」という文章を『少女の友』に寄稿したように、女子教育者たちはメディアを通して、直接、女学生たちにも語りかけていた。その代表的なメディアが近代な少女雑誌のひとつである『少女の友』である。そこには教育者たちによって書かれた化粧に関する文章がいくつも掲載されていた。

初めて化粧に関する助言的な文章が登場したのは大正元（1912）年である[62]。東京高等女学校（現・東京女子学園）校長の棚橋絢子[63]による「少女と身だしなみ」と題された記事には次のように書かれていた。

> お化粧をなさるには、十四五歳までは水おしろいをお使ひなさい。普通のおしろいは餘り目立っていけません。石鹸を使ってすぐおしろいをおつけになるとまだらはげになります。石鹸の後に糠でもってお顔をお撫でなさい。さうしてからおしろいをつけると誠につきがよろしうございます[64]

この棚橋の記述から、14、15 歳の「少女」が化粧をしていることが読み取れる。この記事で勧めている化粧の仕方を見てみると、①石鹸で洗顔(顔の汚れを落とす)、②糠で顔を撫でる(保湿のためと思われる)、③水おしろいをつける、という 3 段階を踏んでいる。

棚橋が普通のおしろいではなく、水おしろいを推奨している理由は、水おしろいがその名のとおり、おしろいを水で溶いたものであるためである。水で溶いてあるため、つける量を加減でき、薄化粧をすることができる水おしろいは、棚橋の記事の前年、明治 43（1910）年ごろから販売されている[65]。このように、水おしろいを使って薄くベースメイクを行なうことは、濃くついてしまう普通の白粉よりも良いとされていたことが分かる。

このような記事のあとに、化粧の害や失敗について論じているのが、大正 2（1913）年 7 月の『少女の友』に、東京女子高等師範学校訓導の堀七蔵が書いた記事である。

> …お化粧では、黒い顔は白く、ソバカスは見えないやうにといふ考へで施すものであるから、先づ手輕なお化になる方法であります。しかし茲にお話しますのはこれとは違つて、至つておそろしい熊に、可愛いお嬢さんが化けたといふ話であります。

---

62 『少女の友』の重要性については、第 5 章で詳説する。

63 棚橋は、華族女学校で教鞭をふるうなど、華族の子弟の教育をなした。また、明治 36（1903）年、東京高等女学校を設立した人物である。唐澤富太郎『女子学生の歴史』、木耳社、1979 年、pp.294-295。

64 棚橋絢子「少女と身だしなみ」『少女の友』、実業之日本社、1912 年 9 月、pp.19 - 20。

65 明治 43（1910）年にはレート水白粉が、翌明治 44（1911）年にはクラブ水白粉が発売されている。

…熊になるお化粧を殊更した譯ではないが白粉をつけた後にお湯に入つたからかゝるお化となつたのであります。それは使つた白粉に鉛が入つてゐたからであります。
…わが少女諸君にして、もしお化粧する人があるならば宜しく無鉛白粉を使ふやうにせらるゝことを希望いたします。[66]

この記事では、鉛を含んだ化粧品を使ったあとに、お風呂に入ったことで鉛が反応してしまい顔が真っ黒になってしまい笑われてしまったことを例に挙げつつ、鉛白粉の害は体に危険なものであり、無鉛の白粉を使わなければならないと述べている[67]。また、無鉛の白粉と鉛白粉の判別方法も書かれ、「少女諸君」に無鉛白粉を選ぶように述べている。この記述の中でも、「もしお化粧する人があるならば」という仮定を立てつつも、「少女」が化粧をすることを前提として述べた文章であるといえる。

さらに、大正 4（1915）年 10 月には、下田歌子の「女の身だしなみ」と題された文章が掲載された。

白粉をつけるならば無鉛の物を選び、皮膚はよく／＼洗つてつけるのです。小鼻や眉毛や生え際に固まつたり、彼方此方に斑があつたりするのは見苦しいものです。そして成るべく女學生は薄りお塗りなさい。[68]

ここでも、棚橋や堀と同様に、洗顔をすること、無鉛白粉を選ぶこと、そして薄化粧にすることを述べている。この記述においても、洗顔というスキンケアを重視している。

さらに下田は大正 5（1916）年 4 月の「精神の美と容貌の美」で、化粧に「段々妙齢にならうとする少女や、既に妙齢になつた少女」が、「容貌の美醜を氣にして」しまうのは仕方ないことと容認しつつも、そのために紅白粉を塗ることは一時的なことでしかなく、それよりも「身體を健康にすることで、皮膚も良くなり、真から美しい色澤（いろつや）がでてくる」ことを重視すべきと述べている[69]。

このように、少女雑誌において女子教育者たちは、「少女」に向けて、真の美しさは体を健康にし、皮膚を美しくすることが一番であると強調しながらも、白粉を塗り重ねることを控え、白粉をつけるならば水白粉のような薄く塗ることができる白粉を奨励していたのである。

---

66 堀七蔵「熊になるお化粧」『少女の友』、実業之日本社、1913 年 7 月、pp.52-53。
67 鉛白粉の中毒について言われるようになった基因のひとつが、明治 20（1887）年の展覧歌舞伎で起こった中村福助による中毒騒ぎである。これにより、無鉛白粉の発売数が大きく増えることとなった。（水尾順一『化粧のブランド史　文明開化からグローバルマーケティングへ』、中央公論社、1998 年、pp.45-48。）
68 下田歌子「女の身だしなみ」『少女の友』、実業之日本社、1916 年 10 月、pp.54-55。
69 同上論文、p.56。

本章で論じてきたことを小括すると、まず高等女学校令に則った女子中等教育機関である高等女学校のカリキュラムにおいて、近代国家のための理想的な女性像である良妻賢母を育成するという目的は、主に「修身」という道徳教育で行われた。修身の代表的な教科書の内容を検証すると、近世の女子用往来における女性としての徳性が引き継がれつつ、そこに近代的な概念として健康を維持するための「衛生」、そして美育という美意識の習得を目的とする新しい教育論が導入されていた。女子教育のカリキュラムには常に礼儀として、身だしなみとして、容貌を整える必要性が含まれていた。容貌には美しさが求められ、そのための美容や化粧も、常に過度な装飾や容貌への固執を自制することがセットにされて、容認されていた。それは、修身の教科書だけでなく、近代女子教育の先駆者であった女性教育者たちの教育論や、彼女たちが直接、女学生やその年代の「少女」たちに語りかけた少女雑誌の文章においても同様であった。

現代の中等教育にはない、良妻賢母思想や良妻賢母になるために求められた容貌を備えた女性像の理想像が模範として、教科書においても少女雑誌においても掲げられていた。白粉に代表されるような前近代からの化粧の伝統文化よりも、むしろ新しい時代の教育環境の中で、当時の「少女」たちは容貌をそして化粧を、現代よりも強く意識していたと考えられる。つまり、前章で考察したように、化粧をすることは結婚し、「良妻賢母」になるために必要と見なされていたことに加え、美育という教育によって「少女」たちは美を、そして美しくなるための技術としての化粧を意識する環境にあったといえるだろう。

このことを補強するように、ちょうどこの頃、近代的な化粧品会社の設立が続き、様々な化粧品が販売されるようになっている。「美しくあり、健康でもあること」を目的として化粧方法や化粧品にも近代化が図られ、さらに、「化粧=美しさを得ることができるもの」として化粧品購買欲を高めようとした化粧品広告が隆盛していく時期でもあった。女学校という教育制度の外側でも、変化していく「少女」たちと化粧の関係について次章以降で考察していく。

第 4 章　化粧品会社による商品開発と宣伝方法

明治期に起業した「化粧品会社」は近代的な工業製品としていかなる化粧品を開発し、発売したのか。そして新しい化粧品による新しい化粧を普及させるためにいかなるマーケティング活動がおこなわれていたのだろうか。そして化粧品の購買者層として女学生や「少女」たちはどのように想定されていたのであろうか。

明治期創業の化粧品会社のうち現存するものはごくわずかであり、また当時の化粧品産業についてのまとまった研究は見受けられない。よって本章では化粧品会社の社史や当時の化粧品産業の状況に言及している資料をもとに具体的に発売された化粧品の種目や宣伝活動を追い、さらに女学生や「少女」と化粧の関係を化粧品会社の活動の側から考察していく。

近世から近代へと時代が変わる中、化粧品業界にも訪れた変化について日本化粧品工業連合会が平成 7（1995）年に編纂した『化粧品工業 120 年の歩み』には次のように記されている。

> 化粧品は明治初年には独立した品目とはなっておらず、小間物の中の紅、白粉、香油として扱われていた。伝統的な紅、白粉は開国とともに西欧文化の流入にさらされることとなる。政府の方針は開国以来の課題である「殖産興業」であり、学術の面では西欧諸国のすすんだ化学技術をすみやかに取り入れることであった。外には不平等条約をかかえ、内には政情不安、財政困難をかかえる政府がとった「化学技術の導入」は不十分な情報の中で少しずつ実っていった。化粧品関連業界が出会っていたのは輸入化粧品や化粧石鹸であった。それはまばゆいばかりの魅力的な製品であって、中でも香水と化粧石鹸の魅力は大きかった。化粧石鹸は洗たく石鹸とともに明治初年にいちはやく国産化が進められている。[1]

この「化学技術の導入」によって、化粧品には当時の先進技術が取り入れられていたのである。そこで取り上げられているのが、平尾賛平商店が明治 11（1878）年に発売した白粉下化粧水「小町水」、明治 19（1886）年に桃谷順天館から発売された「にきびとり美顔水」、明治 21（1888）年に資生堂から発売された「資生堂衛生歯磨石鹸」である[2]。

化粧品産業の黎明期に創業した多くの会社の中でも抜きんでていた資生堂、平尾賛平商店そして平尾賛平商店とともに近代の二大化粧品会社とされた中山太陽堂は、商品開発だけでなく、むしろ宣伝方法や販売経路に重点をおき、さまざまな工夫をこらしていた。本章では、この代表的な 3 社の設立経緯と主要な製品及びマーケティング活動を辿り、各化

---

[1] 日本化粧品工業連合会編『化粧品工業 120 年の歩み』、1995 年、p.2。
[2] 同上書、pp.2-3。

粧品会社が、まずは一般消費者である女性たちに向けて、そして少女に向けて、どのような化粧品のイメージを形成しながら化粧品を彼女たちの生活に浸透させていったのかを明らかにする。

第 1 節　化粧品会社の概要と販売した化粧品

1-1　資生堂

資生堂は、明治 5（1872）年に福原有信と矢野義徹、前田清則が興した三精社の事業として創業した日本初の洋風民間薬局である。明治 8（1875）年には、三精社が解散し、資生堂薬局は福原有信個人の経営となった。資生堂という社名は、『易経』の一節「至哉坤元万物資生」（いたれるかなこんげん　ばんぶつとりてしょうず）に由来しており、「大地の徳はなんと素晴らしいものであろうか。すべてのものは、ここから生まれる」という意味である[3]。

資生堂が明治 21（1888）年に発売した「福原衛生歯磨石鹸」は衛生用の商品とされており、化粧品関連産業の製品とされず、資生堂が化粧品業界に進出したのは明治 30（1897）年と考えられている[4]。「高等化粧水　オイデルミン」の発売は「資生堂の赤い水」として有名となった。「オイデルミン」とは、ギリシャ語の「オイ（良い）」と「デルマ（皮膚）」に由来している。この「オイデルミン」はロングセラーとなり、パッケージをリニューアルしながら現在でも売られている化粧品である。明治 39（1906）年には、無鉛煉り白粉の「かへで白粉（黄色白粉）」と「はな白粉（肉色白粉）」を発売している。

次に発売されたのは「七色粉白粉」である。大正 6（1917）年に発売された「七色粉白粉」について、次のように説明されている。

> 白粉といえば白があたりまえだった時代に、七色の白粉を考えたことは、大変斬新な発想といえます。
> 七色は、「白」「黄」「肉黄」「ばら」「ぼたん」「緑」「紫」で、個々の肌色に合わせて白粉の色を使い分けるという、先駆的な考えに基づく商品でした。「電球の下でよく映える」として芸者たちの間で人気をよび評判となり、それはやがて 1932 年に発売される「モダンカラー粉白粉」九色へと続いていきました。
> 容器は、正方形の四すみを直線で切った八角形で、当時ヨーロッパで勃興しつつあったアール・デコスタイルがいち早く取り入れられています。[5]

---

[3] 「社名の由来」（発行年不明）、"資生堂"、
<https://www.shiseidogroup.jp/company/past/company-name/>2016 年 3 月 24 日閲覧。
[4] 戸矢理衣奈『銀座と資生堂 ： 日本を「モダーン」にした会社』、新潮社、2012 年、p.18。
[5] 「歴史」（発行年不明）、"資生堂"、〈https://www.shiseidogroup.jp/company/past/history/〉

この説明が示すように、白粉がその名の通り、白い粉として認識されていたことを覆す画期的な白粉であったと思われる。明治 39（1906）年に発売された「かへで白粉」や「花白粉」も真っ白いものではないが肌に近い色であり、「七色白粉」のように用途や顔色に合わせて選べる白粉は、当時の女性たちにとってかなり物珍しいものであっただろう。

大正 7（1918）年には、日本初となる「コールドクリーム」を発売した。コールドクリームとは、構成成分の 50%以上が油分からなるクリームで、油分が多いため、皮膚に塗布したときひんやり冷たく感じることからコールドクリームのよび名がついた。油性クリームともよばれる[6]。「コールドクリーム」は「1920 年代後半になると、他の化粧品会社からもコールドクリームが次々と発売されるようになりますが、資生堂のコールドクリームはその後の技術革新により処方の改良を何度も重ね、日本の代表的クリームとして 40 年以上その名声をとどめました。」[7]とされるほど、ロングセラー化粧品だったようである。創業以降 1930 年代に入るまで、多くの化粧品を製造、販売しなかったことによって、ひとつの化粧品を長く販売する形をとっていたのである。

1-2　平尾賛平商店

平尾賛平商店は、明治 11（1878）年に創業した[8]。創業者は平尾賛平(1846-1893)である。二代目は平尾貫一(1897-1943)である。貫一は店を継ぐにあたり、二代目・平尾賛平を襲名した。この 2 人の平尾賛平によって、平尾賛平商店は近代の化粧品会社として大きな飛躍を見せることとなる。

まず、平尾賛平商店は明治 11（1878）年に「小町水」という白粉下化粧水を販売した。次いで明治 13（1880）年に「御匂ひ入　小町あらひ粉」を発売している。また、明治 17（1884）年までに、「西洋薬歯磨　小町の友」、「東京役者　似顔はみがき」、「新製　小町水おしろい」、「小町粉白粉」が発売された。明治 10 年代に発売された化粧品は、スキンケア商品である化粧水や洗粉、メイクアップ商品である白粉、そして衛生商品である歯磨となっており、衛生や素肌を肌理細やかにするための商品が多く発売されていることがわかる。

このように、衛生を重視した商品は明治 20 年代後半から明治 30 年代にかけても多く、「分捕石鹸」や「勲功石鹸」などが明治 20 年代後半に発売されている。また、明治 30 年代も

2016 年 3 月 24 日閲覧。

6 日本化粧品技術者会編『化粧品事典』、丸善、2003 年、p.478。

7 「歴史」"資生堂"ウェブサイト、前掲。

8 平尾賛平商店編『平尾賛平商店五十年史』、1929 年、p.2 には次のように記述されている。

> 明治十一年夏三井組を辞して神田淡路町二丁目三番地に卜居、売薬業を創め岳陽堂と号し名医松本順国手の方剤になる脚気薬利水散其他の売薬を発売し此処に商人としての第一歩を踏み出したるなり。

「日本美人石鹸」や「菖蒲石鹸」、「メリー石鹸」など、石鹸の発売数が最も多い時期である。日清戦争（1894-1895）や日露戦争（1904-1905）によって衛生が重視されたこと、戦地に持っていくために製造されたと考えられる。また、この 2 つの戦争の頃に登場した美容家の存在も大きかったといえよう。ま第 3 章で述べたように、美容家の登場によって清潔な素肌が重視されるようになったためである。そのため、この時期には「貴功白粉ダイヤモンド」や「日本美人粉白粉」などが白粉も発売されているが、石鹸に比べると大きな差が出ている。

明治 40 年代以降になると、白粉の発売数が大幅に増える。また、「クレームレート」などのクリーム類が発売されるようになる。美容家によって提唱された美顔術に必要なものとしてクリームが重視されたことが要因であると思われる。また、明治 40 年(1907)に行なわれた美人コンテストによって、それまで遊女や芸者などの玄人が対象とされていた「美人」という価値観を、素人である家の夫人令嬢が担うことになり、さらに健康的で美しい女性が求められることになったことも要因のひとつであるといえよう。

大正期には、様々な化粧品が発売される。白粉や化粧水、クリーム類に加え、大正 6（1917）年に「レート頬紅」を、大正 8（1919）年に「レート眉墨」、大正 14（1925）年には「レートロ紅」などのポイントメイク商品が売られた。また、白粉もそれまでの真っ白なものから、大正 12（1923）年に卵色の白粉が、大正 14（1925）年には三色の白粉(どのような色かは不明)などの色味が入ったものが発売される。それは、それまでの「赤・白・黒」の化粧から、色が増えた化粧へとなる過渡期であったといえよう。先に紹介した資生堂は大正 6（1917）年に「七色粉白粉」を発売しているように、平尾賛平商店も「レート五色水白粉」や「レート五色粉白粉」など、3 色から 5 色へと色数を増やしている。五色がどのような色であったか、どのくらい売れたか、詳細は不明である。しかし、色が増えたことにより、様々な顔に合わせた化粧ができることとなったこと、また、化粧のバリエーションが増えたことは大きな変化であったといえるだろう。

1-3　中山太陽堂

中山太陽堂は明治 36（1903）年に創業した。創業者は中山太一である。「生きた修身」[9]と称された中山太一の経営方法は、次のように評されている。

> 中山太一と中山太陽堂の販売戦略は、自らの目指す方向に合わない旧時代的なものを切り捨てるのではなく、新しい文化的文脈を構築し、それに応じた趣味や嗜好を育成しながら進められていった。もちろんそれは利潤追求を第一としているが、だからといって資本主義の名のもとに一括して卑小に扱って済ませるようなことではない。こ

[9] 井上五郎『此の人を見よ』冨士書房、1938 年。「序」より抜粋。

うした形で次の時代の文化や流行が作られるのも近代の特徴である。[10]

元々は化粧品の卸業であったが、明治 38（1905）年に発売した「クラブ洗粉」を皮切りに、化粧品の製造・販売を行なうようになった。中山太陽堂はまず明治 38（1905）年に「クラブ洗粉」が発売された。このクラブ洗粉は、「中山太陽堂のクラブ洗粉出でて、洗粉界は全く其の縦横発展の下に支配されて以来何者の追従をも許さざるものありき。白粉界の御園、歯磨界のライオン、化粧水界のレート、洗粉界のクラブ是れ明治年間化粧品界の四大覇者なりき。」[11]と評されるほどの売れ行きを示し、同年に平尾賛平商店が販売したレート化粧品とともに四大覇者の一つとして挙げられている。その後、中山太陽堂は、無鉛の「クラブ白粉」や「クラブ粉白粉」などの白粉類や、「英国式クラブ美身クリーム」、「クラブ化粧水」などのクリームや化粧水類などのスキンケア商品を次々と発売し、その地位を揺るぎないものとしていく。

大正期になると、「クラブほゝ紅」や「クラブ眉墨」、「クラブ口紅」、「クラブ紙まゆずみ」など、ポイントメイク商品を発売する。このようなポイントメイク商品の発売は、平賛平商店とほとんど同時期に行なわれている。

昭和期にはいると「クラブ美の素」という化粧下地を発売している。また、「クラブビシン」などの白粉類が多く発売された。また、「クラブ水白粉（肌色）」といった色つきの白粉も発売されるなど、これ以後も、中山太陽堂は様々な化粧品を販売している。

第 2 節　化粧品会社の宣伝方法と販売経路

化粧品会社にとって、化粧品を販売するにあたり、その宣伝はとくに重視されるものである。それは近代の化粧品会社も同じである。まず、明治期の宣伝方法として重視されたのは新聞広告であった。その広告に記載された手法は次のとおりである。

> 明治後期の化粧品広告を特徴づけていたのは、品質の保証に博士発明、国家機関の証明が有力なものとして取り上げられていることで、これは従来から好んで使われてきた手法ではあるが、それがいっそう強く現われてきたのがこの時期である。[12]

このように、化粧品の品質を保証し、人々に安心感を与えることを第一とした広告を新聞に掲載した。この頃の化粧品は、衛生的なもの、健康美をもたらすものとして販売して

---

[10] 中野正昭「文芸協会と中山太陽堂　タイアップする明治・大正の新文化」早稲田大学坪内博士紀念演劇博物館『文部科学省　私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア推進事業「日欧・日亜比較演劇総合研究プロジェクト」成果報告集』、2008 年。

[11] 平尾賛平商店 1929、前掲書、p.769。

[12] 日本化粧品工業連合会 1995、前掲書、p.110。

いた。そのため、品質の保証として、国家機関の証明や博士発明の証明などを品質のお墨付きとして記載していた。

大正期の広告は、新聞広告だけでなく雑誌でも多く掲載されることになる。この頃になると、レイアウトや見やすく個性的な字体の文章やキャッチフレーズなどを重視した広告が多く見られるようになる。

> 大正期の広告の流れは、手堅い説明広告と新感覚広告との共存で創り出されていた。それにはさらに文化志向の広告が併行する。（中略）広告表現の特徴は図案的要素が多く取り入れられたことである。（中略）図案家や文筆家など、社外の有能な人たちの力を導入したのも、この時代の新しい傾向であった。[13]

社内に広告部を設け、そこに図案家や文筆家を登用した方法は、平尾賛平商店や中山太陽堂でも最も用いられた方法である。このことについては後述する。

昭和期のはじめになると、映画スターなどを用いるようになる。それまで主流だったイラストから、スターの写真が多く用いられるようになった。

> この頃（筆者註：昭和前期）の化粧品広告を特徴づけていたものの一つは、すでにタイアップ関係にあった映画、演劇界との提携が深まり、映画スターの写真が盛んに利用されたことである。（中略）視覚的訴求強化の一方で科学的特性表現が見られ、白粉原料の微粒子訴求やホルモン配合の強調等が多く見られたのも、新しい広告傾向であった。[14]

上記のように、挿絵の部分には写真が多く用いられるようになった。また、テクストには「化学的特性表現」が用いられることで、より化粧品の品質を高めるような記述がされることとなった。

このように、明治期から昭和期にかけての化粧品広告には、それぞれの特徴がみられる。では、当時の化粧品会社はどのような方法で化粧品を宣伝したのだろうか。また、これらの宣伝方法によって拓かれた販売経路はどのようなものだったのであろうか。本章では、各社の宣伝方法と販売経路について見ていくこととする。

2-1　資生堂

創業時から大正期にかけての資生堂について、次のように記されている。

---

[13] 同上書、pp.181-182。
[14] 同上書、p.204。

資生堂はメーカーとして、歯磨ではもちろん、化粧品でもあながち後発とはいえないが、販売量は少なかった。広告量も微々たるものであった。それは商品そのものが特定層を対象としたことにもよるが、そればかりでなく業態そのものにも由来していた。薬局とソーダファウンテンでわかるように、銀座通りにおける資生堂は著名な小売店である。薬局としての声価はきわめて高く、新たに資格を得た薬剤師は、資生堂薬局、麹町・斎藤満平薬局、本郷・近藤栄一薬局のいずれかで実地研修を望んだ。資生堂はそのような声価を土台にして薬品と化粧品を製造販売していた。端的にいえば小売店がメーカーを兼ねていた。二つの面は未分化に取残されており、メーカーとしての姿勢はまだ確立していなかった。[15]

明治期から大正期にかけての資生堂は、化粧品を製造、販売しているものの、現在のような大規模な企業ではなかった。メーカーとして確立していなかったこともあり、宣伝活動も大々的に行っていなかったようである。

大正 5（1916）年に化粧品部を開店し、そのなかに意匠部もつくられた。この意匠部によって、さまざまな広告がつくられ、雑誌や新聞などのメディアに大きく資生堂の名前が掲載されるようになる。さらに、大正 11（1922）年には美容科、美髪科、子供服科を開設した。また、大正 12（1923）年には資生堂化粧品連鎖店制度、すなわちチェーンストア制を発表し、メーカーと小売店の新しい在り方を打出している[16]。

このように、資生堂は自身がメーカーと小売店であったことを強みとし、メーカーと小売店がお互いに損失を出さないような制度をつくり、販売経路を確立していったといえよう。このチェーンストア制の成功によって、現在の資生堂の販売経路の基礎がつくられたのである。

2-2　平尾賛平商店

平尾賛平商店の勝田重太郎（自身は「化粧品屋の番頭」と名乗っている）は、広告制作の要件として次のことを挙げている。

商品を売るのが上手だといふ事は、其の商品その物の実質及び効用などを人々に説明する事が上手だといふ事と同じやうに解釈されます。広告術は此点から発足するもので、或る商品に関する事柄を、多くの人々に解り易く、快よく牽きつけ、然して心の底から首肯かせて買はせるやうに、創作するといふ事が第一の要件であらうと思ふ。[17]

---

[15] 資生堂編『資生堂宣伝史Ⅰ　歴史』1979 年、p.23。ソーダファウンテンは明治 35（1902）年に開店した。

[16] 同上書、p.28。

[17] 勝田重太郎「第十講　化粧品と広告」日本電報通信社編『広告研究　昭和 14 年版』1939 年、p.164。

化粧品広告の制作要件として、いかに購買者に納得させて化粧品を購入させるか、を考えた平尾賛平商店は、いつから、このような広告を制作するようになったのであろうか。このことについては、次章の広告分析によって明らかにする。

『平尾賛平商店五十年史』には、広告の制作に関して次のように書かれている。

> 乳白化粧水レートの発売に当り(中略) 当時未だ広告部の設けなく文案は骨皮道人、柳亭種彦氏等により或は鈴木留吉により成るもの多く、図案は宇田川国輝、原田耕挙氏等によりて成れり。
> 大正三年頃は井出正一氏の文案を多く採用し又杉浦善造氏の筆に成るもの少なからず、大正六年頃より広告部を設置し文案図案の創作に意を注ぎたり。[18]

このように、平尾賛平商店では、明治 44（1911）年に「乳白化粧水レート」を発売したときから、広告を重視し、文筆家や図案家に制作させていたようである。文案を担当した 1 人である柳亭種彦とは、高畠藍泉のことである[19]。新聞記者であったため、新聞広告でどのような表現を用いたら、講読者に理解されるかを熟知していたのではないだろうか。その他の人物について詳細は不明であるが、いずれも広告制作にあたり重要な人物であったと思われる。

平尾賛平商店は化粧品広告に標語、いわゆるキャッチフレーズを多く掲載した。「新聞広告に化粧標語を使用せるは当店の創案」[20]であると、『平尾賛平商店五十年史』で自賛している。また、標語のほかにも「下田歌子女史のお化粧観、内田魯庵氏の化粧談、川上貞奴の化粧談、船井梅南氏の骨相上より観たる化粧談其他あり、其後女優松井須磨子、帝劇女優等の化粧談等は全国の新聞に掲載したり。」[21]と述べている。平尾賛平商店の化粧品広告のような、新聞に女優などの有名人物の体験談を掲載する方法は、現在でも見られる手法である。

また、『文芸倶楽部』、『太陽』、『女学世界』、『婦人世界』、『婦人の友』、『婦女界』、『演芸倶楽部』、『婦人画報』、『主婦の友』、少女諸雑誌及び多種類の雑誌に化粧品広告を掲載していたようである[22]。

大正期になると、広告部を設置し、さらに広告制作に力を入れた。前述したように大正 6（1917）年に設置された広告部には、文筆家や図案家をそろえ、さまざまな広告を打ち出

---

18 平尾賛平商店 1929、前掲書、pp.339-340。
19 戯作者。江戸の人。本名瓶三郎。藍泉は画号。東京日日新聞・読売新聞などの記者を経て、三世柳亭種彦の号を継ぐ。著「巷説児手柏」など。天保九〜明治一八年（一八三八〜八五)。"たかばたけ - らんせん【高畠藍泉】"、『日本国語大辞典』、前掲より抜粋。
20平尾賛平商店 1929、前掲書、p.340。
21 同上書、p.343。
22 同上書、p.343。

していった。このことについて、『平尾賛平商店五十年史』では次のように述べている。

> 大正年間に於ける化粧品の広告は著しき発達を遂げ、各製造本舗は文案図案の専門家を以て広告部を設置し、新聞社と広告面の契約を結び、劇場と特約してお土産デーを挙行し、活動写真隊、演劇団の如きを組織して宣伝する等種々なる広告方法行はれたり。[23]

この記述からわかるように、各社が広告部を設置し始めたのは大正期からのようである。広告部という組織の設置によって、それまで新聞や雑誌の中でしか広告できなかったものが、新聞社や雑誌社との提携によって「お土産デー」などの商品を配布するサービスデーが行なえるようになった。また、新聞、雑誌での広告以外の方法でも多く宣伝がなされた。平尾賛平商店では、見本配布、路上演劇、牛車広告、丸太乗宣伝、旗行列宣伝、博覧会の出品、活動写真隊宣伝、演芸団宣伝、演劇宣伝、飛行機飛行船宣伝、美粧講演などの方法で宣伝が行われたようである。[24]

その中でも、新商品を発売するにあたって、試供品を配布する「見本配布」は現在も行われる宣伝方法といえる。

> 発売当初に於て其製品の需要開拓のため使用品を配布したること頗る多し。乳白化粧水レート、クレームレートの見本配布の如きは当時一般需要界の未知時代に於て、其需要を喚起したる力は偉大なるものあり、クレームの如きは配布の数巨多にして化粧用クリームの普及はクレームレートの試用品配布に依りて開発せられたる所多きなり。又白粉類も発売の都度見本を配布し、レートフード、レートメリーの如きも其配布数は多数に上れり。
> 配布先は、戸別訪問、愛国婦人会員、所得税納付者、女学校、劇場、交換局、各工場等其他にして、レート石鹸の発売と共に是又多数を配布せり。[25]

この記述から、かなりの数の試用品を配布していたようである。この試用品の配布によって、新しい化粧品が開発されるなど、平尾賛平商店、購買者ともに必要不可欠な宣伝方法であったと思われる。また、この頒布によって、人から人への噂、いわゆる口コミを狙っていたともいえるだろう。特に、女学校に試供品を配布していたことは興味深い。女学生を化粧品の購買対象とみなしていたということである。

また、美容家とも講演会を行なうなど、関係を築いていたようである。

---

[23] 同上書、p.787。
[24] 同上書、pp.534-537。
[25] 同上書、p.534。

化粧、結髪、着附の実演と併せ、整容講演会を各地に於て催せり。山本久栄女史等に始まり、大正十二年以降は野口柾夫を主任として、婦人団体、百貨店、販売店会合の席上或は各工場等に於て講演会を催せり。[26]

このように、化粧品を販売するにあたり、広告制作は必要不可欠なことであった。そのため、大正 6（1917）年に広告部が設置される前から、平尾賛平商店では多様な人物が文案及び図案を作成していた。平尾賛平商店がいかに化粧品広告に精力を注いでいたかが推察できる。

平尾賛平商店の販売経路について詳細は不明なものの、小売店での販売が主であったと思われる。また、雑誌を仲介とした通信販売も行っていたようである。

2-3　中山太陽堂

中山太陽堂の販売経路は、主に山の手の富裕層から一般家庭であったようである[27]。創業者である中山太一は、日本の女性を内外ともに美しくあってほしいという理想をもっていた。そして、そのためには文化生活を送ることが必要であり、化粧品はその文化生活を送る上での必需品であると述べている[28]。そのため、化粧品広告の重要性を感じ、広告部を創業当時から設置し、初代広告部長には東京の経済誌主幹の桑谷定逸を迎えた。これは、平尾賛平商店など他社の広告部設置より早い。それだけ、宣伝広告が購買意欲に大きく影響を与えることを察知していたということだろう。さらに、表現技術に優れた専門家が必要と判断すると、いちはやく一流の文学者や画家を嘱託として迎え入れた[29]。こうして作成された広告について、明尾圭造は、「化粧品のネーミングや宣伝についても、一度聞いたら忘れないが、どこか野暮ったいところがある」[30]と述べている。このように評されている広告を含め、中山太陽堂はさまざまな手法を用いて自社の化粧品を宣伝していた。大きく分類すると、以下の五項目に集約される。

---

[26] 同上書、pp.534-537。

[27] 中野 2008、前掲論文、p.16・

[28] 明尾圭造「阪神間モダニズムと女性」芦屋市立美術博物館編『モダニズムを生きる女性～阪神間の化粧文化～』、2002 年、p.4。

中山太一の言う「文化生活」とは、真の精神生活と合理的な物質生活の融合によってつくられる善美な家庭を指すと思われる（クラブコスメチックス編『百花繚乱　クラブコスメチックス百年史』、2003 年、p.68）。しかし、以前、筆者がクラブコスメチックスでの調査で伺ったさいには、「文化生活」が具体的にどのようなものかは分からないとのことであった。

[29] 人気作家の柳川春葉や小山内薫、画家の杉山寿栄男や織田一磨、沖田沖舟たちである。クラブコスメチック 2003、前掲書、p.35。

[30] 明尾 2002、前掲論文、p.7。

１．マスコミ関係（新聞・雑誌等出版物）
２．街頭宣伝（宣伝隊、街宣カー、ショウウインドー、看板ネオン広告など）
３．イベント企画（博覧会、航空広告、富士登山、芸能行事など）
４．特別販売（クラブデーによる特売は前記、イベント企画とも連関する）
５．文化事業（中山文化研究所、プラトン社、講座講演など）[31]

これらの中でも、新聞・雑誌への広告掲載には重点を置いていたようである。織田久は、中山太陽堂を「ネガティブなのれん商法にかわって、新聞広告というアグレッシブな方法を通して短期間に急成長した企業」と評している[32]。この新聞広告で多用されたのが名妓などの美人写真を使用したものである[33]。

また、明治 43（1910）年には、中古のフォードを購入し、自動車広告を行なった[34]。さらに大正 2（1913）年には京城（現・ソウル）で、飛行機による「クラブ化粧品」のチラシ散布を行なった[35]。翌年には、奈良市や福山市でも宣伝飛行を行なっている。ほかにも、大正 3（1914）年に開かれた「東京大正博覧会」や大正 11（1922）年の「平和記念東京博覧会」において、中山太陽堂は積極的に出展したようである[36]。

広告イベントも数多く開催された。帝劇とタイアップした「クラブ・デー」や、東武鉄道とタイアップした「観梅クラブ・デー」など、四季おりおりの機会をとらえて「クラブ・デー」となづける広告イベントを行なっていたようである[37]。

また、広告のレイアウトも重視していた。大正広告の特徴のひとつは、ヘッドライン・キャッチフレーズのつけ方であったが、中山太陽堂の場合は、つねに繰り返されるキャッ

---

31 同上論文、p.11。
32 織田久『広告百年史　大正・昭和』、世界思想社、1976 年、pp.26-27。
33 このことについて、織田は『広告百年史　明治』、世界思想社、1976 年の中で、次のように述べている。

> (筆者註：明治)四十年代の化粧品広告で、最も注目されるのは、“美人写真”の中山太陽堂「クラブ洗粉」だったろうと思う。当時、新聞記事にはすでに写真の使用があたりまえになっていたが、広告に使うものはいなかった。写真術はともかくとしても製版、刷版に問題が多く、仕上りが不安定だったことが最大の理由だったと考えられるが、「クラブ」は、それを敢然と利用した。もっとも写真といっても、名流婦人や名奴の記念写真といった趣きのものだが、イラストの多い広告欄のなかでは新鮮な効果をあげている。(p.231)

34 クラブコスメチックス 2003、前掲書、p.34。その後、大正 7 年（1918）には、ボディを濃い紫色に塗り、「クラブ白粉」や「クラブ洗粉」と入れたフォードのトラックも導入した。
35 同上書、pp.34-35。
36 同上書、p.60。特に「平和記念東京博覧会」では壮大な規模の特設館を設け、入場者の関心を集めたようである。
37 織田 1976a、前掲書、pp.32-33。

チフレーズやヘッドラインはなかったようである[38]。しかし、レイアウトに関してはかなり重視していたようで、余白の使い方や余分な文字を削り、必要最低限の文字しか書かないなど、いかに印象深い化粧品広告を制作するかを考えていたのであろう。

そのような広告の中で、中山太陽堂は化粧品をつけることで「幸福な家庭を得られる」というイメージを作り出そうとしていたようである。そのため、幸福のイメージのひとつとして、子どもを登場させたり、ゆたかなゆとりある家庭をイメージさせるような広告を制作した[39]。このような中山太陽堂の広告制作について、織田は次のように述べている。

> この広告の巧妙なところは、いわゆる“ぬかみそ臭い”主婦あるいは妻に、日常的に化粧するという理由を与えたことであるにちがいない。上流社会や芸者はともかく、普通の家庭の主婦にとって化粧する機会はまだまだ外出とか冠婚葬祭の、いわばハレの時にかぎられていた時代である。[40]

前述したとおり、中山太陽堂の販売対象は山の手の富裕層から一般家庭を対象としたものだった。織田が述べるように、この頃の化粧品購買者は芸者や上流社会の女性でしかなかったが、そこに一般家庭の女性を含めたことで一気に購買対象が広まった。中山太陽堂が求めた「妻が主人のためにしつらえるくつろぎの場所」[41]である家庭のイメージは平尾賛平商店にはあまり見られないものであった。

中山太陽堂の販売経路は、小売店、デパートでの販売、雑誌を仲介した通信販売であった。とくに、三越や高島屋などの有名デパートの一角に店舗をかまえたことで、富裕層を購買対象としつつも、小売店などで一般家庭を購買対象とすることで、ほとんどの層の女性を購買対象としていたことがわかる。

第 3 節　各化粧品会社と「少女」たち

ここで、第 1 節で紹介した資生堂、平尾賛平商店、中山太陽堂が発売した化粧品を発売年別にリストアップして整理してみる。化粧品をスキンケア類（洗粉、石鹸、化粧水、クリーム、歯磨）、ベースメイク類（化粧下、白粉）、ポイントメイク類（眉墨、頬紅、口紅）というタイプ別に分類し、それぞれ順番に青色、黄色、赤色で色分けしている〔章末表 4-1〕。さらにこのリストをもとに年ごとの発売数を棒グラフの表を作成した〔章末表 4-2〕。そして、前章までの本論に登場した女子教育の教科書や少女雑誌に掲載された論など、主要な文献の出版年も付記した[42]。

---

38 同上書、pp.35-36。
39 同上書、p.41。
40 同上書、p.42。
41 同上書、p.42。
42 本来ならば、化学製品でもある化粧品の科学技術史としての面も考慮しなければならな

棒グラフで全体を見ると、初期は発売品数が少ない中でスキンケア類が多く、1900 年代に入ると発売品数が増える中でベースメイク類が増加し、さらに全体の中での数は少ないもののポイントメイク類の発売が目立っていく。明治 35（1902）年、明治 36（1903）年にスキンケア発売の最初の突出があり、明治 44（1911）年からのスキンケア類の発売が増えると共にベースメイク類の発売が増えていることが認められる。この時期は衛生教育を含む修身の教科書の出版と時期的に重なっている。また『少女の友』において女子教育家の棚橋絢子がスキンケアを重視し、水白粉を推奨した文章を掲載したように少女雑誌の上でもベースメイクの重要性が論じられた時期と重なっている。

また、堀七蔵が大正 2（1913）年の『少女の友』に掲載した「熊になるお化粧」で無鉛白粉が紹介され、鉛白粉の被害に遭わないように注意がなされている。ここで紹介されている無鉛白粉が発売されるきっかけとなったのは、明治 20（1887）年に行なわれた天覧歌舞伎で鉛白粉による中毒によって中村福助が倒れたことによる。このことをきっかけとして、無鉛白粉が開発・発売されるようになったのである。明治 33（1900）年には無鉛白粉の製造販売、禁止を含む有害著色料取締規則が発布され、明治 37（1904）年には伊東胡蝶園から無鉛白粉の「御園白粉」が発売される。しかし、有鉛の白粉は伸びが良いためその後も売られ、完全に無鉛白粉のみの販売となるのは、昭和 9（1934）年のことである[43]。そのため、堀が『少女の友』に記事を掲載していた頃は、まだ鉛白粉と無鉛白粉がともに販売されていた時期であった。下田歌子も「女の身だしなみ」で無鉛の白粉を選ぶよう説いているように、化粧する「少女」たちに鉛白粉と無鉛白粉の違いを紹介し、その鉛の毒によって被害に遭わないような注意が盛んに行われていた時期であった。

化粧品という化学製品の開発と発売には、原料の調達経路や価格変動、化粧品容器を含めた製造技術の革新など様々な要素が関わっている。それらの要因についての信頼できる資料が欠如しているなか、社史と女子教育関連の文献という限られた情報であることを考慮しても、タイプ別の化粧品の発売と女子教育における化粧についての出版時期には一定の重なりが認められよう。ここから推測を試みるならば、化粧品会社も商品開発やマーケティング戦略を練る上で、「少女」という一定の購買者層の需要を配慮し、彼女たちに大きな影響力を持つ学校や教育者の化粧観に敏感であったのではないだろうか。逆に見れば、前章で見た女子教育における化粧の扱い化粧品会社の発売に影響を与えていたという教育機関と化粧品産業の関連も見えるように思える。もちろん女子教育の理念も化粧品産業の動向における一つの要素にすぎず、もっと大きな文化や産業や民衆の思想の変化と連動して動いている。それを暗示するものとして、グラフに現れた大正期に入ってからのポイン

いが、筆者は科学技術論についての知識を持ち合わせていないことと、明治期、大正期における化粧品の技術史に関する資料を見つけることができなかったため、表には含んでいない。また、各化粧品会社の技術に関しても、平尾賛平商店は廃業してしまっているため資料がなく、中山太陽堂も太平洋戦争によって資料が焼失してしまっており、詳細が分からないものが多いため記載していない。

[43] 無鉛白粉については、前掲の『化粧品工業 120 年の歩み』（p.4）を参照した。

トメイク類の増加は、大正デモクラシーのなかでのモダンガールや職業婦人といった女性の社会進出といった女子教育の良妻賢母主義から逸脱していく気運を反映していると考えられるのではないだろうか。

以上、本章で見てきたように、資生堂、平尾賛平商店、中山太陽堂はさまざまな方法で化粧品を宣伝、販売してきた。とくに、「化粧品産業成立の時期」[44]とされた明治 30 年代以降、平尾賛平商店や中山太陽堂のように派手な宣伝を行うようになった。また、大正期に入ると、各社が意匠部を開設する。それにより、化粧品広告にデザイン性が求められるようになり、各社の広告が新聞や雑誌などに掲載されていく。さらに、後に資生堂パーラーとなる喫茶店、資生堂ソーダファウンテンなど、化粧品ではない商品によって客集めをし、まず会社の名前を世に知らしめた方法も行われた。これらの化粧品の購買対象には、婦人だけでなく「少女」たちも含まれていた。それを示すのが、平尾賛平商店が行なった宣伝方法のひとつの試供品の頒布である。その頒布先に女学校が入っていることは、購買対象として「少女」たちが含まれていたということである。

このような頒布方法を行なうことで、彼女たちの口コミの力を利用し、化粧品の効能を噂させる目的もあったと思われる。「少女」たちのコミュニケーションネットワーク、いわゆる「少女幻想共同体」や後輩との「エス」の関係などによって化粧品の新製品について噂を拡散させることを狙っていたと思われる。

さらに、化粧品を使用することで、前よりも美しい自分になれることを実践してもらうために新製品を頒布していたことは同時に、遠藤波津子が『化粧と着付』や『正しい化粧と着付』で示したとおり、女学校の卒業とともに化粧品を使用する必要があることも表していたといえるだろう。このような化粧品の頒布は、「少女」たちに正しい化粧品の使用方法を広めるとともに、化粧品が未来の自分（美しく、健康的に幸せな生活を送る自分）をつくるために必要なものとして「少女」たちにイメージを刷り込んでいくひとつの手段となったと考えられる。そして、未来の自分の姿に強い関心を持ち、それを与えてくれる商品イメージを受入れやすい購買者層で、かつ将来にわたって、長く商品を購入してくれる顧客となる存在こそが化粧品会社にとっての「少女」なのである。女子教育においては、良妻賢母になるために必要とされたものとして化粧を捉えられていたのに対し、化粧品会社は未来の化粧品購買者として良妻賢母だけでなく、モダンガールや社会に進出する自立した女性になるための手段として化粧を捉えていた。化粧品会社が創出する理想の女性像、それをもっとも如実に表すのは言うまでもなく化粧品広告である。そこで、次章では少女雑誌に掲載された化粧品広告を考察し、化粧品会社が提示した「理想の少女」像について述べることとする。

---

[44] 資生堂 1979、前掲書、p.23。

〔表4-1　資生堂・平尾賛平商店・中山太陽堂で発売された化粧品〕

	資生堂	平尾賛平商店	中山太陽堂
明治11年(1878)		小町水	
明治12年(1879)			
明治13年(1880)		御匂ひ入　小町あらひ粉	
明治14年(1881)		西洋薬歯磨　小町の友	
		東京役者　似顔はみがき	
明治15年(1882)			
明治16年(1883)		新製　小町水おしろい	
明治17年(1884)		小町粉白粉	
明治18年(1885)			
明治19年(1886)			
明治20年(1887)			
明治21年(1888)	福原衛生歯磨石鹸		
明治22年(1889)			
明治23年(1890)			
明治24年(1891)		ダイヤモンド歯磨	
明治25年(1892)			
明治26年(1893)			
明治27年(1894)		分捕石鹸	
明治28年(1895)		勲功石鹸	
		占領石鹸	
明治29年(1896)			
明治30年(1897)	オイデルミン	貴功白粉ダイヤモンド	
		ダイヤモンド煉歯磨	
明治31年(1898)		日本美人粉白粉	
		日本美人白粉	
		日本美人洗粉	
明治32年(1899)			
明治33年(1900)		仏蘭西美人白粉	
		日本美人石鹸	
		あれしらず煉製美人白粉	
明治34年(1901)			
明治35年(1902)		菖蒲石鹸	
		二八石鹸	
		藤花石鹸	
		メリー白粉	
明治36年(1903)		メリー石鹸	

		透明美人石鹸	
		ホワイトローズ石鹸	
明治37年(1904)			
明治38年(1905)		元禄美人石鹸	
		金弗石鹸	
明治39年(1906)	かへで白粉	月の光石鹸	クラブ洗粉
	はな白粉	乳白化粧水レート	
明治40年(1907)		メリー洗粉	
明治41年(1908)		クリヤー	クラブ洗粉美術カン入
明治42年(1909)		クレームレート	クラブ洗粉特大袋
明治43年(1910)		レート煉白粉	クラブ白粉
		レート水白粉	クラブ歯磨
		レート粉白粉	
明治44年(1911)		レート自然色	英国式クラブ美身クリーム
		レートヂェリー	クラブ粉白粉
			クラブ水白粉
			クラブ化粧水
			クラブ洗粉専売特許カン入
明治45年・大正元年(1912)		クレームレート携帯用	クラブ打粉白粉
		レート洗粉	クラブ刷き白粉
		レート歯磨	クラブマッセークリーム

スキンケア類

ベースメイク類

ポイントメイク類

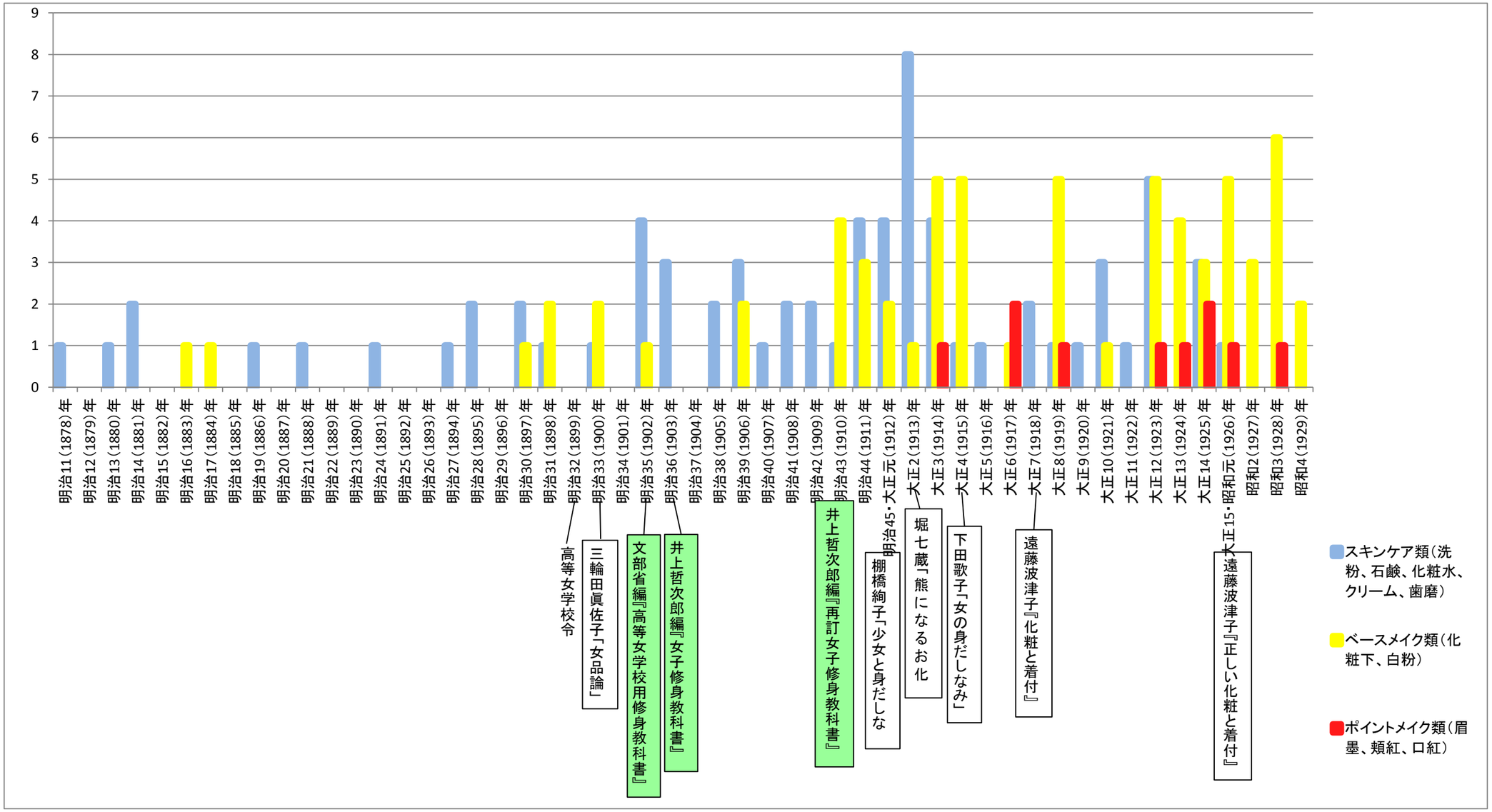
	資生堂	平尾賛平商店	中山太陽堂
大正2年(1913)		レート固煉白粉	クラブ乳液化粧水
			クラブ美身ゼリー
			クラブ洗粉徳用袋
			クラブ洗粉家庭袋
			クラブ煉歯磨
			クラブ水歯磨
			英国人技師招聘三周年　クラブ洗粉記念袋
大正3年(1914)		透明レート	クラブ固煉白粉
			クラブタルカン粉白粉
			クラブほゝ紅
			クラブ美顔白粉

大正4年（1915）		レートフード	クラブ天瓜粉
		レート紙白粉	クラブ美の素白粉
			クラブ美の素水白粉
			クラブ紙白粉
大正5年（1916）			立太子式記念 陸海軍用クラブ歯磨
大正6年（1917）	七色粉白粉	レート頬紅	クラブ眉墨
大正7年（1918）	コールドクリーム	レートメリー	
大正8年（1919）		レート眉墨	クラブ白粉錠
		レート打白粉	
		レートポット白粉	
		レート特製打粉	
		クレームレート家庭瓶	
		レート固煉玉瓶	
大正9年（1920）			カテイ石鹸
大正10年（1921）		レート香粧水	クラブ煉歯磨チューブ入
		フード石鹸	
		ドリン（化粧下）	
大正11年（1922）		メリー石鹸	
大正12年(1923)		レート洗顔液	クラブ白粉錠カン入
		煉製ドリン（化粧下）	クラブ口紅
		レート煉白粉卵色	クラブ歯ブラシ
		レート水白粉卵色	クラブ石鹸
		レート粉白粉卵色	
		レートメリー卵色	
		レート歯ブラシ	
大正13年(1924)	特性水白粉	レート水白粉角瓶	クラブつぼみ（化粧下）
	特性粉白粉		クラブ紙まゆずみ
大正14年(1925)		レートソバカスクリーム	
		レート美容水	
		レート口紅	
		レート三色粉白粉	
		レート三色水白粉	
		赤箱レート固煉白粉	
		レート頬白粉	
		レート石鹸	
大正15年・昭和元年(1926)		メリー石鹸	クラブ懐中用白粉錠
		煉製ドリン小形（化粧下）	クラブ固煉白粉中ビン
		レート頬白粉薄形	
		レート五色水白粉	
		レート五色粉白粉	

昭和2年(1927)		赤函レート固煉白粉	
		レート固形白粉	
		レート脂取紙	
昭和3年(1928)		赤函レート煉白粉	クラブ美の素（化粧下）
		赤函レート粉白粉	クラブビシン
			クラブ刷き白粉大型
			クラブ水白粉(肌色)
			クラブほゝ紅小カン
昭和4年(1929)			クラブ煉白粉別型中ビン
			クラブ刷き白粉別型

＊『平尾賛平商店五十年史』、『百花繚乱　クラブコスメチックス百年史』、『資生堂百年史』『株式会社桃谷順天館創業百年記念史』から作成。
ただし、平尾賛平商店に関しては、昭和3年（1928）までしか記載されていない。

〔表4-2　年ごとの化粧品発売数〕



第 5 章　少女雑誌の化粧品広告における理想の少女像

前章での、明治期・大正期の化粧品会社による化粧品の宣伝方法の検証は、化粧品会社が「少女」たちを一購買者層として設定していたことを明らかにし、タイプ別の化粧品の新製品の発売時期には、高等女学校の教科書や女子教育論において推奨される化粧品や化粧法との相関性の可能性を示唆した。本章では、化粧品会社がどのような「理想の少女像」を創出し、それを「少女」たちに向けてどのように発信していたかを、少女雑誌に掲載された化粧品広告の分析を通じて考察する。

第 4 章で紹介した化粧品会社のうち分析対象としたのは、レート化粧品の平尾賛平商店とクラブ化粧品の中山太陽堂である。両社は「西のクラブ、東のレート」と呼ばれた近代を代表する二大化粧品会社であり、少女雑誌をはじめとして、さまざまなメディアに化粧品広告を掲載していた[1]。

第 1 節　「少女」の創出と少女雑誌というメディア

序章でも紹介したように 2000 年代以降に数多く現れた「少女」に関わる研究において、「少女」や「女学生」とは明治期の近代化の過程において創出された概念であることが明らかにされてきた[2]。本田和子は、近代になって出現した大人と子どもの間に就学期間としての「青年期」が創出され、次いでその年齢の男性という枠組みから外れる存在として「少女」や「女学生」というカテゴリーが出現したとする。本田はあくまでも「少女」をことば上の虚構的存在とみなすが、就学期であることに注目する渡部周子は、「少女」期を出産可能な身体を持ちつつも就学期であることを理由に結婚および出産を猶予されていた特別な期間として論じた。さらに今田絵里香は「少女」の条件を具体的に限定し、女学校に通わせるだけの親の経済力と教育への熱意、そして買い与えられる少女雑誌が媒介する都市文化への傾倒とすることで、当時の「少女」像の再構築を試みた。本論での「少女」概念

---

[1] 水尾順一『化粧品のブランド史　文明開化からグローバルマーケティングへ』、中央公論社、1998 年。この中で、「西のクラブ、東のレート」と呼ばれた由来について、次のように述べられている(p.53)。

> 「西のクラブ、東のレート」と称された由来は、大正九年衆議院議員の永井柳太郎が「西にレーニンあり、東に原敬あり」との表現で時の政府を糾弾、「西に、東に」が名調子としてもてはやされた。当初は「西にクラブ、東にレート」として伝えられていたが、後に「西のクラブ、東のレート」となった。

[2] 本田和子『女学生の系譜・増補版　彩色される明治』、青弓社、2012 年。
渡部周子『〈少女〉像の誕生――近代日本における「少女」規範の形成』、新泉社、2007 年。
今田絵里香『「少女」の社会史』、勁草書房、2007 年。

はこれらの先行研究での定義を総合して倣うこととする。

少女の化粧文化を考えるにあたって、少女向け雑誌の重要性は、教育者による化粧についての文章やポスターと並ぶ化粧品広告の媒体であることだけではない。今田は少女雑誌の影響力の大きさを次のように指摘している。

> 少女雑誌を分析することの有効性は、一つめに少女雑誌が近代において現代とは比べものにならないくらい大きな影響力を持っていたことに見出せる。近代日本社会には雑誌、単行本、映画、ラジオ、テレビ、インターネットなど、多種多様なメディアがあったわけではない。さらに少女漫画雑誌、少女小説雑誌、ファッション雑誌などと、少女向けの雑誌がいくつもあったわけではない。それだけではない。メディアへのアクセスそのものが制限されていた。高等女学校の規則などによって少女は保護者同伴でなければ映画を観ることができなかった。少女たちにとって少女雑誌こそ接することのできた唯一のメディアであったといっても過言ではない。少女雑誌は「少女」創出の特権的な立場にあったのである。[3]

唯一のメディアとして当時の少女たちが夢中になって読んだ雑誌にはどのようなものがあったのだろうか。戦前の女性読者がどのような雑誌を読んでいたのかについての調査によると、女学生においては『少女の友』、『少女世界』、『少女倶楽部』等の少女雑誌が上位を占めていたことを示した[4]。

20 世紀に入ると少女向けの雑誌が相次いで刊行された。それ以前の雑誌、例えば『頴才雑誌』、『少年園』、『少年世界』は、広く「少年・少女」全般に向けて出版されたものであった[5]が、明治 35（1902）年刊行の『少女界』を皮切りに、読者層を「少女」に特化した雑誌が次々と登場し始めたのである[6]。その中でも『少女の友』は、とりわけ強い影響力を持っていた。『少女の友』は、明治 41（1908）年 2 月から昭和 30（1955）年 6 月まで刊行された。その読者対象は、小学上級生から女学生、つまり 11 才から 17 才であり、娯楽と教

---

[3] 今田 2007、前掲書、p.9。

[4] 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』、日本エディタースクール出版部、1997 年、p.173。
また、永嶺は同書 p.173 にて「女学生にとって少女雑誌は婦人雑誌への入門案内的機能を果たした」と述べている。

[5] 『頴才雑誌』は明治 10 年(1877)に、『少年園』は明治 21 年(1888)に創刊された。そして、明治 28 年(1895)に創刊された『少年世界』で、独立した「少女」欄が設けられた。佐藤(佐久間)りか「<少女>読者の誕生――性・年齢カテゴリーの近代」『メディア史研究』VOL.19、2005 年、pp.17-41。

[6] 金港堂による『少女界』の創刊後、明治 38（1905）年に『日本の少女』『少女智識画報』、同 39（1906）年『少女世界』、同 40（1907）年『少女の友』、同 42（1909）年『少女』、同 45（1912）年『少女画報』が発刊され、明治末期には代表的な少女雑誌はすべて顔を揃えた。本田和子『女学生の系譜　彩色される明治』、青土社、1990 年、p.179。

養の読物と読者からの投書を中心に編集されていた。博文館の『少女世界』とともに人気を集めた雑誌であったという[7]。

浜崎廣は『少女の友』について次のように述べている。

> 『少女の友』は『少女世界』をも凌駕し、名実ともに少女誌の女王の地位を長く維持し、昭和三〇年六月の死を迎えるまで、明治・大正・昭和にわたり数多くの少女たちに深い感動や、忘れ難い思い出を与えた記念すべき雑誌となった。[8]

それは、平成 21（2009）年に刊行された『少女の友』創刊 100 周年記念号に掲載されていた当時の読者たちへのインタビューからもわかる[9]。

また、今田は、『少女の友』の発行部数について、明治 42（1909）年は 4 万部強、大正元（1912）年は 8 万 5 千部あったと述べている[10]。他の少女雑誌に対し、抜きんでて発行部数が多かったわけではないようだが、半世紀近くにわたり「少女」たちに影響を与えてきたのは『少女の友』の他にない。

第 2 節　平尾賛平商店と中山太陽堂の化粧品広告

2-1　平尾賛平商店のレート化粧品広告

平尾賛平商店が重点をおいたレート化粧品広告は、『少女の友』に明治 40（1907）年から大正 7（1918）年まで 73 枚掲載されていた。これらの広告は、視覚的イメージ(写真・挿絵)と言語テクスト(広告文句)で構成されていた。視覚的イメージに頻繁に登場するのが「年若い女性」である。先に述べたように、こうした「年若い女性」は「少女」として表象されており、「少女」イメージが登場する広告は全部で 62 枚ある。

レート化粧品広告に登場する「少女」は多様な髪型、服装で、複数の表現様式によって描かれている。そこで、本章では髪型と服装を基準とし、「少女」を表現的な側面から分類す

〔図 1〕『少女の友』

明治 45（1912）年 6 月

---

[7] 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典　第二巻』、1993 年、p.563。

[8] 浜崎廣『女性誌の源流―女の雑誌、かく生まれ、かく競い、かく死せり―』、出版ニュース社、2004 年、p.74。

[9] 実業之日本社編『『少女の友』創刊 100 周年記念号　明治・大正・昭和ベストセレクション』、2009 年。

[10] 今田 2007、前掲書、pp.14-15。

る。こうした観点から分類を行なうと、三つの年齢層に大別できる。

第一に、「少女」というよりも「乙女」と呼ぶべき、やや大人びた顔立ちをしたタイプがある。例えば、『少女の友』大正元（1912）年6月号に「少女會話」と題された会話文と挿図による広告〔図1〕では、乳白化粧水レートの瓶から伸びた矢印が、四角い枠で囲まれた2人の「少女」の木版風の絵を指している。互いに顔を向き合わせ、仲睦まじい様子である。2人は共に着物に袴をはき、傘をさしている。右側の「少女」は、庇髪を結っている。それに対し、左側の「少女」束髪らしき髪型をしている。2人は、共に面長な顔立ちをしており、眼差しにも大人びた表情がある。また、明治41（1908）年4月号には写真入りの広告が掲載されている〔図2〕。画面左上に、縦長の楕円形の中の「少女」も着物に袴を着ており、髪は束髪に結っている。「少女」は、面長な顔立ちでやや切れ長の涼しい目でぼんやりとした表情を浮かべており、その下の大輪のバラが添えられた乳白化粧水レートの瓶の写真とともに甘美な雰囲気を漂わせている。こうした洋装の髪型をした袴姿の大人びた「少女」像を描いている広告は、全部で23枚あり、これらをAグループとする。

〔図2〕『少女の友』

明治41（1908）年4月

第二に、Aグループよりは顔立ちは幼く、和装、またはその上に和装用コートを着た「少女」像のタイプがある。髪型には一定の傾向はなく、多様である。例えば、大正3（1914）年3月号に掲載された広告〔図3〕、大正4（1915）年3月号の広告〔図4〕、大正4年（1915）8月号の広告〔図5〕である。

〔図3〕『少女の友』

大正3（1914）年3月

〔図4〕『少女の友』

大正4（1915）年3月

〔図5〕『少女の友』

大正4（1915）年8月

〔図3〕では、画面下部に二人の「少女」が座っている様子を描いている。「少女」たちは、

〔図 1〕でみた二人の「少女」と比べると、目が大きく、目と目の間が離れており、鼻筋が省略され、顔も丸く、ずいぶん幼く見える。二人は共に、着物に和装用コートを羽織っている。また、髪型に関しては、右の「少女」は和風に結髪しているが、左の「少女」については、判然とせず、大きなリボンがつけている。二人は、笑みを浮かべながら、広告文句にある「雛様」のように澄まして座している。

〔図 4〕には、画面右上、ほぼ正方形に枠取られた中に「少女」の胸から上の姿を描いている。落款から〔図 3〕と同じ画家の手による挿図と思われ、同じく 3 月号であるため右側に横から見た男雛が描かれている。「少女」の服装は判然とはしないが、着物の上に和装用コートを着用している。髪は結わず右側に水玉模様のリボンをつけている。〔図 3〕と同じく目は大きく、鼻筋が省略された少女である。〔図 5〕では、画面左上に「少女」の上半身が描かれている。「少女」の格好は、着物に帽子を被っている。帽子を被っているため、髪型は判断できない。これも落款から〔図 3〕、〔図 4〕と同じ画家と分かる。この「少女」もまた、目がぱっちりと開いており、笑みを浮かべている。こうしたAよりも幼く、着物、もしくは着物の上に和装用コートを羽織っている「少女」をBグループとする。このグループに属する広告は 20 枚ある。

最後に、Bよりも更に幼い顔立ちの「少女」像である。彼女たちの多くは、おかっぱで着物の上にエプロンという格好をしている。例えば、大正 3（1914）年 6 月号に掲載された広告〔図 6〕と大正 4（1915）年 4 月号の広告〔図 7〕である。どちらも落款から B グループと同じ画家と思われる。

〔図 6〕『少女の友』
大正 3（1914）年 6 月

〔図 7〕『少女の友』
大正 4（1915）年 4 月

〔図 6〕では、画面上部に 2 人の「少女」が向かい合って座っている様を描いている。左の「少女」の顔は見えるが、右の「少女」の顔は後ろを向いているため、確認することはできない。2 人の格好は着物の上にエプロンをしている。おかっぱのような髪型をしており、リボンをつけている。二人は間に「乳白化粧水レート」「レート白粉」と書かれた化粧品が置いて、楽しそうに会話している。その瓶と比較すると、2 人の体の小ささが伺える。

〔図 7〕では、画面下部に 2 人の「少女」が花を持ちながら手を繋いでいる姿を描いている。

この 2 人の「少女」たちもまた、着物の上にエプロンを着て、おかっぱのような髪型をしており、リボンをつけている。2 人はあどけない表情で描かれており、横に描かれた佇まいは極めて幼い。このような、エプロンを着用し、おかっぱの髪型をした極めて幼い「幼女」のように「少女」を描いた広告は 23 枚あり、これをＣグループとする。

以上の３グループの髪型や服装の特徴をまとめると、次のようになる。

Ａ：袴、洋髪
Ｂ：肩上げ、兵児帯
Ｃ：エプロン、おかっぱ

顔や表情の印象だけではなく、このような髪型や服装の特徴は当時の服飾文化からみてどのような年齢層や階層にあたるのだろうか。

まず、Ａグループ、袴に洋髪、例えば〔図 1〕で見たように庇髪の「少女」である。高橋晴子は次のように述べる。

> 若い男性やまた少年の目に、憧れの対象となった女学生のすがたは、第二次世界大戦前では二つの時期があった。一九三〇、四〇年代を中心とするセーラー服、一九〇〇、一〇年代を中心とする袴に庇髪である。[11]

このように、当時「袴に庇髪」は女学生を表す姿であった。それゆえ、Ａグループの「少女」は、「女学生」であることが分かる。確かに、描かれた「少女」の佇まいは大人びており、そうした年齢設定と矛盾しない。

次に、Ｂグループである。Ｂの「少女」が着ている和装用コートは、「一八九〇年代後半から一九〇〇年代はじめにかけて(中略)防寒、防雨のための実用衣料から、高級なおしゃれ着のひとつと認識され」たものである。また、ちょうどこの時期に、『洋式小物雑種裁縫新

---

[11] 高橋晴子『近代日本の身装文化　「身体と装い」の文化変容』、三元社、2005 年、pp.405-408。
ただし、この「袴に庇髪」というスタイルは女学生だけがしていたわけではない。高橋によると、「初期の職業婦人の一部―電話交換手など―が、よく似たスタイルで通勤し、そのひとたちのなかには女学生を気取っている者もあった」ようである。しかし、「電話交換手や専売工場の工員とは、みるひとがみればちがっていた。それは着物の着方、とくに襟のつめかた、ある期間の時計の鎖、紫の袱紗などの持ち物、頭のリボンの大きさなどなどだった。なんといっても職業婦人とくらべれば女学生はまだ少女らしさもあり、学校による規制もつよかった」ため、女学生かどうかは外見から見分けがついたといえる。「袴に庇髪」が女学生特有のものでなかったとはいえ、それを真似する婦人たちがいたということは、その当時「袴に庇髪」というスタイルが流行していたといえるだろう。

書』では子供の和装用コートを「女児服」の一つとして位置付けている 。このように、1900年代はじめには、和装用コートは子供服として広く着用されていたようだ。それゆえ、Bグループに描かれた「少女」は当時の学制を鑑みると、「尋常小学校に通う小学生」であるといえる。

最後に、Cグループである。Cの「少女」が身につけていたエプロンについて、『洋式小物雑種裁縫新書』には次のような記述がある。

> 女児用肩結
> 小児四五歳位より七八歳位までの間に用ゐらるゝので御座います、小児服の上でも亦普通の和服や筒袖の上でも用ゐられて、恰好のよい見附も致て上品で和洋兼用になる随分便利で調法な品で御座います[12]

このようなエプロンを身につけていたのは、4歳から8歳の子どもであったという。それゆえ、Cグループの「少女」たちのラフな線描によって描かれた身体のバランスの幼さは、現代でも成人を4頭身で表現するような軽妙なデフォルメ表現ではなく、肩結という服装からも、幼児期から尋常小学校の低学年の年齢の幼女を描いていると考えられる。こうした年齢の幅は、Bグループである低学年の小学生と重複するため、本論では、Cグループを「幼児」と呼び、区別したい。Cグループの「少女」たちは、A・Bグループよりも明らかに幼く描かれている。

以上見てきたように、平尾賛平商店が制作したレート化粧品の広告に登場する「少女」たちの年齢の幅は、女学生から幼児まで、すなわち、およそ17歳から4歳までと、極めて広範囲に渡るのである。ただし、Cグループの世代の幼児たちが『少女の友』の読者であったとは考えにくく、また、化粧水やクリーム、白粉で化粧をしていたことは分からないものの、表象イメージとして「幼児」が化粧品広告に登場していたことは化粧品会社の意図も含まれていただろう。

別の観点から考えるならば、現代ならば白粉はファンデーションと呼ばれるメイクアップ化粧のベースメイクに区分され、基礎化粧の区分の中に肌の保湿や日焼け止めが含まれるが、化粧品の種類が現在ほど豊富でなかった当時においては、この区分は特に白粉においてあいまいであり、白粉は皮膚の保護や日焼け止めとしての効果から用いられていた可能性もある。

2-2　中山太陽堂のクラブ化粧品広告

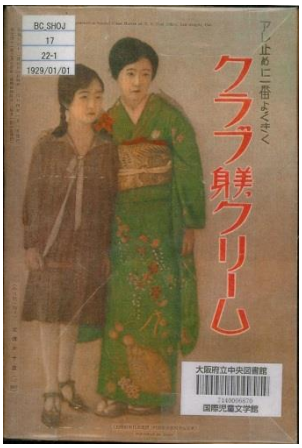
『少女の友』の裏表紙に掲載された中山太陽堂のクラブ化粧品広告は148枚であり、「少女」を含めた女性イメージが描かれたものは124枚である。

---

[12]山田 1907、前掲書、p.13。

第一に、和装の髪型や洋装の髪型で和装、洋装の「少女」イメージである。例えば、大正 7（1918）年 8 月の『少女の友』に掲載された〔図 8〕と、昭和 4（1929）年 5 月に掲載された〔図 9〕である。

〔図 8〕『少女の友』
大正 7（1918）年 8 月



〔図 9〕『少女の友』
昭和 4（1929）年 5 月

〔図 8〕は、左手に団扇を持った「少女」が描かれている。束髪を結い、肩上げがされている着物を着ている。

次に、〔図 9〕では、2 人の「少女」が描かれている。右側の「少女」は振袖を着て、洋装の髪型をしている。「少女」の右手は左側の「少女」の肩を抱いている。左側の「少女」は、肩より少し長い髪を 2 つにわけて結んでおり、セーラー服のような洋服を着ている。2 人の顔だちから少し年齢差はあるように見受けられ、同年代の姉妹と捉えることができるだろう。

こうした和装の髪型や洋装の髪型で和装姿の「少女」を描いた広告は 29 枚ある。これらの広告を A グループとする。

第二に、A よりも幼い顔で、主に和装で、多様な髪型の「少女」が描かれている広告である。例えば、大正 5（1916）年 12 月に掲載された〔図 10〕と、大正 14（1925）年 10 月の〔図 11〕である。

〔図 10〕『少女の友』
大正 5（1916）年 12 月

〔図 11〕『少女の友』
大正 14（1925）年 10 月

〔図 10〕には、鏡台の前に座る「少女」が描かれている。「少女」は頭にリボンをつけている。着物の上に和装コートをはおっている。「少女」は右手に刷毛を持ち、鏡台に映った自分の顔を見ながら「クラブ白粉」をつけている様子が描かれている。

〔図 11〕には、和装の「少女」が座っている。髪はまとめられ、髪飾りがつけられている。「少女」は両手で人形を持っている。その左側には、人形がもう 1 体描かれている。また、右側には手鏡が置かれている。「少女」の目線は人形に向いている様子である。このように A よりも幼い顔で、多様な髪型をし、主に和装、洋装の「少女」を B グループとする。このグループの広告は 10 枚ある。

第三に、B よりも幼い顔の「少女」である。彼女たちはおかっぱ、または肩につくくらいの髪型をしている。和装と洋装のどちらの恰好をしているが、和装の場合はエプロンを着用している。例えば、大正 5（1916）年 1 月の〔図 12〕と昭和 3（1928）年 10 月の〔図 13〕である。

〔図 12〕には、市松模様の和装にエプロンを着た「少女」が描かれている。「少女」の髪は肩上までで、リボンをつけている。右手に刷毛を持ち、左手に「クラブ白粉」を持っている。「少女」の前には鏡台があり、そこには「クラブ水白粉」などの化粧品が並んでおり、「少女」は鏡台を見ながら化粧をしている。

〔図 12〕『少女の友』
大正 5（1916）年 1 月

〔図 13〕『少女の友』
昭和 3（1928）年 10 月

次に、〔図 13〕にはおかっぱの髪型をした洋装の「少女」が描かれている。左足を組み、右手をその上に置いた状態の「少女」は洋風の椅子に座って、正面を向いている。
このように、おかっぱ、または肩につくくらいの髪型をし、エプロンを着用した和装、または洋装の「少女」を描いた広告は 9 枚ある。これを C グループとする。

最後に、A、B、C グループに比べ、高い年齢の「女性」が描かれた広告である。これらの広告には、断髪で多様な服装の「女性」が描かれている。その顔立ちは A グループの「少女」よりも大人びている。例えば、大正 9（1920）年 9 月の〔図 14〕と大正 12（1923）

年 2 月の〔図 15〕である。

〔図 14〕『少女の友』
大正 9（1920）年 9 月

〔図 15〕『少女の友』
大正 12（1923）年 2 月

〔図 14〕には、断髪で洋装の「女性」が描かれている。帽子をかぶり、長袖のシャツを着ている。膝下まであるチェック柄のスカートをはき、腰にはベルトをつけ、ヒールのある靴をはいている。「女性」の右側には犬が描かれ、後ろには海が描かれていることから、飼い犬の散歩をしている様子が描かれているようである。

〔図 15〕は、〔図 14〕と同じように帽子をかぶったパーマネントウェーブをかけた断髪の「女性」が描かれている。腰を絞った上着を着た「女性」は左手を腰にあててポーズをとっている。

このような断髪で洋装の「女性」を描いた広告は 70 枚ある。これを D グループとする。

最後に、クラブ化粧品広告には、花嫁姿を描いた広告が 6 枚ある。例えば、大正 6（1917）年 11 月の〔図 16〕である。〔図 16〕には、角隠しを被り、指輪をはめた手で扇子をもつ花嫁姿の「女性」が描かれている。

〔図 16〕『少女の友』
大正 6（1917）年 11 月

以上の分類をまとめると、次のようになる。

A：和装、結髪
B：肩上げ、兵児帯、和装、和装コート
C：エプロン、おかっぱ
D：洋髪、洋装、和装
E：花嫁

これらの髪型や服装の特徴は当時の服飾文化からみてどのような年齢層や階層にあたるのだろうか。

まず A グループの「少女」たちについてである。〔図 9〕に

描かれたセーラー服のような服装をした「少女」である。高橋は「セーラー服は、最初は男女児ともにもちいられたが、女学校の制服としてとりいれられることが多くなると、昭和初期のミドルティーンの女性のイメージにつよくむすびつく」 と述べている[13]。そのため、〔図 9〕が掲載された昭和 4（1929）年頃には、セーラー服は女学生が着るものとして認識されていたと思われる。また、振袖も未婚の女性が着用するものとして、江戸時代に定着したものである。そのため、クラブ化粧品広告に描かれている振袖姿の「少女」たちもセーラー服を着た「少女」と同年代ということができるだろう。そのため、A グループの「少女」たちの年齢は、ちょうど高等女学校に通う「女学生」であるといえるだろう。

次に B グループの「少女」である。〔図 10〕の「少女」は和装用コートを着ている。また、頭にはリボンをつけている。この恰好は、レート化粧品の広告にも登場している。レート化粧品の広告に登場する和装用コートが「女児服」のひとつとして位置づけられていることから、B グループの「少女」も同じ年齢だと考えられる。そのため、B グループは「尋常小学校に通う小学生」であると考えられる。

C グループの「少女」については、B グループの「小学生」よりもさらに幼く描かれている。例えば、〔図 12〕を見ると、エプロンをつけて、頭にリボンを飾った「少女」が描かれている。エプロンについては、前述したとおり 4 歳から 8 歳の子どもが身につけるものであった。そのため、クラブ化粧品に登場する C グループの「少女」たちは 4 歳から 8 歳ごろと考えられ、レート化粧品の広告と同様に「幼児」と位置付けることができるだろう。

最後に、D グループの「女性」たちである。このグループに登場する「女性」たちは、A、B、C グループの「少女」よりも大人びた顔立ちをしている。D グループには、洋髪で和装、ないしは洋髪で和装の「女性」が描かれている。例えば、〔図 15〕を見ると洋装の「女性」が描かれている。このような格好は「モダンガール」がしていたようである。高橋は、モダンガールについて、「断髪・洋装を中心としながらも、身装イメージとしてはより幅ひろく、先端的で、反習俗的な若い女性、と考えられる。洋装がかならずしも必須条件ではないが、和装の場合はとくにボブカットであることによって、そのイメージが強調されるらしい」と述べている[14]。

最後に、E グループである。E グループには花嫁が描かれている。その装いは角隠しを被った白無垢や、黒の引き振袖である。大正 5（1916）年から大正 7（1918）年にかけての広告に登場している。

第 3 節　平尾賛平商店と中山太陽堂が提示した「少女」の理想像

明治 41（1908）年から昭和 4（1929）年までの『少女の友』に掲載されている計 73 枚の平尾賛平商店と計 148 枚の中山太陽堂の広告に登場する「少女」と「女性」の視覚的イ

[13] 高橋晴子 2005、前掲書、p.405。
[14] 同上書、p.258。

メージを前節で行った髪型や服装による「少女」のグループ分けを比較すると、A の「女学生」、B の「小学生」、C の「幼児」と描かれた「少女」たちの年代の広がりは、レート化粧品とクラブ化粧品に共通している。大きく異なるのはクラブ化粧品には、「少女」と呼ぶにはかなり大人びた「女性」たちが多くが描かれている D グループと E グループの花嫁が含まれていることである。そして D グループの「女性」には「モダンガール」が多く含まれているが、大正 10 年頃から増加するモダンガールについては後述することとし、その前に年代とは別にレート化粧品の広告に多く見られるペアリングを考察したい。

3-1　平尾賛平商店のレート化粧品広告における「少女共同体」

前節で取り上げた図 1、図 3、図 6、図 7 だけでなく、レート化粧品の広告には二人の少女のペアリングを描いた図が多く登場する。こうした図像の傾向を考える際に注目したいのが、二人の少女の間で交わされている会話に頻繁に登場する「女学生ことば」である。例えば、〔図 1〕では親密な二人の「少女」の図像の上部に、「少女會話」として次のような会話を掲載している。

『皆様の厭がる季節が來ても、私達二人はいゝわね。』
『さうよ、乳白化粧水レートでお化粧すれば何時でも肌がきれいで爽かで、汗にも汚れず日にもやけないわね。』
『この頃は姉さまも母さまも皆なレートの熱心家になつてよ。』
『私の妹もね、レートでなくてはお化粧しないなんて言ふんですの。』
『小供だつていゝことはよく知つてるわホヽヽヽヽヽヽ。』

「女学生ことば」とは、「～ですの」、「～てよ」などの「女学生」特有の言葉である。こうした「女学生ことば」が定着したのは、明治 30 年代のことであった。「女学生ことば」を使ったおしゃべりは、耳になじまず、歯の浮きかねない、軽薄にも聞こえるものであり、「女学生」の非日常性を鮮明に映し出していると言える。つまり、そうした独自の言葉を使用することによって、女学生は自らを通常の庶民生活から遮断され、囲われた存在として、その特異性を顕示しているのである[15]。

---

[15] 本田 2012、前掲書、p.123。また、本田氏は「女学生」について、次のように語っている（p.178）。

「女学生」は、(中略)近代都市を代表する「記号」となり、さらには漸くに近代国家としての安定期を迎えた「明治」という時代の象徴でもあった。そして、彼女たち自身、人口の新造語である「女学生ことば」を駆使しつつ、新しく作られたものとしての特

こうした「女学生ことば」はレート化粧品広告において、「少女」の視覚的イメージが登場しない場合においても使用される。例えば、明治 43（1910）年 8 月号に掲載された広告〔図 17〕では、画面全体の背景には郵便マークが、画面下部には「平尾賛平商店」の印と、乳白化粧水レートの瓶、そしてスミレの花が描かれている。その上部には、手紙が斜めに配されている。その手紙には、次のような文言が綴られている。

◎花子さんの手紙　嬉しいわ姉さま
私し又夏が来たので､何うせふかと心配して居ましたら、丁度姉さまがレートを送て下さつたので、毎日忘れずにつけました。さうすると、ね姉さま、次第に肌の艶が変て来て、見違るほど綺麗になりましたの、それに去年のやう、日にやけたり、汗母が出たりしなひので、私し嬉しくつて／＼……、姉さまレートは大變イヽ化粧水ねー私し浪子さんや露子さんにも知せて上げましたわ、姉さま今度御帰省の時は、又買て來て頂戴ね、ホヽヽヽヽでも私し外におねだりしないんですものね、イヽでせう、お願ひ、左様なら

〔図 17〕『少女の友』
明治 43（1910）年 8 月

こうした、手紙というモチーフは、当時の読者、特に女学生にとって特別な意味を持っていたと考えることができる。稲垣恭子は次のように述べる。

女学生にとって手紙の世界は、自分たちを「女学生」として一般化し、現実の女学生生活を核としながらもそこからやや距離をとった理想的な世界を創出することによって、ロマンティックで親密な理想的関係を経験することを可能にしてくれる独特なリアリティをもった世界であった。[16]

すなわち、「女学生ことば」を使った「女学生」の理想的関係がレート化粧品広告の中で描かれているといえよう。ここで重要なのは、こうした理想的関係がレート化粧品に関する話題によって示されている点である。例えば、「少女會話」では、「女学生ことば」を用いることに加えて、レート化粧品を愛用することによって、二人の「少女」は、「ロマンテ

権性を誇示する。つまるところ、彼女たちは、和洋いずれの伝統にも依拠せず「異化するもの」としてのそのありようを誇示して、そのことを通じて、新しい時代の表徴としての位置を与えられたのである。

16 稲垣恭子『女学校と女学生』、中公新書、2007 年、p.117。

ィックで親密な理想的な関係」を構築しているのである。この他の広告にも「女学生ことば」を使ったものが多数ある。こうした「少女」達によって構築される理想的関係を「少女幻想共同体」と呼ぶことは間違いではないだろう。「少女幻想共同体」とは、「女学生にのみ共有可能な」[17]集団のことであり、「彼女ら占有の治外法権的文化圏の濫觴」[18]の場であった。レート化粧品広告は、こうした女学生を描いている。すなわち、Aグループに属する「少女」たちである。〔図 1〕を見ると、二人の「少女」の様子には親密さが伺え、言語テクストだけでなく、視覚的イメージでも「少女幻想共同体」が表現されているといえるだろう。

レート化粧品広告は、「少女」にとっての理想的状況であるところの「少女幻想共同体」を描くことに加えて、その理想を達成するためにはレート化粧品が必要不可欠であることを示すことによって、読者に「商品を購入したい」という「欲望」を促した。つまり、〔図 1〕を具体例として挙げるならば、レート化粧品広告は、読者にとって「理想」である「少女」たちの楽しげで仲睦まじそうな様子を描くことによって、読者に化粧品に対する「欲望」を生み出したのである。こうした背景には、女学生の化粧に対する当時の変化がある。『平尾賛平商店五十年史』には、女学生の化粧について次のような記述がある。

> (前略)大正の初期に於て婦人解放運動の勃興となり、一般婦人の知識高るにつれて審美的欲求益盛となり、美容法に関する追求も自由に高調せられて、「化粧は礼儀なり」「化粧は衛生なり」の思想も普及し化粧が日常生活茶飯事に属するに至る。(中略) 大正三年に端を発したる欧州大戦乱はやがて大正七八年に於ける国運も盛華と富の流入とを齎し、同時に西欧の生活様式が日本人の生活に影響する所益多きを加へ美容界にありては歐風化粧の流行となり、(中略)又一般婦人間に化粧普及徹底し、従来化粧を禁じ居たりし女學校に於ても合理的化粧は婦人生活の必要條件として採用すべきを認むるに至り[19]

この記述からも、大正 3（1914）年頃には女学生の間でも日常的に化粧をすることが認められていたことが分かる。大正元（1912）年には、「女子の中等教育（高等女学校）入学者は、一九一二年から一九二一年にかけて男子のそれを凌ぐ勢いで増加 」[20]した年である。「女学生」の増加に伴い、大正元（1912）年におけるレート化粧品広告の挿絵にはAグループの女学生が多く登場するのであろう。

さらに、興味深いことは、こうしたレート化粧品広告に特徴的なのは、広告に表れる「少女」の視覚的イメージが時を経るに従って、Bの小学生とCの幼児が増えてくるという点

---

17 本田 2012、前掲書、p.179。
18 同上書、p.179。
19 平尾賛平商店 1929、前掲書、pp.847-848。
20 香川せつ子・河村貞枝編『叢書・比較教育社会史　女性と高等教育―機会拡張と社会的相克』、昭和堂、2008 年、p.216。

である。すなわち、「少女」の年齢層の幅が若年層へと拡大しているのである。例えば、Bグループに属する〔図 2〕では、テクストに「活きた雛様、物言ふ雛様」と書かれ、二人の「少女」が仲良く並んで座っているイメージが描かれている。また、Cの例である〔図 3〕のテクストには、二人の「少女」が会話しているかのように表現している。そして、そのテクストに合わせるように、レート化粧品を間に置き、仲良さげに話している二人の「少女」が描かれている。こうした二人の様子は〔図 1〕と同様である。すなわち、レート化粧品広告では、本来、女学生の理想である「少女幻想共同体」が拡大されている。平尾賛平商店は、購買対象を女学生のみならず、それより下の年代にも広げようとしたのである。

また、写真から次第に挿絵のみ使用されるようになったことは、こうしたレート化粧品広告の特徴と無関係ではないだろう。なぜなら、こうした「非日常」的で、「庶民生活から遮断」された「幻想的」な理想を提示するためには、現実をそのまま写実的に写してしまう写真よりも挿絵の方がより適している、と制作者が考えたからだろう。

また 3 月・4 月と 8 月・9 月に「少女」をペアリングで描いた広告が増加する傾向がある。この時期には長期の休みが明け、新学期が始まる。すなわち、読者である「少女」たちにとっては、まさに、長期の休み明けにクラスメートたちとともに共同体を構築ないしは再構築しようとする時期に当たるのである。まもなく新学期を迎える読者、「少女」たちにとって、レート化粧品広告が描く「少女幻想共同体」という理想的な状況にある「少女」たちの姿は、まさに、来るべき将来の自分自身の理想的な姿を示すものであったに違いない。それを実現する為には、レート化粧品が必要不可欠なのである。視覚文化を論じるバージャーが言うように、「〈見る者=購買者〉に与える幻想がどれだけ有効性を持つかによって(筆者註：広告の真実性が)判断される 」[21]のであれば、平尾賛平商店は、「未来」のよって達成される「少女幻想共同体」を、有効性を持たせるために、この時期に多数の広告を打ち出したのではないだろうか。

3-2　レート化粧品広告の挿絵画家について

明治・大正期の化粧品会社の広告のデザイナーや挿絵画家についての記録や情報は乏しいが、レート化粧品の大正 2（1913）年から大正 7（1918）年までの広告は様式と挿絵に描かれた落款からすべて一人の挿絵画家によって描かれていることがわかる。そして、この 6 年間の広告の挿絵を描いたのは、ちょうどその時期に平尾賛平商店の広告部・絵画部に勤めていた画家、渡辺（旧姓亀高）文子であると思われる。

文子は主に子どもを主題とした油彩画を描いていた。しかし、明治 43（1910）年に画家の渡辺与平と結婚し、その与平が明治 45（1912）年に没したのちは、与平の作風を踏襲し

[21]バージャー、ジョン『イメージ Ways of Seeing―視覚とメディア』（伊藤俊治訳）、パルコ出版、1986 年、pp.179-180。

た作品を描く。与平は挿絵画家として平尾賛平商店の広告に携わっており、その世界において人気作家であった。平尾賛平商店の広告のみならず『少女の友』の挿絵も描いていた。

文子が描いた平尾賛平商店のレート化粧品広告には、A、B、C すべての世代の女性たちが描かれているが、その中でも C の幼児がもっとも多く描かれている。その理由として、文子が元来、子どもを主題として絵を描いていたことが挙げられよう。文子の画題は、前半は主に子ども、後半は花とされていて、子ども、特に幼児を可愛らしく描いていた[22]。

また、目尻の下がった円らな瞳をもった愛らしい童女を描くことで、化粧をする年齢になっても「童女」の愛らしさを失わないことをアピールする化粧品会社の戦略と一致していたとも考えられる。このように、本来ならば化粧をする年齢ではない「幼児」は、「少女幻想共同体」イメージの拡大として、また、化粧をしても失わない愛らしさの象徴として、レート化粧品広告に描かれていたのである。

3-3 中山太陽堂のクラブ化粧品の広告における「少女」像

クラブ化粧品の広告に登場する「少女」ないしは「女性」イメージには次のような傾向を見ることができる。

まず、掲載当初に A グループの女学生が多いが、大正 9（1920）年以降は D の洋装のモダンガールが多く掲載されることについて考察する。大正 5 年(1916)に『少女の友』の裏表紙を飾るまで、中山太陽堂は『少女の友』の広告ページに化粧品広告を掲載していた。そのさいに描かれていたのは、女学生から幼児まで多様な年齢層であった。しかし、裏表紙への掲載にあたり、化粧品購買対象を限定したともいえる。それが、『少女の友』の読者の中で最も多いであろう女学生たちである。そのため、化粧品広告の掲載当初は、A のような読者と同年代の「女学生」たちが多く描かれたのではないだろうか。

また、D が増えてくる要因としては、中山太陽堂が求めた「文化生活」[23]が大きく影響していると思われる。大正期には、都市部で生活するサラリーマン家庭が属する「新中間層」という新しい階層が出来る 。そのシンボルとして、「文化」の氾濫が起こった、と石川弘義は述べる 。そのため、中山太陽堂の広告でも、大正 14（1925）年 2 月の「クラブ白粉は衛生的文化生活の必需品なり」や、同年 12 月の「文化的化粧美」など「文化」を使ったテクストが掲載される。それに合わせ、「文化生活」を送っている「婦人」たちを多く描いているといえるだろう。そして、「モダンガール」という最先端のファッションに身を包んだ「女性」たちを登場させた。

また、中山太陽堂の広告でもっとも有名なのが、鉄道式広告である。鉄道式広告とは、〔図

---

[22] 神戸市立小磯記念美術館編『特別展　神戸の美術家　亀高文子とその周辺』、2009 年、pp.10-12。

[23] 「文化生活」という言葉の初出はわかっていないが、この言葉が『少女の友』で初めて登場したのは大正 11（1922）年 8 月の広告である。

8〕の左下に記載されている鉄道路線図のように丸囲みでつながれた枠を図解に取り入れたものである 。化粧法を分かりやすく説明し、「文化生活」を送る「婦人」たちを描くことで、化粧を身近なものとし、「文化生活」を送る未来像を化粧品購買対象の「少女」たちに視覚的に捉えさせたといえる。

それは同時に、B や C のような「小学生」や「幼児」の登場が少なくなっているということである。化粧品広告に登場していた「小学生」や「幼児」は、中山太陽堂が求めた家庭イメージの象徴であったと思われる。しかし、女性の社会進出によって、さまざまな職業の女性が登場したことにより、「小学生」や「幼児」ではなくモダンガールなどの「女性」イメージを配するようになったのではないだろうか。

以上から、A の「女学生」、B の「小学生」、C の「幼児」、D の「女性」と「モダンガール」、そして E の「花嫁」と分類することができる。

さらに、年代順に広告イメージを見ていくと、『少女の友』に広告が掲載され始めた大正 5（1916）年から大正 7（1918）年は浮世絵の美人画のスタイルを踏襲したやや古風な画風で、和装が多く、〔図 16〕のような E の花嫁が毎年どこかで描かれていることと、大正 5（1916）年から大正 9（1920）年までは、毎年３月号には雛祭りが描かれている。これらは花嫁として結婚することを女性の幸福と考える「良妻賢母」思想を反映していたと考えられるが、それ以降はどちらも現れなくなる。

大正 8（1919）年の化粧品広告には、日本髪を結った女性のはめ込み写真が多く使用されているが、同年から昭和 2（1927）年までは、〔図 14〕、〔図 15〕のような D「モダンガール」が多く描かれるようになる。その中でも、大正 10（1921）年から大正 12（1923）年に描かれた女性は髪型、衣装、そして挑発的とも言える大胆なポーズを取る女性であった。この 3 年間は作風が変わっていないため、おそらく同じ画家だと思われるが、その画家については分かっていない[24]。

昭和 3（1928）年と昭和 4（1929）年になると、画風とタイプが大きく変わり、〔図 9〕、〔図 13〕と同じ画家によると思われるフルカラーの写実的な画風で B「小学生」、C「幼児」を多く描いた広告が掲載されるようになる。

このように、中山太陽堂のクラブ化粧品広告には、女学生、小学生、幼児の他にモダンガールや花嫁まで登場している。とりわけ少女が抱くべき未来のセルフイメージとしての「女性」の図像が花嫁からモダンガールに変わっていったということであり、女子教育が掲げた良妻賢母という模範像が、モダンガールという大正デモクラシーを体現する新しい女性像に取って替わられていく点に注目すべきであろう。

---

[24] 現クラブコスメチックスに問い合わせてみたが、大阪空襲によって多くの資料が焼失したため詳細は分からないとのことであった。

3-4 化粧品広告の受け手としての「少女たち」

以上、平尾賛平商店と中山太陽堂の化粧品広告について考察してきた。バージャーによると、「広告とは常に未来の購買者についてのものである。(中略)広告を〈見る人＝購買者〉は、その商品を買えば変わるであろう自分自身の姿をうらやむように仕向けられている。購買者は、その商品によって変身し、他人の羨望の的となった自分の姿を夢見る」[25]ものであり、「何よりもまず、こうした快楽を求める自然な欲望に働きかける。」[26]ものであるという。レート化粧品広告やクラブ化粧品広告の挿絵も『少女の友』の講読者である「少女」たちに、化粧品を使うことで訪れるであろう「未来の理想像」を描いていると考えられる。

明治 41（1908）年から大正 7（1918）年にかけて掲載されたレート化粧品広告には、A の「女学生」、B の「小学生」、C の「幼児」の 3 種類に分けて広告の挿絵が描かれていた。また、大正 5（1916）から昭和 4 (1929)年まで掲載されたクラブ化粧品広告には、A の「女学生」、B の「小学生」、C の「幼児」に加えて D の「成人女性、モダンガール」、E の「花嫁」のグループに分類される人物像が描かれていた。

『少女の友』の読者層は小学高学年から女学生、いわゆる 11 歳から 17 歳ごろであることは先述したとおりである。そのため、化粧品を使う愛らしい「女学生」や「小学生」は、化粧品会社にとっての購買者としての「理想の少女像」を表わしていると考えることができる。しかし、化粧品会社の意図と挿絵画家の表現が常に一致していたかどうかは疑問の余地がある。例えば 3-2 で紹介した渡部文子の描く C「幼児」を描いている化粧品広告である。文子の画風が「愛らしい、下がり目の子ども」であったため、化粧品広告にも愛らしい幼児が多く描かれたと考えられる。その結果、化粧品広告のテクストは化粧品の効能を示していながら、挿絵には本来化粧品を使用しない年齢の子どもが描かれ、化粧品会社と挿絵画家との間に齟齬が生じていた可能性もあるだろう。

両社の化粧品広告に描かれる女学生や小学生は、女子教育にとってのが理想像だけでなく、「少女」同士のカップリングなど、「少女幻想共同体」における「少女」の欲望を刺激するものとなっていた。それは、「少女幻想共同体」の存在を嗅ぎ取った鋭敏な画家がそれを反映させたもの考えることもできる。それは「理想の少女像」ではなく、「少女たちの理想像」を描いたと言えよう。

また、『少女の友』掲載初期のクラブ化粧品広告に描かれた E の「花嫁」は「良妻賢母」を如実に反映して居るのに対して、D の「モダンガール」はその対極に位置していたといえよう。大正 10（1921）年以降に顕著に登場したモダンガールは、当時進歩的で、不良というネガティブな見方があり、「良妻賢母」像からはかけ離れていた。そのような女性たちの図像を広告に用いたのはなぜなのだろうか。

社会学者の北田暁大は当時の広告について次のように述べる。

---

[25] バージャー1986、前掲書、pp.164-166。

[26] 同上書、p.163。

一九二〇年代以降、私的な経済領域たる「家庭」において消費の主体として画定されるにいたった女性は、その消費主体＝「買い手」としても、書物・雑誌の「読み手」としても、そしてまた広告の「受け手」としても、すべからく、つねに「不可解」なものとして道徳的言説の非難の的となると同時に、それをモダンなるものの象徴として称揚する好奇のまなざしの対象ともなっていったのである。この「買い手／読み手／受け手」の三つの問題系が絡みあう微妙な、それでいて明白な政治性に彩られた地点に、婦人雑誌における広告、「融通する広告」は位置していたのだ。[27]

女子教育の立場から教育者や美容家から少女に与えられた化粧法や化粧観と、情報少女雑誌の掲載された化粧品会社の広告の違いは、後者が「少女」を化粧品の買い手、少女雑誌の読み手、そして広告の受け手という複雑な存在であることを浮かび挙がらせていることにある。本論では前章まで、「女学生」や「少女」という女子教育の受動的な受け手に対して向けられていた教育という方向を論じてきた。だが、本章で化粧品広告のイメージとテクストを詳細に検討することで、消費の欲望の買い手として、少女雑誌の読み手としての主体的な存在は、学校教育としては好ましくない風潮すらも時代の流行として感じ取る広告の受け手としても、複雑で未知の力をうちに秘めた主体的存在としての「少女たち」の片鱗が浮かびあがるのである。

[27] 北田暁大『広告の誕生―近代メディア文化の歴史社会学』岩波書店、2008 年、p.177。

終章　本論の総括

現代の女子中高生の化粧はあまり好ましく思われていないが、近代的な中等女子教育機関として明治 30 年代に設立され、第二次世界大戦後の制度改正まで存続していた高等女学校では化粧が容認されていただけでなく、むしろ化粧の是非や化粧方法が教育に含まれていたのはなぜか。このような素朴な疑問に端を発した本論は、まず化粧文化研究の視点から、近世から昭和初期までの文献、すなわち若い女性に向けて書かれた化粧についての書物、高等女学校の教科書、教育論、美容院や化粧品会社に関する資料、少女雑誌等々を史料として、当時の化粧はどのようなもので、どのように説明されていたかの調査から始めた。次に「少女」を近代国家による教育制度や近代の産業と文化の中で生まれた概念とする少女文化研究の視点から、本来、家庭の中で行われる身体行為であり、母から娘へと教えられてきた日常的な化粧を公的な学校教育において教えることの特異さに注目し、そのような化粧教育にはどのような役割が課されていたのか、そしてそこにはどのような理由や説明が成立していたのかについて考察を行った。そして高等女学校という教育機関だけでなく、美容家による美容院や一般読者に向けられた書籍や雑誌の存在や、化粧品会社の販売促進活動などとも緩やかに結びつきながら、化粧についての情報と化粧品が少女を取り巻いていた当時の状況の一側面を明らかにした。以下、章ごとに改めて本論が明らかにしたことと今後の課題をまとめる。

まず、第 1 章では、明治に先立つ江戸中期の化粧文化を知るために若い女性向けて書かれた化粧についての書物、女子用往来と化粧書の考察を行なった。従来の化粧文化研究では女子用往来について詳しく言及しているものは少ないが、本論では化粧や身体に関することが書かれている『和俗童子訓　巻之五　教女子法』、『女重宝記』に着目し、理想の女性像と結びつけられて化粧がどのように記述されているかを確認した。すなわち女子用往来における理想の女性像とは、「親孝行し、嫁いだあとは舅姑に仕え、夫に貞操を守り、使用人を思いやる心」をもち、「自分の身体を清潔に保ち、髪型を整え、化粧を怠らない」ものであった。

このような女子用往来の化粧観を具体化したのが化粧書であると言える。その中でも、特にロングセラーとなった『都風俗化粧伝』は、肌を整えるスキンケア法、白粉を塗るベースメイク法、紅をひくポイントメイク法まで書かれた実用書であった。さらに、顔型に合った化粧の仕方や髪型から帯の結び方、着物の選び方など顔だけでなく、身体全体のケアやファッションにまで及んで。また、女子用往来に即して化粧をする心得を説き、毎朝早く鏡に向かって化粧を行なうことは自身の心を見つめ直すためのものであり、いかに化粧をして外見を美しくしても、内面も美しくなければ意味がないことが繰り返し述べられている。

現在「化粧」という言葉は、顔を美しく見せるためのメイクアップや、さらには器物の

表面に施される彩色や仕上げを意味するのに対して、近世の化粧とは自身の身体全体を清潔で美しく保つだけでなく、それが身近な人々に対する礼儀や思いやりであり、さらに鏡を見ることでそのような女性としての徳に照らして自己を省みる契機であったことが明らかになった。しかしながら、本論で取り上げた女子用往来や化粧書は江戸で出版されたものに限られており、儒教的要素が強いのは幕府の影響が大きいためとも考えられる[1]。今後は他の往来物や上方など異なる文化圏の化粧文化を記した化粧書についても考察し、近世の化粧文化についてより視野を広げて論じる必要がある。

第 2 章では、明治になって国家によって急速に近代化が推し進められる中で、国民の健康のために西洋から衛生概念が導入され、同時に女性に対して求められた「良妻賢母」のとりわけ母となることの重要性が、化粧にどのように反映されたかを論じた。そして、女性に求められた「母としての身体」と、母となるための前提条件である結婚に向けて「異性を惹きつける身体」という二分化を回避するために、衛生概念と美容を結び付けた「健康美」が提唱されることとなる。このような衛生概念や健康美を普及させたのが美容家である。美容家の始祖の一人である遠藤波津子は、富裕層の女性を顧客とし、西洋の化粧品や美容法を取り入れた美顔術を施す美容院を開いただけでなく、一般女性に向けて二冊の著書を刊行して新時代の化粧法を世に広めた。その中で、遠藤は皮膚構造の仕組みや日焼けの原理、睡眠の重要性など科学的な説明を交え、スキンケアにおいて西洋の技術を取り入れた化粧品とその使用方法を事細かに解説しつつ、化粧の心得についても説いている。その心得は、近世の女子用往来や化粧書と連続するものであった。

ここでは、化粧文化研究において存在は知られているものの、その詳細についてはあまり明らかにされていなかった美容家について考察し、近代の化粧書と近世の化粧書との相違点と類似点を挙げることができた。しかしながら、明治 30 年代以降、美容家は多く登場している。本論では美容院を経営し、化粧品を販売し、化粧書を書いた遠藤波津子について取り上げたが、その他に教育者と深く関わった美容家もいる[2]。そのため、美容家による女子教育への関与について、今後詳しく調査する必要がある。

第 3 章では、母から娘へという家庭教育で伝えられていた身だしなみとしての化粧が、公的な学校教育の中で扱われたことに着目し、高等女学校における化粧教育について考察した。「良妻賢母」を理想像とした女子教育の中で、最も重視されたのが道徳教育である「修身」である。本論では、明治 36（1903）年に刊行されて以降、訂正をくり返しながら刊行され続けた井上哲次郎の編による修身の教科書を取り上げ考察した。

その中では、衛生を重んじて健康な母となるように心掛けること、人に対する礼儀として容儀を整えることなどが述べられ、「健康で、容儀を整えた上品で優美な女性」となるた

---

[1] 鈴木則子氏より数々の貴重な御指摘を頂戴した。

[2] この頃の美容家として藤波芙蓉などが挙げられる。藤波の詳細については、鈴木則子「近代日本コスメトロジーの普及と展開をめぐる一考察 ： 美容家・藤波芙蓉の分析を通じて」『Cosmetology：Annual report of cosmetology』21、2013 年、pp.128-131 を参照いただきたい。

めには内面を磨くことが重要であるとされていた。そして、内面を磨くことによって、外見もまた磨かれるというロジックを作り上げたのである。だが、外見が悪いということは、内面を磨いていないことにつながり、外見だけでなく内面に対しても問題視されてしまうという負の連鎖ができあがってしまうこととなってしまう。そうした負の連鎖を軽減する役割を担ったのが化粧であったと考えられる。

内面を磨くことを重視した修身とともに、女子教育では「美育」という教育概念も西洋から導入された。明治 10 年代から明治 20 年代に紹介された美育は、美を鑑賞する能力と美術作品を制作する能力の養成を目的としてものであったが、明治 30 年代には、人間性の育成に必要な情操教育としての美育論が紹介される。さらに明治 40 年代には、体育によって女学生の身体を健全にし、かつ女学生の身体の美を完成させるという、美しい身体の育成を目標とする美育論がもたらされたのである。

明治期には女学校を創設する女性教育者の活躍もあった。本論では、三輪田眞佐子と下田歌子という二人の教育者に着目し、その教育論における化粧の位置づけを確認した。

三輪田眞佐子は三輪田女学校を創設し、良妻賢母教育を行なった人物である。徳育、知育、体育という女子教育の「三位一体」に美育を加えることを提唱し、体育は体操によって女子の姿勢を端麗にすることで美育の一端となると述べた。この提唱があったことにより、西洋の美育論を受け入れる素地ができていたといえよう。このことは、これまでの女子教育論では言及されておらず、本論で得た知見の一つといえるだろう。また、具体的な化粧法についても、白粉を厚く塗りすぎるのは皮膚の健康を害し、衣服も汚す可能性があるため、白粉の量を少なくするよう注意している。見方を変えるならば、健康を害する可能性があるにも関わらず、容貌を向上させるための風習として化粧を認めていたといえよう。下田歌子は実践女学校および女子工芸学校を開設し、やはり良妻賢母を基調とした実学実践の教育を行なった。著書の中で、身だしなみは他人に失礼が無いようにするために行なうものであり、虚飾は自分を美しく見せるために派手な装いをするものと述べている。また、女学生は皮膚をよく洗ったうえで白粉をつけるならば無鉛のものを薄くなるように等の具体的な化粧法を指示していた。

以上のように、第 3 章では、女子教育に関わる教育者たちが、化粧を前近代からの身だしなみとして踏襲し、節度を求めながらも女学生の化粧を認めていたことが明らかにすることができた。さらに、雑誌メディアを通して、直接、女学生たちに水白粉を使って化粧をすることや、鉛白粉の中毒被害などの注意を語りかけており、女子教育者の化粧についての言質を明らかにすることができたことは、女子教育における化粧の役割を明らかにする本論の目的の成果といえる。

第 4 章では、明治期に設立した主要な化粧品会社である資生堂、平尾賛平商店（1954 年廃業）、中山太陽堂（現クラブコスメチックス）が発売した化粧品、販売経路、宣伝方法について、それぞれの社史や当時の化粧品産業に関連した資料から調査した。資生堂と平尾賛平商店に関しては社史を中心に、中山太陽堂（現クラブコスメチックス）については社

史、展覧会図録を調査し、さらに大阪にある本社への聞き取り調査を行なった。

また、各社が発売した化粧品の数を年別に分け、本論で取り上げた化粧に関する著書や雑誌記事などと照らし合わせた。その結果、社史と女子教育関連の文献という限られた情報ではあるが、タイプ別の化粧品の発売と女子教育における化粧についての出版時期に一定の重なりを見出すことができた。

さらに、化粧品会社も商品開発やマーケティング戦略を練る上で、「少女」という一定の購買者層の需要を配慮し、彼女たちに大きな影響力を持つ学校や教育者の化粧観に敏感であったのではないかと思われる。その例として挙げられるのが、平尾賛平商店が行なった宣伝方法のひとつの試供品の頒布である。その頒布先に女学校が入っており、それは購買対象として「少女」たちが含まれていたこと、そして女学校での頒布の許可を得ていたということになり、化粧品会社の経営戦略と女子教育の関係性の一端を示すことができた。

このように、第 4 章では、3 社が発売した化粧品の発売と女子教育との繋がりを見出すことができたといえる。しかし、本論で取り上げた化粧品会社の他にも、桃谷順天館などの化粧品会社は存在しており、これらの化粧品会社の商品やマーケティングについて調べることは今後の課題である。また、本論では社史と女子教育関連の文献から考察したが、化粧品の原料の調達経路や価格変動など化学製品の歴史との関係性は文献資料の欠如により述べることができなかった。さらに、化粧品のパッケージのデザインなど、化粧品の形態、その変化について近世の化粧品との比較も明らかにすることができなかったため、今後の課題としたい。

第 5 章では、まず少女雑誌という少女向けマスメディアが「少女」の形成にいかに重要であったかを示した。そして、『少女の友』に掲載されていた平尾賛平商店のレート化粧品と中山太陽堂のクラブ化粧品の雑誌広告における人物像を分析することで、成人から幼児まで多様な「少女」の存在を確認した。さらに両社の化粧品広告を年代順に分けると、花嫁や雛祭りという「良妻賢母」が「少女」の理想像として描かれていたのに対し、やがてモダンガールという「良妻賢母」から逸脱した新しい女性の理想像が生み出されていくことを明らかにすることができた。また、化粧品広告にはペアの少女像や女学生ことばによる会話文によって「少女幻想共同体」という「少女」にとっての理想的な関係も描かれていたことを見出した。「少女幻想共同体」は「少女」たちに許されたコミュニティーである。そこには、「良妻賢母」という求められた未来像はなく、「大人になりたくない」という「少女」たちの願望や欲望が描かれていたといえよう。

本論は、「少女の化粧」を近代の化粧文化研究と少女文化研究を接合するものとして考察するために、近世の女子用往来、化粧書、近代の女子教育、美容家、化粧品会社などを研究対象とし、歴史学、身体論、ジェンダーの社会学、視覚文化論などの視点から学際的なアプローチを試みた。そして、女子教育における「化粧」の役割と、「少女」の新たな一面を明らかにすることができ、化粧文化研究と少女文化研究の両者において基礎資料となることができたといえる。しかしながら、化粧をする主体である「少女」の視点はわずかに

「少女幻想共同体」に触れただけであった。

現代の女子中高生への教育に立ち戻れば、そこでは本論で見て来たような近代の女子教育のような化粧教育が行われていない。それは良妻賢母主義からの解放であるが、その一方で近世から受け継がれてきた化粧という身だしなみを通じた女性の徳への認識が薄らいでしまったことは、少女が身体的にそして精神的にも成熟するための日々の中の契機を喪失してしまったともいえよう。ただし、化粧に対する「少女」たちの好奇心や化粧品への欲望が絶えることはない。化粧を介した自らの身体の認識は、ますます複雑化している少女のコミュニティーの中で他者との関係を取り結ぶツールとして増幅されながら受け継がれていると筆者は確信している。今後は、近代の「少女の化粧」と現代の「少女の化粧」との連続性についても、より深く論じていきたい。

〔参考文献〕

赤木里香子「明治後期における児童の発見と美的教育論の形成―「趣味」と「芸術」のあいだに―」、『アート　エデュケーション』No.26、建帛社、1996 年
明尾圭造「阪神間モダニズムと女性」芦屋市立美術博物館編『モダニズムを生きる女性～阪神間の化粧文化～』、2002 年、pp.4-7
朝尾直弘、石井進、早川庄八、網野善彦、鹿野政直、安丸良夫編『岩波講座 日本通史<第 18 巻>　近代 3』、岩波書店、1994 年
芦屋市立美術博物館編『モダニズムを生きる女性～阪神間の化粧文化～』、芦屋市立美術博物館、2002 年
足立眞理子「奢侈と資本とモダンガール：資生堂と香料入り石鹸」『ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』9、2006 年、pp.19-38
阿部恒之『ストレスと化粧の社会生理心理学』、フレグランスジャーナル社、2002 年
アブドゥル・ラザック、シティ・ハジャ「ファッション雑誌の化粧品広告におけるオノマトペについて」『人間文化創成科学論叢』16 号、2014 年、pp.77-85
安東由則「身体管理と「国民」形成―近代学校への「衛生」の導入をめぐって―」『武庫川女子大紀要（人文・社会科学）』51 号、2003 年、pp.99-109
飯野智子「『望ましい身体』とジェンダー―ダイエットと美容医療の捉える身体―」『実践女子大学人間社会学部紀要』第 3 集、2007 年、pp.153-165
池田鉄作『化粧品学』南山堂、1957 年
石井慎一郎「日本の教育思想とニーチェ―美育あるいは芸術教育について―」、筑波大学外国語センター『外国語教育論集』第 26 号、2004 年、pp.11-20
石上七鞘『化粧の民俗』、おうふう、1999 年
石川謙『女子用往来物分類目録：江戸時代に於ける女子用初等教科書の発達』、講談社、1946 年
石川弘義・尾崎秀樹『出版広告の歴史　一八九五年……一九四一年』、出版ニュース社、1989 年
石川松太郎編『日本教科書大系　往来編 第 15 巻　女子用』、講談社、1973 年
―――『女大学集』、平凡社、1977 年
―――監修『往来物大系』第 86 巻、大空社、1994 年
石田あゆう「大正期婦人雑誌読者にみる女性的読書形態―『主婦之友』にみる読者層」、京都社会学年報編集委員会編『京都社会学年報 第 6 号』、1998 年
―――「一九三一年～一九四五年化粧品広告にみる女性美の変遷」『マス・コミュニケーション研究』65、2004 年、pp.62-78
―――「化粧品広告メディアとしての「戦時婦人雑誌」」、長野ひろ子、松本悠子編『ジェ

ンダー史叢書　第 6 巻　経済と消費社会』、明石書店、2009 年、pp.188-206
石田かおり『化粧せずには生きられない人間の歴史』、講談社、2000 年
———『化粧と人間——規格化された身体からの脱出』、法政大学出版局、2009 年
石塚猪男『婦女かがみ』、文廼舎、1901 年
石丸久美子「日仏化粧品広告の比較研究:ディスクール分析の観点から」平成 18 年度大阪大学大学院博士論文、2006 年
井田泰人『大手化粧品メーカーの経営史的研究』晃洋書房、2012 年
板橋晶子「戦時下における化粧と「女らしさ」—第二次世界大戦期アメリカの化粧品広告が描いた女性像—」『ジェンダー史学』Vol.5、2009 年、pp.81-93
伊藤るり・坂元ひろ子・バーロウ、タニ編『モダンガールと植民地的近代——東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』、岩波書店、2010 年
稲垣恭子『女学校と女学生』、中公新書、2007 年
井上五郎『此の人を見よ』冨士書房、1938 年
井上章一『美人論』、朝日新聞社、1995 年
———『近代日本のセクシュアリティ 23　アンソロジー「美人論」の変遷』、ゆまに書房、2007 年
井上哲次郎『女子修身教科書』第一巻～第四巻、金港堂、1903 年 a
———『女子修身教科書』（改訂再版）第二巻、金港堂、1903 年 b
———『訂正女子修身教科書』第一巻、金港堂、1906 年
———『再訂女子修身教科書』（訂正六版）第四巻、金港堂、1910 年
———『新編女子修身教科書』第三巻、金港堂、1912 年
今田絵里香「少女雑誌にみる近代少女像の変遷—『少女の友』分析から—」『北海道大学大学院教育学研究科紀要　第 82 号』、2000 年、pp.121-164
———『「少女」の社会史』、勁草書房、2007 年
今成弘『日本の美顔術・全身美容の始祖　芝山兼太郎伝』、女性モード社、1986 年
岩見照代『ヒロインたちの百年——文学・メディア・社会における女性像の変遷』學藝書林、2008 年
岩本茂樹「戦後日本におけるアメリカニゼーション—JACK AND BETTY を通して—」『関西学院大学社会学部紀要』83、1999 年、pp.99-111
ヴィガレロ、ジョルジュ『美人の歴史』（後平澪子訳）、藤原書店、2012 年
上野政吉『実用家庭顧問』、啓文社、1918 年
ウテナ編『花の歳月—ウテナ文化史・70 年—』、1997 年
越後純子「『婦女鑑』の研究：徳目構成と例話内容の分析を通して」『人間文化創成科学論叢』13、2010 年、pp.209-216
江馬務『江馬務著作集第四巻　装身と化粧』、中央公論社、1976 年
江森一郎監修『江戸時代女性生活絵図大事典　第 6 巻』、大空社、1994 年

———監修『江戸時代女性生活研究（江戸時代女性生活絵図大事典　別巻）』、大空社、1994年
遠藤波津子『化粧と着付』阿蘭陀書房、1918年
———『遠藤波津子の世界　婚礼衣装』婦人画報社　1985年
———『復刻版　正しい化粧と着付』女性モード社、1997年
及川益夫『大正のカルチャービジネス　絵画通信教育と広告イラスト』皓星社、2008年
大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典　第二巻』、1993年
大塚英志編『少女雑誌論』、東京書籍、1991年
織田久『広告百年史　大正・昭和』、世界思想社、1976年
———『広告百年史　明治』、世界思想社、1976年
越智泰雄「『婦人雑誌』の表紙から時代の意識の変遷を考証する（ビジュアル・レポート）（『価値観多様化』の研究）」、総合研究開発機構編『NIRA政策研究 5』、1992年
小野芳朗『「清潔」の近代：「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ』、講談社、1997年
海後宗臣等編『日本教科書大系 近代編 第三巻(修身 第三)』、講談社、1962年
貝原益軒著、石川兼校訂『養生訓・和俗童子訓』、岩波書店、1961年
香川せつ子・河村貞枝編『叢書・比較教育社会史　女性と高等教育―機会拡張と社会的相克』、昭和堂、2008年
勝田重太郎「第十講　化粧品と広告」日本電報通信社編『広告研究　昭和 14 年版』1939年、pp.155-175
金崎充代「近世女子用往来に見る産育―「憧れ」としての往来物」『教育学論集』22号、1996年、pp.18-27
唐澤富太郎『女子学生の歴史』、木耳社、1979年
川村邦光『オトメの祈り―近代女性イメージの誕生―』、紀伊国屋書店　1993年
———『オトメの身体―女の近代とセクシュアリティ―』、紀伊国屋書店、1994年
———『オトメの行方―近代女性の表象と闘い』、紀伊国屋書店、2003年
岸文和『絵画行為論―浮世絵のプラグマティクス』、醍醐書房、2008年
北田暁大『広告の誕生―近代メディア文化の歴史社会学』、岩波書店、2008年
木村絵里子「『女学世界』における女性美のディスコース：1901 年～1925 年の広告分析から」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第19号、2013年、pp. 17-35
木村涼子「婦人雑誌にみる新しい女性像の登場とその変容―大正デモクラシーから敗戦まで」『教育学研究』56（4）、1989年、pp.331-341
———「婦人雑誌の情報空間と女性大衆読者層の成立―近代日本における主婦役割の形成との関連で―」『思想』812号、1992年、pp.231-252
———『<主婦>の誕生　婦人雑誌と女性たちの近代』、吉川弘文館、2010年
姜華「修身教科書に見る良妻賢母教育の実際とその特質―明治後期を中心にして―」『早稲田教育評論』25(1)、2011年、pp.89-106

久下司『化粧（ものと人間の文化史 4)』、法政大学出版局、1970 年
久保内加菜「女子教育の構成に関する歴史研究(その一)」『山脇学園短期大学紀要』42 号、2004 年
久米依子『「少女小説」の生成　ジェンダー・ポリティクスの世紀』、青弓社、2013 年
蔵澄祐子「近代女子道徳教育の歴史：良妻賢母と女子特性論という二つの位相」『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室紀要』34 号、2008 年、pp.49-57
クラブコスメチックス編『百花繚乱　クラブコスメチックス百年史』、2003 年
栗山茂久他『近代日本の身体感覚』、青弓社、2004 年
黒岩比佐子『明治のお嬢さま』、角川学芸出版、2008 年
小泉吉永『女子用往来』第 86 巻、大空社、1994 年
———『女子用往来刊本総目録』、大空社、1996 年
———「往来物における絵図資料の活用について」(教育史学会第 46 回大会コロキウム要旨)、2002 年<http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/E_2002_10.htm> 2016 年 3 月 24 日閲覧.
小出治都子「女性美の近代化―化粧と美容の観点から―」立命館大学大学院先端総合学術研究科二〇〇七年度博士予備論文、2008 年
———「化粧する「少女」--レート化粧品の販売戦略」『大正イマジュリィ』4、2008 年、pp.112-129
———「高等女学校の美育からみる「少女」と化粧の関係」『Core ethics』vol.7、2011 年、pp. 99-107
———「概念と実践からみる近代日本の美育」『Core ethics』vol.7、2011 年、pp.345-353
———「少女雑誌から見る化粧品広告　『少女の友』と中山太陽堂」『デザイン理論』57、2011 年 pp.122-123
———「「少女」の化粧　近代および現代の化粧文化からの一考察」『Cosmetology：Annual report of cosmetology』20、2012 年、pp.142-147
———「戦中期における少女の化粧　－『少女の友』からの一考察」『生存学研究センター報告』 17、2012 年、pp.242-262
———「化粧する女学生の誕生過程」(特集 1 「教育の境界、境界の教育」)『生存学　生きて在るを学ぶ』6、2013 年、pp.160-173
小出治都子・斎藤進也・稲葉光行「化粧文化の様相 ： コンピュータによる化粧品雑誌広告の可視化と分析」『アート・リサーチ』13、2013 年、pp.17-35
高等女学校研究会『高等女学校資料集成』第一〇巻、大空社、1989 年
国分操子『日用宝鑑貴女の栞』、大倉書店、1895 年
———『日用寶鑑貴女の栞』、大倉書店、1897 年
———『家庭日用婦女宝鑑』、大倉書店、1912 年
コーソン、リチャード『メークアップの歴史 ： 西洋化粧文化の流れ』(ポーラ文化研究所訳)、ポーラ文化研究所、1982 年

小西重直『学校教育』、博文館、1908 年
小針誠『教育と子どもの社会史』、ブライト社、2007 年
コムペーレ、ガブリエル著、ペーン、ダブルユー・エッチ訳注『教授論(根氏)　第二冊』（能勢栄重訳）、金港堂、1892 年
小山静子『良妻賢母という規範』、勁草書房、1991 年
佐伯順子『明治「美人」論：メディアは女性をどう変えたか』、NHK 出版、2012 年
佐藤(佐久間)りか「<少女>読者の誕生――性・年齢カテゴリーの近代」『メディア史研究』VOL.19、2005 年、pp.17-41
佐山半七丸著・速水春暁斎画図『都風俗化粧伝』（1813 年）,"早稲田大学古典籍総合データベース",< http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/wo06/wo06_01520/ >2016 年 3 月 24 日閲覧.
鹿野政直『健康観にみる近代』、朝日新聞社、2001 年
資生堂編『資生堂百年史』、1972 年
―――編『資生堂宣伝史Ⅰ　歴史』、1979 年
資生堂企業資料館『復刻版「化粧眉作口伝」「都風俗化粧伝」「容顔美艶考」』、2000 年
―――編『研究紀要おいでるみん　化粧文化特集号　日本の化粧文化―明治維新から平成まで―』、2002 年
―――編『日本の化粧文化：化粧と美意識』、2007 年
資生堂総合美容研究所企画編集『資生堂の美容。きのう、きょう、あす』、1978 年
実業之日本社編『婦人世界第二巻第五号臨時創刊　化粧かがみ』、1907 年 4 月
―――編『少女の友』1 巻－48 巻、1908 年－1955 年
―――編『『少女の友』創刊 100 周年記念号　明治・大正・昭和ベストセレクション』、2009 年
実践女子学園八十年史編纂委員会編『実践女子学園八十年史』、1981 年
下田歌子『家庭教育　泰西所見』、博文館、1901 年
―――『女子のつとめ』、成美堂、1902 年
―――『婦人常識の養成』、実業之日本社、1910 年
―――「女の身だしなみ」『少女の友』、実業之日本社、1916 年 10 月、p.54-p.55
―――「精神の美と容貌の美」『少女の友』、実業之日本社、1917 年 4 月、p.56-p.57
下中直也『哲学事典』、平凡社、1971 年
週刊朝日編『値段の風俗史　明治・大正・昭和』、1988 年
主婦の友社社史編纂委員会編『主婦の友社八十年史』、1996 年
女性史総合研究会編『日本女性生活史 ④近代』、東京大学出版会、1990 年
―――編『日本女性生活史 ⑤現代』、東京大学出版会、1990 年
ジョホノット、ゼームス『教育新論　巻之三』（高嶺秀夫訳）、東京茗渓会、1886 年
シラー、フリードリッヒ『美的教育論』（浜田正秀訳）、玉川大学出版部、1982 年

白木荘文『重寶文庫』、家政協会、1913 年
新村拓『健康の社会史　養生、衛生から健康増進へ』、法政大学出版局、2006 年
陶智子『不美人論』、平凡社、2002 年
———『江戸美人の化粧術』、講談社、2005 年
鈴木則子「江戸時代の化粧と医療——『容顔美艶考』と『都風俗化粧伝』の分析を中心に」(日本歯科医史学会第 30 回[平成 14 年度]学術大会一般演題抄録)『日本歯科医史学会会誌』24(4)、2002 年、p.290
———「日本の化粧意識の近代化をめぐる比較史的考察——清潔習慣の展開をめぐって」『コスメトロジー研究報告 11』、2003 年 a、pp.95-98
———「江戸時代の化粧と美容意識」女性史総合研究会『女性史学』第 13 号、2003 年 b、pp.1-17
———「『女学雑誌』にみる明治期『理想佳人』像をめぐって」栗山茂久他『近代日本の身体感覚』青弓社、2004 年、pp.137-162
———「近代日本コスメトロジーの普及と展開をめぐる一考察：美容家・藤波芙蓉の分析を通じて」『Cosmetology：Annual report of cosmetology』21、2013 年、pp.128-131
———編『歴史における周縁と共生：女性・穢れ・衛生』、思文閣出版、2014 年
スミス、ヴァージニア『清潔の歴史　美・健康・衛生』(鈴木実佳訳)、東洋書林、2010 年
ラコフ、ロビン・T、シェール、ラクェル・L、『フェイス・ヴァリュー：美の政治学』(南博訳)、ポーラ文化研究所、1988 年
臧薇「日中米雑誌化粧品広告ディスコースの対照研究」平成 26 年度九州大学大学院博士論文、2014 年
大日本家政学会編『家政要鑑』、大日本家政学会、1907 年
大日本雄弁会編『婦人出世の礎』(『婦人倶楽部』新年号附録)、1925 年
大坊郁夫編『化粧行動の社会心理学：化粧する人間のこころと行動　シリーズ 21 世紀の社会心理学 9』、北大路書房、2001 年
高井蘭山『女重宝記』5 巻（刊年不明)、"国立国会図書館デジタルコレクション" <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/993503>　2016 年 3 月 24 日閲覧
高野義夫『明治大正産業史　第 3 巻　—明治大正史シリーズ—』、日本図書センター、2004 年（底本：野依秀市編『明治大正史』第八巻[産業編]、実業之日本社、1929 年）
高橋晴子『近代日本の身装文化　「身体と装い」の文化変容』、三元社、2005 年
———『年表　近代日本の身装文化』、三元社、2007 年
高橋雅夫「浮世絵に見る化粧」『化粧文化』第一号、ポーラ文化研究所、1979 年、pp.5-18
———校注『都風俗化粧伝』、平凡社、1982 年
———『化粧ものがたり　赤・白・黒の世界』、雄山閣出版、1997 年
瀧澤利行『近代日本養生論・衛生論集成　第 16 巻』、大空社、1993 年
———『近代日本養生論・衛生論集成　別巻　近代日本健康思想の成立』、大空社、1993

年
―――『健康文化論』、大修館書店、1998 年
田口喜久恵『近代教育黎明期における健康教育の研究―教育と医学の融合による健康教育の始まり―』、風間書房、2010 年
竹内幸絵『近代広告の誕生: ポスターがニューメディアだった頃』、青土社、2011 年
棚橋絢子「少女と身だしなみ」『少女の友』、実業之日本社、1912 年 9 月、pp.19 - 20
谷釜了正「衛生及び衛生学:近代日本の体育史を読み解くキーワード」『体育學研究』50(5)、2005 年、pp.525-532
谷田有史・村田孝子監修『江戸時代の流行と美意識 ： 装いの文化史』、三樹書房、2015 年
谷本奈穂「化粧品広告における身体のイメージ ： 美の問題を中心に」平成 13 年度大阪大学大学院博士論文、2001 年
―――『美容整形と化粧の社会学 ： プラスティックな身体』、新曜社、2008 年
―――「美容における科学言説」『情報研究 ： 関西大学総合情報学部紀要』34 号、2011 年、pp.39-52
ダヌタン、エリアノーラ・メアリー『ベルギー公使夫人の明治日記』（長岡祥三訳）、中央公論社、1992 年
玉置育子「近代的化粧の形成 ： 美容家の提唱から」『デザイン理論』42、2003 年、pp. 112-113
玉置育子・横川公子「化粧文化史の変遷と流行した化粧の受け入れ方についての研究」、コスメトロジー研究振興財団『コスメトロジー研究報告 11』、2003 年、pp. 83-94
――――――「雑誌『主婦の友』の記事“美容相談"から見る美容への関心」、『武庫川女子大学 生活美学研究所紀要 第 18 号』、2008 年、pp.56-67
忠誠堂編『家庭宝鑑　日常の心得』、1919 年
坪谷善四郎『日本女礼式大全』、博文館、1897 年
寺出浩司『生活文化論への招待』、弘文堂、1994 年
富永健一『日本の近代化と社会変動―テュービンゲン講義』、講談社、1990 年
戸矢理衣奈『銀座と資生堂 ： 日本を「モダーン」にした会社』、新潮社、2012 年
長友千代治校註『女重宝記男重宝記－元禄若者心得集』、社会思想社、1993 年
中野正昭「文芸協会と中山太陽堂　タイアップする明治・大正の新文化」早稲田大学坪内博士紀念演劇博物館『文部科学省　私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア推進事業「日欧・日亜比較演劇総合研究プロジェクト」成果報告集』、2008 年、pp.11-23
永嶺重敏『雑誌と読者の近代』、日本エディタースクール出版部、1997 年
並木孝信『BEAUTY LEGEND’S STORIES　近代美容の歴史を彩った先人たち』、女性モード社、2015 年
成田龍一「衛生意識の定着と「美のくさり」―1920 年代、女性の身体をめぐる一局面」『日本史研究』366 号、1993 年、pp.64-89
成瀬仁蔵『女子教育』、青木高山堂、1896 年

西田正秋『顔の形の美しさ―人体美学の研究より―』、青娥書房、2007 年
日本化粧品技術者会編『化粧品事典』、丸善、2003 年
日本化粧品工業連合会編『化粧品工業 120 年の歩み』、1995 年
―――編『化粧品工業 120 年の歩み　資料編』、1995 年
日本美容医学研究会編『日本美容外科学会誌』no.1－Volume 51 No.2、1979 年－2015 年
日本理容美容教育センター編『美容現代史』、1945 年
芳賀登他編『日本人物情報体系 第 7 巻』、皓星社、1999 年
硲夕記「アジア・太平洋戦争期の『少女の友』―読者投稿欄の分析を中心に―」『大阪人権博物館紀要』9、2006 年、pp.125-39
パケ、ドミニク『美女の歴史: 美容術と化粧術の 5000 年史』（石井美樹子監修・木村恵一訳）、創元社、1999 年
バーシャー、ジョン『イメージ Ways of Seeing―視覚とメディア』（伊藤俊治訳）、パルコ出版、1986 年
長谷川時雨『新編　近代美人伝(上)』、岩波書店、1985 年
―――『新編　近代美人伝(下)』、岩波書店、1985 年
花咲一男「坂本氏・仙女香図説」『化粧文化』第四号、ポーラ文化研究所編、1981 年、pp.35-48
埴原和郎『日本人の顔 ： 小顔・美人顔は進化なのか 』、講談社、1999 年
浜崎廣『女性誌の源流―女の雑誌、かく生まれ、かく競い、かく死せり―』、出版ニュース社、2004 年
原克『美女と機械　健康と美の大衆文化史』、河出書房新社、2010 年
坂東眞理子『女性の品格：装いから生き方まで』、PHP 研究所、2006 年
樋口清之『化粧の文化史』、国際商業出版、1982 年
平石典子「「女学生神話」の誕生を巡って」『人文論叢 ：三重大学人文学部文化学科研究紀要』18 号、2001 年、pp.33-50
平尾賛平商店編『平尾賛平商店五十年史』、1929 年
平野隆「戦前期日本におけるチェーンストアの初期的発展と限界」『三田商学研究 Vol.50,No.6』、2008 年、pp.173-189
平松隆円『化粧にみる日本文化―だれのためによそおうのか？―』、水曜社、2009 年
深谷昌志『良妻賢母主義の教育』、黎明書房、1966 年
藤井治枝『主婦―再出発への設計図』、ミネルヴァ書房、1984 年
藤懸静也『増訂浮世絵』、雄山閣、1946 年
藤波芙蓉『新式化粧法』、博文館、1910 年
―――『あはせ鏡最新化粧美容術』、実業之日本社、1911 年
―――『家庭文庫　新美装法』、婦人文庫刊行会、1916 年
―――『美粧』、東京社、1916 年
藤本恵「戦時下の少女小説―敵対者の消滅」、菅聡子編『<少女小説>ワンダーランド―明治

から平成まで』、明治書院、2008 年、pp.58-65
婦人画報社編『ファッションと風俗の 70 年』、婦人画報社、1975 年
文宣景「化粧品と化粧行動の学際的研究」平成 26 年度大阪大学大学院博士論文、2015 年
宝月理恵『近代日本における衛生の展開と受容』、東信堂、2010 年
ポーラ文化研究所編『化粧文化』no.1－no.45、ポーラ文化研究所、1979 年－2005 年
―――編『モダン化粧史：粧いの 80 年』、ポーラ文化研究所、1986 年
―――編『ポーラ文化研究所コレクション 5　浮世絵美人くらべ』、ポーラ文化研究所、1998 年
―――編『幕末・明治美人帖』、新人物往来社、2002 年
堀七蔵「熊になるお化粧」『少女の友』、実業之日本社、1914 年 7 月、pp.52-53
本田和子『子どもの領野から』、人文書院、1983 年
―――『女学生の系譜　彩色される明治』、青土社、1990 年
―――『女学生の系譜・増補版　彩色される明治』、青弓社、2012 年
前田愛『近代読者の成立』、岩波書店、1993 年
前田博『ゲーテとシラーの教育思想』、未来社、1966 年
水尾順一『化粧品のブランド史　文明開化からグローバルマーケティングへ』、中央公論社、1998 年
水谷真紀「時局化の少女美―『少女の友』における主筆・作家・言論統制―」『昭和文学研究』53、2006 年、pp.14-24
光井武夫『新化粧品学』、南山堂、1993 年
南博編『大正文化』、勁草書房、1965 年
宮地正人他『ビジュアル・ワイド明治時代館』、小学館、2005 年
三輪田眞佐子『女子の本分』、国光社、1894 年
―――『女子教育要言』、国光社、1897 年
―――「女品論(天)」『女鑑』、国光社、1900 年
―――「女品論(地)」『女鑑』、国光社、1900 年
―――『人間の記録 167　三輪田眞佐子―教へ草/他』、日本図書センター、2005 年
村井弦斎『婦人の日常生活法』、実業之日本社、1907 年
村澤博人『美人進化論　顔の文化誌』、東京書籍、1987 年
―――「「化粧」という文化」東洋大学井上円了学術センター編『Satya：サティア：あるがまま』44 号、2001 年、pp.20-23
村澤博人・津田紀代編『化粧史文献資料年表』、ポーラ文化研究所、1979 年
村田孝子『結うこころ　日本髪の美しさとその型：江戸から明治へ』、ポーラ文化研究所、2000 年
―――『婦人たしなみ草：江戸時代の化粧道具』、ポーラ文化研究所、2002 年
村田孝子編著･駒田牧子翻訳『近代の女性美：ハイカラモダン･化粧･髪型 = Female beauty

in modern Japan：makeup and coiffure』、ポーラ文化研究所、2003 年
桃谷順天館創業百周年記念事業委員会編『株式会社桃谷順天館創業百年記念史』、桃谷順転館、1985 年
森田優三「物価百年史の一資料―『週刊朝日・値段の風俗史』所収資料に基づく一試算―」、『金融経済』創刊 200 号記念号、1983 年、pp. 255-303
文部省編『学制百年史』、1972 年
安蔵裕子・小泉真貴子「「モダン・ガール」にみる服飾文化」『學苑』No.815、2008 年、pp.98-115
山田東明『洋式小物雑種裁縫新書』、文錦堂、1907 年
山本芳美『イレズミの世界』、河出書房新社、2005 年
横山學「女子教養書　弘化版『女重宝記』と髙井蘭山」江森一郎監修『江戸時代女性生活研究（江戸時代女性生活絵図大事典　別巻）』、大空社、1994 年、pp.100-114
吉田熊次『系統的教育学』、弘道館、1908 年
米澤泉『コスメの時代：「私遊び」の現代文化論』、勁草書房、2008 年
ラスキン、ジョン『女子の本分』（下田次郎訳）、金港堂、1908 年
リブラ、タキエ・スギヤマ『近代日本の上流階級：華族のエスノグラフィー』世界思想社、2000 年
若桑みどり『皇后の肖像―昭憲皇太后の表象と女性の国民化』、筑摩書房、2001 年
―――『イメージを読む』、筑摩書房、2005 年
和田博文『資生堂という文化装置』、岩波書店、2011 年
渡部周子『〈少女〉像の誕生　近代日本における「少女」規範の形成』、新泉社、2007 年
「下田歌子小伝」（発行年不明）,"実践女子大学・実践女子大学短期大学部",
<http://www.jissen.ac.jp/idea_and_tradition/shimoda_utako/biography/index.html>2016 年 3 月 24 日閲覧
「社名の由来」（発行年不明）,"資生堂",
<https://www.shiseidogroup.jp/company/past/company-name/>2016 年 3 月 24 日閲覧